

長野県中野市

高遠山古墳

発掘調査概報

— 2000. 3 —

中野市教育委員会

(昭和56年 松澤芳宏氏撮影)

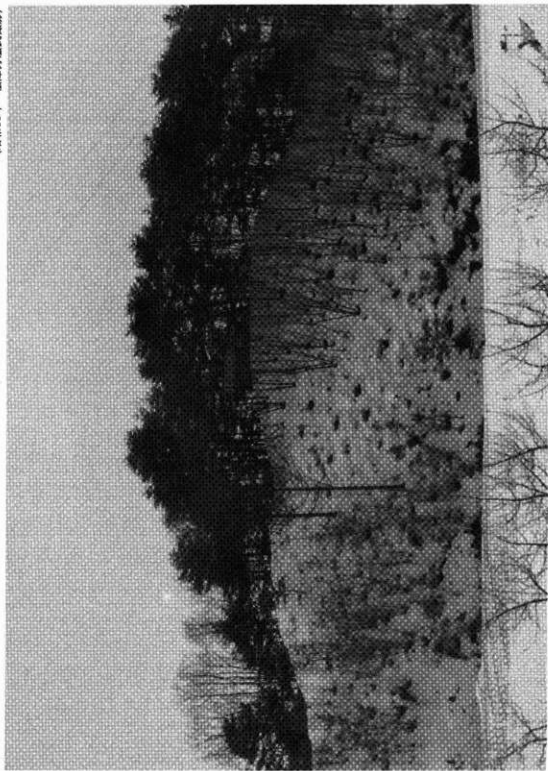


写真1 高遠山古墳 (東方より望む)

刊行にあたって

中野市の東南部は、東部山地から延びた数々の尾根によって、多くの小扇状地地形を形成しています。更科・高遠地区も、そんな尾根の一つである高遠山によって画された地区です。高遠山古墳は、この高遠山の先端に築造されています。墳頂部からは、広大な延徳田圃や中野市街地が一望に見渡せ、この地に古墳を築造した古代人の息吹を、真近に感じられる気がします。

この高遠山古墳から隣の尾根を挟んで、南に位置する間山地区には、縄文・弥生・古墳・平安・中世の各時代にわたって営まれた間山遺跡があります。昭和初年以來から学会に知られ、数次にわたる発掘調査を中野市教育委員会が行っています。また、古墳から向いの別の尾根上には、1925年に調査され、出土品の一部が東京国立博物館に保管されている著名な金鑑山古墳が築造されています。

高遠山古墳は1997・1999年の2ヶ年にわたって発掘調査が行なわれました。この報告書は、この2ヶ年の発掘調査の成果をまとめたものであります。調査の結果、高遠山古墳は、長野県最古の前方後円墳であり、東日本でも重要な古墳であることが明らかとなりました。貴重な古墳であることから現状保存に決まりました。

近年、弥生時代から古墳時代へと移り変わる日本の古代国家形成期における中野市の様相が、安源寺遺跡・七瀬遺跡・間山遺跡等の発掘調査の成果で明らかになりつつあります。善光寺平南部が中心と考えられていた長野県における古代国家形成に、実は善光寺平北部も重大な役割を果たしているという新たな視点であります。その事は、当地域が長野県でも多量の東海地方・北陸地方の土器が出土していることから推測されます。このような状況の中で、今回の高遠山古墳における発掘調査の成果は、この視点をさらに裏付けるものとして注目されるに至りました。

発掘調査は2ヶ年にわたり行ないましたが、今年度の調査につきましては指導委員会を設置し、諸先生の御指導をいただくことで、多大な成果を納めて終了することができました。また、地元高遠・更科区の皆さん、発掘調査にあたっていただいた作業員の方々には多大な御協力をいただき、厚く御礼を申し上げて報告書の刊行にあたっての挨拶とさせていただきます。

平成12年3月

中野市教育委員会
教育長 宮川 洋一

例 言

1. 本報告書は、長野県中野市高遠地区宅地造成のための採土にかかわる、高遠山古墳の発掘調査成果を報告したものである。

2. 調査主体 長野県中野市教育委員会

3. 高遠山古墳所在地 長野県中野市新野更科境

4. 発掘調査期間

第1次発掘調査 1997年11月1日～12月24日

第2次発掘調査 1999年6月14日～11月31日

5. 発掘調査の組織（敬称略）

第1次発掘調査 調査主任 中島庄一
調査員 池田実男・関 武
作業員 池田良高・今井百合子・坂口二郎・小林定子・関 利夫
滝沢嘉一郎・竹田保夫・徳永徳一・中林善一・山岸万次郎

第2次発掘調査 指導委員会 桐原 健（長野県考古学会会長）
岩崎卓也（東京家政科大学教授）
関 孝一（中野市文化財保護審議会委員）
小林秀夫（長野県埋蔵文化財センター調査部長）

調査主任 中島庄一
調査員 片桐千亜紀
作業員 池田良高・岩戸雅彦・竹田保夫・都筑次郎・中林善一
樋口洗一・樋口昌良・藤田紀國・古畑照男・宮崎光平
森山好夫・山岸万次郎・山崎秋雄・山本直治・湯本昭治

6. 報告書作成の分担

執 筆	中島庄一	第1章第1節
	土屋 積（長野県埋蔵文化財センター）	第4章第2節2・第3節2
	片桐千亜紀	第1章第2節、第2章、第3章、 第4章第1節・第2節1・3、 第3節1・3、第5章、第6章
遺物実測	土屋 積（長野県埋蔵文化財センター）・山岸美春・山本麻由美	
遺物拓本	山岸美春	
土器接合	片桐千亜紀・関 武	

遺物トレース 山岸美春・山本麻由美

遺構トレース 山岸美春・山本麻由美

遺構・遺物写真 中島庄一・片桐千亜紀・竹田保夫

段組・構成 中島庄一・片桐千亜紀・岩戸雅彦・山岸美春・山本麻由美

7. 長野県埋蔵文化財センターの土屋積氏には、発掘調査から副葬品の実測・執筆に至るまで多大な御指導・御協力をいただいた。厚く御礼申し上げます。
8. 発掘調査から報告書作成までに、貴重な御指導・御協力をいただいた方々。(敬称略・順不同)
岩崎卓也・大塚初重・桐原 健・西谷 正・石野博信・赤塚次郎・木下正史・笹沢 浩
高橋 桂・土屋 積・矢島宏雄・青木一男・上村 透・新井 悟・鈴木一有・伊藤龍三
大野淳也・高木場万里・伊藤 潔・松本和子・田中 祐・中屋克彦・大西智和・松沢芳宏
9. 出土遺物・遺構の図面・拓本・写真等は、長野県中野市歴史民俗資料館で保管している。

目 次

第1章 発掘調査の概要

第1節 調査にいたる経緯

第2節 調査の概要と経過

1. 第1次発掘調査

2. 第2次発掘調査

第2章 自然環境と古墳の立地

第1節 中野市の自然環境

第2節 高遠山古墳の立地

第3節 古墳時代の遺跡

1. 古墳と遺跡の分布

2. 主な古墳と遺跡の概要

第3章 墳丘の発掘調査

第1節 墳丘削減以前の調査

第2節 墳丘の現状と形態

第3節 墳丘の構造と築造過程の復元

1. 調査の方法

2. 各トレンチの層位

3. 墳丘の構造

4. 墳丘築造過程の復元

第4章 主体部の発掘調査

第1節 墓壇の様子

1. 調査の方法

2. 主体部の検出経過

3. 墓壇の構造

4. 棺の配置と新旧関係

第2節 第1号棺の様子

1. 第1号棺の構造

2. 第1号棺の副葬品

3. 第1号棺構築過程の復元

第3節 第2号棺の様子

1. 第2号棺の構造

2. 第2号棺の副葬品

3. 第2号棺構築過程の復元

第4節 墓壇に伴う遺構

第5章 土 器

第1節 出土状況

第2節 詳細

1. 在地系土器

2. 外来系土器

第6章 ま と め

第1節 調査の成果

第2節 今後の課題

表・挿図目次

- | | |
|----------------------------------|--------------------|
| 第1図 高遠山古墳の墳丘 (1997年) | 第22図 墳丘計測値 |
| 第2図 中野市の自然環境 | 第23図 高遠山古墳調査全体図 |
| 第3図 高遠山古墳の位置 | 第24図 トレンチ実測図 (1) |
| 第4図 中野市所在古墳の分布 | 第25図 トレンチ実測図 (2) |
| 第1表 中野市所在古墳 (1) | 第26図 墳丘築造過程の復元 |
| 第2表 中野市所在古墳 (2) | 第27図 主体部第1検出面 |
| 第5図 中野市所在古墳時代遺跡の分布 | 第28図 主体部第2検出面 |
| 第6図 林畔1・2号墳の墳丘 | 第29図 主体部第3検出面 |
| 第7図 山の神古墳の墳丘 | 第30図 主体部第4検出面 |
| 第8図 七瀬双子塚古墳の墳丘 | 第31図 墓壇全体図 |
| 第9図 紫岩古墳の石室の墳丘 | 第32図 棺の新旧関係 |
| 第10図 蟹沢古墳の墳丘 | 第33図 第1号棺 |
| 第11図 姥横山古墳の墳丘 | 第34図 第1号棺副葬品の配置 |
| 第12図 金鑑山古墳の墳丘 | 第35図 第1号棺副葬品 |
| 第13図 安源寺遺跡前方後方周溝墓
土器出土状況 | 第36図 第1号棺構築過程の復元 |
| 第14図 安源寺城跡遺跡第1号
前方後方墳丘墓土器出土状況 | 第37図 第2号棺 (1) |
| 第15図 新井大口遺跡出土土器 | 第38図 第2号棺 (2) |
| 第16図 上小田中遺跡出土土器 | 第39図 第2号棺副葬品の配置 |
| 第17図 間山遺跡出土土器 | 第40図 第2号棺副葬品 |
| 第18図 七瀬遺跡出土土器 | 第41図 第2号棺構築過程の復元 |
| 第19図 高遠山古墳削滅以前の墳丘 | 第42図 後円部南北トレンチ出土鉄剣 |
| 第20図 削滅以前の高遠山 | 第43図 主体部に伴う遺構 |
| 第21図 高遠山古墳の墳丘 (1999年) | 第44図 土器出土状況 |
| | 第45図 土器 (1) |
| | 第46図 土器 (2) |

写真目次

- 写真 1 高遠山古墳墳丘（東方より望む）
写真 2 高遠山古墳遠景
写真 3 高遠山古墳墳丘（東方から）
写真 4 後円部墳頂
写真 5 主体部全様（西から）
写真 6 主体部全様（東から）
写真 7 第1号棺（西から）
写真 8 第1号棺（東から）
写真 9 剣・鍔先出土状況
写真10 剣1出土状況
写真11 剣2・鍔先出土状況
写真12 土器出土状況
写真13 ヤリガンナ出土状況
写真14 銅鏃・管玉出土状況

- 写真15 ガラス玉出土状況
写真16 第2号棺（西から）
写真17 第2号棺（東から）
写真18 第2号棺礎床（西から）
写真19 第2号棺礎床（東から）
写真20 第2号棺（南から）
写真21 第2号棺東側小口石
写真22 第2号棺東側小口石立面
写真23 第2号棺西側小口石
写真24 第2号棺西側小口石立面
写真25 鉄斧出土状況
写真26 高坏脚部出土状況
写真27 壺形土器出土状況1

第1章 発掘調査の概要

第1節 調査に至る経緯

1. 昭和63年1月、高遠区役員2名が市役所へ来訪され、高遠山古墳の位置する尾根部分を削平し、駐車場等に利用したいとの旨、開発に際しての諸規則や手続きについての問い合わせがあり、文化財保護法による協議が必要であること、開発方針を早急に明確なものとして、再協議するように指導した。
2. 昭和63年4月、県教育委員会文化課指導主事(2名)、地元学識者(2名)、地元(3名)、市教育委員会担当者(2名)が出席し、現地にて協議を実施した。開発要旨を口頭にて説明を受ける。高遠山古墳の文化財としての重要性を説明し、現状保存をお願いするとともに、応急的な危険防止策を講じるよう指導。
3. 平成元年12月、地主代表より、市長宛、請願書が提出される。県教育委員会文化課並びに市文化財保護審議会会長と今後の対応について協議する。地元へ、正式な協議書を提出するよう依頼する。
4. 平成2年2月、県教育委員会文化課指導主事(2名)、地元学識者、市教育委員会担当者と協議を実施した。古墳の文化財価値を再認識するとともに、現状保存を前提として協議を進めるよう指導を受ける。
5. 平成2年5月、地主より、市教育委員会宛保護協議の依頼書が提出される。
6. 平成2年6月、県教育委員会文化課指導主事(2名)、地元学識者(2名)、地主代表、市教育委員会担当者が出席し、会議を実施した後、現地を確認した。協議の都度、開発目的、規模等の説明が変わってしまうことを指摘し、正確な開発計画を提出するように再度要請。更科区、八ヶ郷水利組合、中部電力など、開発行為を実施するために処理すべき手続きが未解決であることを指摘し、調整を十分とるように要請した。出席した代表が当事者でないため詳細な協議ができず、区へ本日の協議結果を伝え、早急に善処して欲しいと依頼す

る。

7. 平成2年6月、現地にて、採土業者、市教育委員会担当者と現状を確認し、保護を要請する。
8. 平成2年10月、高遠地区公会堂において協議を実施した。再度、古墳の重要性、文化財保護法による手続きを説明し、理解を求めた。
9. 平成7年度頃より、崖面等の危険性を考慮し、内部的には危険防止の為に、記録保存の方向で進めるとの結論に達した。県教育委員会文化課に相談し、危険防止のためであれば、記録保存もやむ得ないとの調整を行う。
10. 平成8年秋、彩土業者から古墳の部分を平らにし、宅地造成したい旨の申し入れがあった。記録保存のための発掘調査を実施する。調査費については彩土業者が負担するという事で了解される。
11. 平成9年4月、文化財保護法第57条の規定により、文化庁長官あてに高遠山古墳の現状変更の届出が提出され、受理された。この時点で、県教育委員会文化課と協議し、再度記録保存を確認する。ただし、発掘調査を実施し、学術的な価値が高いということが明らかになれば、再協議することとした。
12. 平成9年4月、第1次発掘調査を開始するが、地元地区から開発協議が整っていないという旨、連絡があり、地主及び施工者に至急調整するよう指示するとともに、それが整うまで調査を中断することとした。また、この頃、地元研究者から保存すべきではないかという意見がよせられた。
13. 平成9年11月、開発協議が整ったため調査を再開する。調査を進めるところ、発見された土器から、長野県で最古の前方後円墳である可能性がでてきた。
14. 平成9年12月、内部調整会議をもつ。極めて重要な古墳を市の独断で発掘調査することはできない。然るべき手続きをとり、その善後策を検討する。古墳時代研究の然るべき先生に見てもらふことにする。
15. 平成9年12月、高遠地区公会堂にて、地主及び施工者へ説明を行う。大変貴重な古墳である可

能性が高いので、然るべき先生に見てもらおう。場合によっては現状保存ということもあるかもしれない。いずれにしても、平成9年度中には終了しない旨、説明し、了解を得る。

16. 平成10年3月、岩崎卓也先生に依頼し、現地を視察して頂いた。また、出土した土器についても鑑定していただいた。その結果、長野県最古であり、これまでの長野県の通説をかえる可能性のある前方後円墳の可能性が極めて高く、大変貴重なものであるという指摘を受ける。
17. 平成10年3月、県教育委員会文化課に岩崎卓也先生に現地を視察して頂いた旨を伝え、今後の対応について協議。中野市教育委員会は事前調査を前提として、検討していることを伝える。
18. 平成10年4月、県教育委員会文化課と協議。事情については了解した。県教育委員会文化課も記録保存はやむ得ないと考える。ただし、調査が進行中に極めて重大な発見や所見が得られた場合には、高遠山古墳の保護について再協議する。実際の調査については、第三者的な立場の発掘調査指導委員会のようなものを設置するよう配慮して欲しい、という指導を受ける。
19. 平成12年6月、発掘調査指導委員会を発足し、発掘調査を開始する。

第2節 調査の概要と経過

1. 第1次発掘調査(1997年)

調査概要

1997年の第1次発掘調査は、調査員池田実男・関武が行なった。発掘調査は1997年11月4日に始まり、12月24日に終了した。

本年度の調査は、すでに採土によって破壊をうけた墳丘の再実測、及びトレンチ掘りによる古墳の性格の把握を目的として行なった。

まず、調査を円滑に進めるため、墳丘の樹木の伐採作業を行い清掃をした。

トレンチは後円部の主軸及び、それに直行させたものを設定した。さらに墳丘の裾部に11ヶ所、計14ヶ所にトレンチを設定し調査を始めた。

また、50cmごとに等高線を引き、墳丘の再実測

を行なった(第1図)。

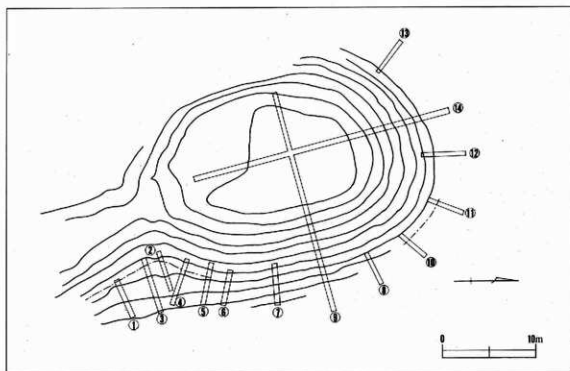
約2ヶ月にわたる調査の結果、墳丘形態については、前方後円墳であることが確認された。

また出土遺物は、弥生時代後期後半の系譜をひくと考えられる箱清水系の土器片がトレンチより出土、さらに東海系の高坪脚部が1点出土した。

それによって高遠山古墳は、古墳時代初頭における中野市の動向を考えるうえで重要な古墳であること、また長野県における最古の前方後円墳としての可能性がにわかに強まった。

調査日誌

- 11月4日
午前中に機材搬入等の準備。午後より墳丘部の伐採作業を始める。
- 11月5日
墳丘部の伐採作業を行なう。
- 11月6日
午前中は伐採作業の続き。午後より表層剥ぎを始める。
- 11月7日
14箇所のトレンチを設定し、掘り始める。
- 11月10日
トレンチ掘り。
- 11月11日
トレンチ掘り。墳丘の平板実測を始める。
- 11月12日
トレンチ掘り。墳丘の平板実測。
- 11月13日
トレンチ掘り。墳丘の平板実測。墳頂部のレベルを下げる。
- 11月14日
トレンチ掘り。墳丘の平板実測。墳頂部のレベルを下げる。
- 11月18日
トレンチ掘り。墳丘の平板実測。墳頂部のレベルを下げる。
- 11月19日
トレンチ掘り。墳丘の平板実測。墳頂部のレベルを下げる。
- 11月20日
トレンチ掘り。墳丘の平板実測。中世の土壌層を検出した。



第1図 高遠山古墳の墳丘 (1997年)

11月21日

トレンチ掘り。墳丘の平板実測。墳頂部のレベルをさらに下げる。

11月25日

トレンチ掘り。平板による土器の取り上げ。中世の土壙墓から円筒形の銅製品が出土。

11月27日

トレンチ掘り。古墳の括れ部分が確認された。墳丘の平板実測。

11月28日

トレンチ掘り。墳丘の平板実測。

12月1日

墳頂部で確認した黒い落ち込みの下を、後円部南北トレンチにおいて掘り下げたところ、箱清水系の土器片及び東海系の高坏脚部が出土した。

12月2日～12月22日

各トレンチのセクションを実測。

12月24日

各トレンチ及び墳頂部にブルーシートを被せ、発掘調査は終了。

2. 第2次発掘調査 (1999年)

調査概要

1999年の第2次発掘調査は、調査員片桐千重紀が行なった。発掘調査期間は1999年6月14日～11月30日までの約4ヶ月半行なった。

高遠山古墳は、1999年度の発掘調査終了後、採土によって完全に消滅する予定であった。そのため、発掘調査を完全に終わらせるべく、主体部及び墳丘構造の解明を目的とした調査を行なった。

始めに主体部の調査から行ない、次に墳丘の調査を進めていく、という方法をとった。

墳頂部に小さなトレンチを設定して、墓壙の確認及び検出から始める。墓壙内からは2つの主体部を発見し、第1号棺・第2号棺と名づけた。第1号棺は粘土、第2号棺は木炭を槨として用いていた。その後、後円部の南北トレンチより主体部に伴う遺構も確認された。

2つの主体部と、その副葬品を検出後、主体部の調査を一旦保留し、墳丘の括れ部と前方部の調査を始めた。1997年度に調査した、後円部主軸の南北トレンチを、前方部の主軸に沿って延長し、地山まで掘り進めた。

さらに、前方部の掘部を調査するために、平成9年度に設けたトレンチのうち1つを、前方部墳頂まで直行するように延長し、地山まで掘り進めた。これらのトレンチと平成9年度に調査したトレンチの層序をもとに、墳丘括れ部及び前方部の検出を行った。

ここまでの調査を終えた後、再び墳丘の実測調査を行なった。

以上の調査の結果、墓壇は石を用いて壁を構築し、コの字状を呈すること。墓壇内には主体部が2つあり、第1号棺が粘土椀、第2号棺が木炭椀を採用していること、主体部にはおそらく葬送儀礼に関係する遺構がともなっていること等が明らかになった。

高遠山古墳は1997・1999年度の2ヶ年にわたる発掘調査で、長野県最古、東日本でも最古級の前方後円墳という年代の位置づけがほぼ明確となった。さらに、主体部の調査で、全国的に見てもこの時期としては極めて例の少ない木炭椀が発見され、その重要性が指摘されるとともに「保存」を検討することになった。そのため発掘調査は当初の予定を変更し、主体部の検出と墳丘括れ部、及び前方部の検出を行なった段階で一旦終了した。そのため、今回の調査では高遠山古墳全様の完全な解明には至っていない。

高遠山古墳は現在主体部の埋め戻しを行ない、保存している。

調査日誌

6月14日 月曜日

午前中にテント設置等の準備。午後から主体部の調査を開始。墓壇の検出を目的に、第1次調査で確認した後円部の南北・東西のトレンチに加え、新たに8箇所の特レンチを後円墳頂部に設定。

6月15日 火曜日

新たに設定したトレンチより、石を並べたような痕跡が確認できたため、それを目標に墳頂部のレベルを全体的に掘り下げた。

6月16日 水曜日

昨日確認した石群が方形に並ぶことを確認。この時点ではまだ遺構と判断できなかった。

6月21日 月曜日

方形に並ぶ石群をより明確に検出するため、レベル

を下げた。南側では石群が明確に検出されなかった。したがって石群は北・西・東の3方を方形に並ぶ形となった。

6月22日 火曜日

東側石群が南に向かってどこまで続いているか確認するため、新たにトレンチを設置したが、確認することはできなかった。

6月23日 水曜日

墳頂部のレベルをさらに掘り下げる。

6月24日 木曜日

調査開始当初から確認されていた溝状の黒色土の中から土器片が出土。細かい破片で形態はわからない。この黒色土は、後円部南北セクションでV字状の落ち込みを呈している。

6月25日 金曜日

石群の検出を一旦保留。墳頂部の清掃を行ないもう1度墓壇の落ちこみ検出を試みたが、明確にはわからなかった。

6月29日 火曜日

墓壇と考えられるプランを確認。石群との関係はわからなかったが、これ以上掘り進めることが困難になったため、石群を取り除くことにした。

7月2日 金曜日

墓壇内の掘り下げを行なう前に、墳頂部の清掃を行ない、石群の実測・写真撮影をする準備をした。

7月5日 月曜日

墳頂部の清掃。

7月6日 火曜日

墳頂部石群の写真撮影。古墳全体が草だらけになってきたため、草刈りを行なう。また、古墳に登る道が石で滑って危険なため、階段を作った。

7月7日 水曜日

後円部北側に並ぶ石群の実測。

7月8日 木曜日

後円部北側に並ぶ石群の実測。

7月9日 金曜日

後円部東側に並ぶ石群の実測。

7月13日 火曜日

後円部東側・西側に並ぶ石群の実測。

7月14日 水曜日

石群の実測終了。清掃を行なって平面を観察したが、墓壇のプランは明確に確認できなかった。

7月16日 金曜日

墳頂部のレベルを下げるため、それに支障をきたす石群を取り上げる。

7月19日 月曜日

石群の取り上げ。

7月21日 水曜日

墳頂部のレベルを下げる。3方を囲んでいた石群のうち、北側は石を積み上げた壁となっていることが明確になった。しかし、東西でそれは確認できなかった。墳頂部は礫が多量に混入していることを確認。

7月22日 木曜日

新たに検出される石を残しつつ、墳頂部のレベルを下げる。

7月23日 金曜日

墓壇と考えられる落ちこみを検出。北側は石を積んで壁を造っており、他の3方はそれを行っていないと判断した。

7月26日 月曜日

23日検出した墓壇のプランをもとに墓壇内の掘り下げを行なう。

7月27日 火曜日

木棺跡のプランを確認するために、清掃を行なった。後円部南北ベルトについても検討した結果、新たにV字状に落ち込む土層が確認できた。以前から考えていた主体部の他に、もう1つ別の主体部が存在する可能性がでてきた。

7月28日 水曜日

別の主体部の存在を確認するため、後円部南北トレンチの掘り下げを行なう。粘土を貼った層が確認でき、U字状に落ち込んでいた。また、以前から主体部があると考えていた場所からは炭を確認。粘土が検出されたほう(粘土層)を1号棺、炭が検出されたほう(木炭層)を第2号棺と名づけた。

7月29日 木曜日

主体部の検出を目標に墓壇内の掘り下げを行なう。

7月30日 金曜日

墓壇内の掘り下げ。後円部東西ベルトが第1号棺の上面になっていたため、その検出に支障をきたさないよう、除去することにした。

8月2日 月曜日

墓壇内の後円部東西ベルトを除去するため、写真撮影及び実測を行なう。

8月3日 火曜日

後円部東西ベルトのセクション実測。

8月4日 水曜日

後円部東西ベルトの実測終了。ベルトを除去する。

8月5日 木曜日

墳頂部中央にあった大きな松の木を撤去し清掃。平面プランで帯状に延びる土(4m×30cmほど)を確認。木棺を被覆した粘土と考える。

8月6日 金曜日

昨日検出した細長く延びる土が、墓壇の壁と判断した東西の壁に入っていたため、壁をさらに奥に広げるために、トレンチを入れた。結果、石を積み上げた壁が東西で確認された。墓壇の北側を形成している石壁が、東西まで続いていると考えた。

8月9日 月曜日

東側の壁を一部けずり、石壁の検出。墓壇を形成する石壁は北側から東側まで続いていることが明らかになった。

8月10日 火曜日

後円部南北ベルトも主体部検出に支障をきたすことになったため、除去することにし、写真撮影および実測を行なう。

8月11日 水曜日

後円部南北ベルトと残っていた後円部東西ベルトを除去する。

8月17日 火曜日

木棺のプランを確認するため墓壇内の掘り下げを行なう。第2号棺の東側より大きな平石が、また、棺の平面プランに添うように石群が集中していた。

8月18日 水曜日

第1号棺と第2号棺の間に確認された細長く延びる土にトレンチをいれ、断面の観察をおこなう。土がマウンド状になっていた。

8月19日 木曜日

墓壇内の掘り下げを行なう。第2号棺の西側から、平らな石が出土。その石が墓壇を構成すると判断した。それまでの東西の壁下に続いていたため、西側の壁及び残っていた東側の壁を写真撮影・実測し、壁を広げる準備をする。

8月20日 金曜日

墳頂部全体の実測。その後、墓壇の西壁を掘りすずめる。石を積んだ壁が検出された。

8月23日 月曜日

墓壇東壁を掘りすすめる。墓壇を構成する石壁が北・西・東の3方を方形に囲うように形成していることを確認。南側では石壁が確認できなかったため、より南側に石壁があると考え、後門部南北トレンチを掘り進めた。南側では石壁を造っていないことが明らかになった。

8月24日 火曜日

第2号棺の平面プラン確認。実測を行なう。

8月25日 水曜日

墳丘全体の清掃。

8月26日 木曜日

第2号棺内掘り下げに支障となる周囲の石群を取り上げる。南北トレンチをさらに掘り下げた結果、第1号棺と第2号棺の間で確認されたマウンド状の土は木棺を被覆する土ではないことが明らかになった。

8月27日 金曜日

後門部南北セクションの観察を行なった結果、第1号棺を形成する粘土層が第2号棺を形成する土層に切られていることが確認できた。したがって、第1号棺は第2号棺より先に埋葬されたことが明らかになった。

8月30日 月曜日

第2号棺周囲の石群の取り上げを行なう。取り上げた石の間から木炭が出土した。

8月31日 火曜日

第2号棺平面プランの写真撮影・実測。

9月1日 水曜日

第2号棺に4本のベルトを設定し、棺内を掘り始める。

9月2日 木曜日

後門部南北ベルト以外の、残りの3本のベルトを写真撮影・実測し除去する。

9月3日 金曜日

第2号棺掘り下げ。床面の木炭層直上より鉄器が2点出土。

9月6日 月曜日

第2号棺を横切る後門部南北ベルトのセクション写真撮影・実測を行なう。後門部南北ベルト除去。第2号棺清掃。木炭床面に赤色顔料がのっていることを確認。

9月7日 火曜日

第2号棺周囲のレールを木炭層まで掘り下げる。東側・西側に積まれている小口石を検出。

9月8日 水曜日

第2号棺内の清掃。棺内に落ち込んだ土を完全に取り

除き木炭層を検出。床面の木炭から鉄斧出土。

9月9日 木曜日

木炭床面に幅10cmほどのトレンチを入れたところ、木炭層の下には丸い川原石が並んでいることを確認。第1号棺の検出作業を始める。墓壇内の北側に4本のベルトを設定。

9月10日 金曜日

第1号棺の検出をするため、墓壇内の掘り下げを行なう。

9月13日 月曜日

第1号棺の検出をするため、墓壇内の掘り下げを行なう。

9月14日 火曜日

第2号棺内を清掃し写真撮影・実測を行なう。

9月16日 木曜日

第1号棺に設定したベルトのセクション写真撮影・実測を行ない、ベルトの除去。

9月20日 月曜日

第1号棺のプラン確認

9月24日 金曜日

午前中台風対策。午後第1号棺内掘り下げ、粘土を目標に床面まで掘り進める。

9月27日 月曜日

第1号棺の後門部南北ベルト除去のため、セクションの写真撮影・実測。

9月28日 火曜日

第1号棺内を清掃、写真撮影・実測。今日より墳丘裾部の調査開始。

9月29日 水曜日

第1号棺の床面が明確に検出できないため、棺の横切るように10cm幅のトレンチを設定。確認していた床面から2cmほど下に純粋な粘土層が確認できたため、その面まで掘り下げる。銅鍔2点出土。

第2号棺床面の木炭を除去し、礎床を検出。

9月30日 木曜日

第1号棺の掘り下げ。新たに銅鍔2点・ヤリガンナ1点・銀鍔先1点出土。銅鍔には木の柄が僅かに残っていた。また、床面には赤色顔料が広くのこっていた。

第2号棺礎床写真撮影。

10月1日 金曜日

第1号棺より鉄剣2点出土。

10月4日 月曜日

第1号棺より管玉4点出土。墳丘裾部の検出作業。
10月5日 火曜日
第1号棺内清掃。墳丘裾部の検出作業。墓域外の後円部南北トレンチを掘り下げる。
10月6日 水曜日
第1号棺清掃。墳丘裾部の検出作業。墓域外の後円部南北トレンチを掘り下げる。
10月8日 金曜日
第1号棺写真撮影・実測。墳丘裾部の検出作業。墓域外の後円部南北トレンチの掘り下げ中に鉄剣出土。
10月12日 火曜日
第1号棺の床面についている赤色顔料を分析用のため採取している途中、赤色顔料の中よりガラス玉が5個出土。墳丘裾部の検出作業。墓域外後円部南北トレンチの掘り下げ。後円部南北トレンチを前方部に向けて延長させた。
10月13日 水曜日
墳丘裾部の検出作業。後円部・前方部南北トレンチの掘り下げ。前方部はすぐに硬い岩盤がでてきた。
10月18日 月曜日
墳丘裾部の検出作業。後円部南側に新たな東西トレンチを設定。
10月19日 火曜日
後円部の南側より、主体部とは別の落ちこみ遺構を確認。主体部に伴っているものと考えた。
10月20日 水曜日
主体部に伴う遺構の掘り下げ。墳丘裾部の検出作業。
10月21日 木曜日
主体部に伴う遺構より数点の土器片出土。墳丘括れ部より数点の土器片出土。
10月22日 金曜日
主体部に伴う遺構の掘り下げ。墳丘裾部の検出作業。
10月25日 月曜日

墓域の石壁実測。墳丘裾部の検出作業。主体部に伴う遺構から埴土が検出。
10月26日 火曜日
墓域の石壁実測。第2号棺の礎床実測。
10月27日 水曜日
墳丘括れ部の検出終了。主体部に伴う遺構の調査終了。
10月29日 木曜日
墓域の石壁実測。第2号棺の礎床実測。実測以外の調査終了。
11月1日 月曜日
道具のかたづけ。
11月2日 火曜日
墓域の石壁実測。
11月4日 水曜日
墓域の石壁実測。
11月5～12日
墳丘の実測開始。374mを最高所として20cm間隔で等高線を引いていく。
11月14日 日曜日
現地見学会
11月15～17日
墳丘の実測。
11月18日 木曜日
墓域及び埋葬施設のエレベーション実測。
11月19日 金曜日
後円部南側のセクション実測。
11月22日 月曜日
後円部南側のセクション実測。
11月29日 月曜日
後円部南側の南北セクション実測。
11月30日 火曜日
墳丘のエレベーション実測。

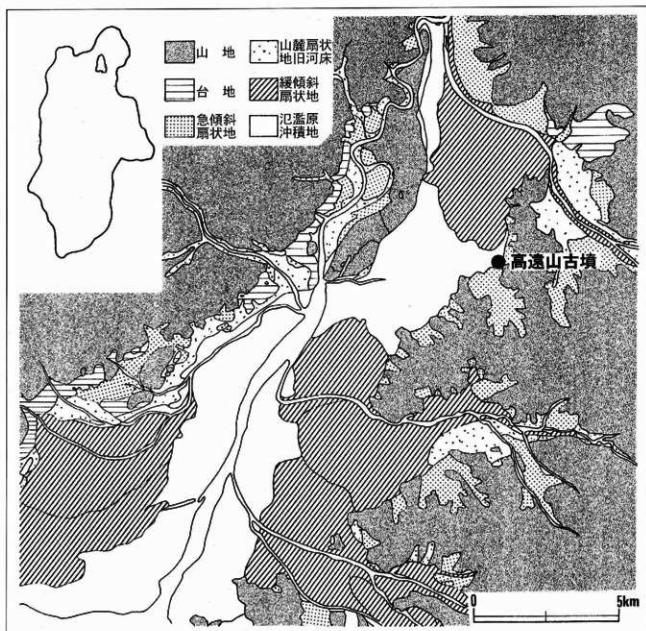
第2章 自然環境と古墳の立地

第1節 中野市の自然環境

高遠山古墳の所在する中野市は、中部高地最大の面積を有する長野盆地の最北端に位置する。長野盆地は善光寺平とも呼ばれ、南北に長い紡錘形状を呈している。盆地のほぼ中央を、長野県と埼玉県・山梨県とを境とする甲武信ヶ岳(2469m)に発源する、国内最長の千曲川(信濃川)が日本海へ向って北流している。盆地の東西は、西部山地、河東山地と呼

ばれる山地によって画され、新潟県、群馬県との県境となる。低地部には東西の山地から流入する河川によって形成された自然堤防や扇状地が発達する。

中野市は北に「高井富士」と別称される高社山(1,351.5 m)がそびえ、東は上信越国定公園の三国山脈に連なる箱山(695 m)、鴨ヶ嶽(688.3 m)、雁出山(786.7m)といった東部山地が盆地縁をなし、西は高丘および長丘丘陵が南北に延びて、中野市を画す。



第2図 中野市の自然環境

高丘・長丘丘陵帯には、旧石器遺跡・縄文遺跡・弥生遺跡・古墳・窯業遺跡等の遺跡が80ヶ所ほど確認され、県指定の栗林遺跡、市指定の七瀬塚子塚古墳等も含まれる。丘陵の背後には、南は立ヶ花の突端から、北は岩井地帯の北部まで、約18kmにわたって千曲川が北流する。

志賀高原から流入する夜瀬川は中野市に流入し、高社山麓の十三崖にそって流れ下り、柳沢において千曲川に合流する。この夜間瀬川により、広大な中野扇状地が形成された。中野扇状地は中野市域の大半を占め、その広さは東西約4km、南北約6kmで、扇頂と扇端の比高差は約150mある。また、その扇端は古来より豊富な湧水に恵まれ、中野市の南部地域を形成する延徳沖低地とともに、稲作の中心地帯をなす。

南部地域を形成する延徳沖低地（海拔330m以下）は、善光寺平で最も低い地域である。中野扇状地と小布施扇状地の中間に位置し、中野市と小布施町を隔す。古来より千曲川の氾濫を受け、住民を悩ませてきた。しかし、この氾濫は一方で多量の沃土を上流から運搬・堆積させ、肥沃な延徳沖低地を造成させた。現在では「延徳田圃」とも呼ばれる稲作地帯である。

以上のように中野市は、周囲を山地や丘陵に囲まれ、千曲川や夜間瀬川といった水源に恵まれた、肥沃な扇状地地形を有する地域と言える。

第2節 高遠山古墳の立地

高遠山古墳は長野県中野市新野・更科境に所在する。中野市の東縁を画する東部山地は、北は箱山(695m)から南へ鴨岳(688.3m)・更科峠・管峠・剣の峯(1,179m)、西へ小池峠・間山峠・山田峠・雁田山(786.7m)へ13.7kmにわたって続いている。

高遠山古墳は、このような東部山地から、肥沃な延徳沖低地に向って尾根を伸ばす高遠山に築造され、後円部を尾根先端に向むけている。標高は高遠山手前の道路で約350m、古墳頂部は374mを測る。

墳頂部からは、眼前に中野扇状地・延徳沖低地が広く見渡せ、北に高社山、西に高丘・長丘丘陵が中野扇状地を挟んで南北に延びており、さらに遠く斑

尾山・妙高山・黒姫山・戸隠山・飯綱山といった、いわゆる北信五岳が展望できる。南西には善光寺平の中心地である長野市まで、底が展開している(第3図)。

周辺には、北側に菅代遺跡・上小田中遺跡、別の尾根を挟んで南側に間山遺跡といった、当該期と考えられる集落遺跡も存在する。また、南西側には同じく東部山地から延びた、別の尾根上に築造された金鐘山古墳も展望できる。

第3節 古墳時代の遺跡

1. 古墳と遺跡の分布

中野市に所在する古墳は、中野扇状地を挟んで西の高丘・長丘丘陵上と、東の東部山地にその大半が集中している。北側の高社山麓にも築造されているが、その数は少ない(第4図)。

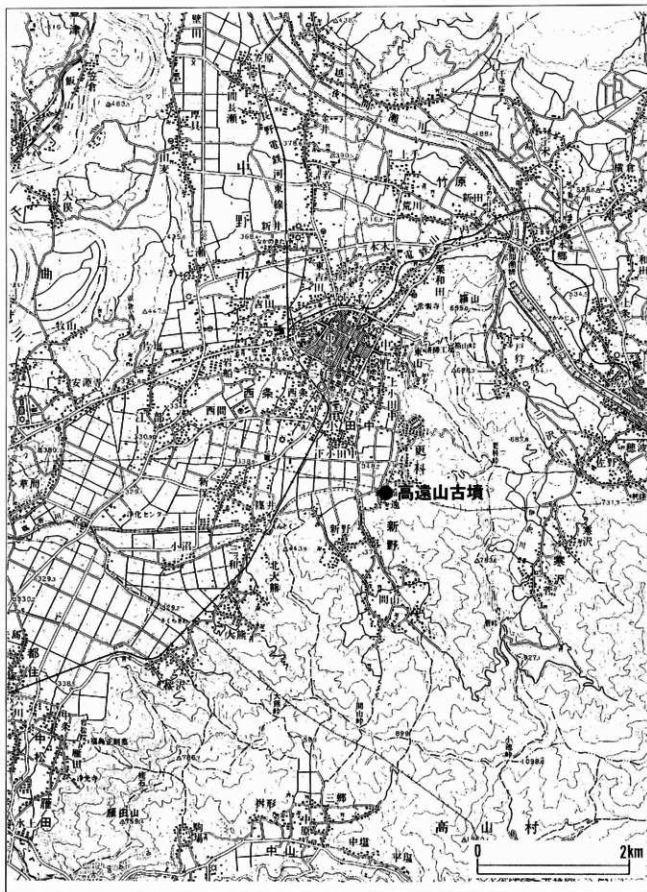
西の高丘・長丘丘陵上には、古墳時代中期に位置づけられる七瀬古墳群を始め、32基の古墳が確認されており、集落遺跡はこの丘陵一帯を囲むように展開している。

この地域は栗林遺跡(第5図11)に代表されるように、弥生時代中期以来の集落遺跡が展開しており、なかでも、栗林遺跡や七瀬遺跡(第5図8)は、弥生時代から古墳時代にかけての住居跡や東海系・北陸系の外來系土器が検出されている(長野県埋蔵文化財センター1994年)。

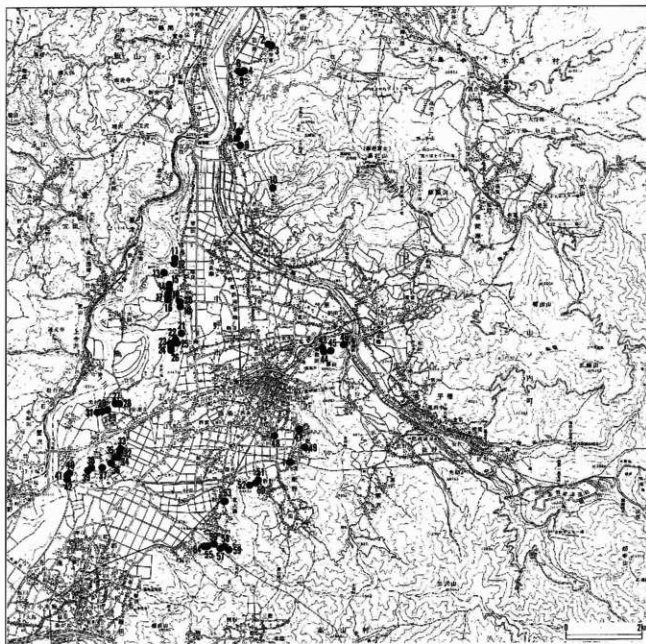
近年、中野市教育委員会による調査で、高丘丘陵南端の安源寺城跡遺跡において前方後方墳丘墓が発見され、弥生時代の後期後半に築造されたことが明らかになった。この墳丘墓は東海系・北陸系の土器が主体として出土するという特徴を持つ(中野市教育委員会1999年)。

前方後方墳丘墓が所在する丘陵直下の丘陵部にある、安源寺遺跡(第5図10)では前方後方円墳墓が古墳時代前期の土器と伴に検出されている(中野市教育委員会1995年)。

高丘丘陵の北に位置する長丘丘陵上では、中瀬古墳群(第4図14~18)や林群1・2号墳(第4図19・20)・山の神古墳(第4図12)といった古墳が築造されている。高丘・長丘丘陵を見渡す低地部に



第3圖 高遠山古墳の位置



- | | | | |
|------------|------------|------------|------------------|
| 1 高道山古墳 | 2 岩井1号古墳 | 3 岩井2号古墳 | 4 日向1号古墳 |
| 5 日向2号古墳 | 6 日向3号古墳 | 7 小丸山古墳 | 8 八幡塚古墳 |
| 9 塚穴古墳 | 10 赤岩古墳 | 11 永峯古墳 | 12 山の神古墳 |
| 13 赤畑古墳 | 14 中畝1号古墳 | 15 中畝2号古墳 | 13 中畝3号古墳 |
| 17 中畝4号古墳 | 18 中畝5号古墳 | 19 林畔1号古墳 | 20 林畔2号古墳 |
| 21 七瀬1号古墳 | 22 七瀬2号古墳 | 23 前山古墳 | 23 七瀬3号古墳 |
| 25 七瀬5号古墳 | 26 七瀬双子塚古墳 | 27 小丸山1号古墳 | 28 小丸山2号古墳 |
| 29 栗林1号古墳 | 30 栗林2号古墳 | 31 栗林3号古墳 | 32 高山1号古墳 |
| 33 高山2号古墳 | 34 社宮町1号古墳 | 35 社宮町2号古墳 | 36 御嶽山古墳 |
| 37 秋葉山古墳 | 38 西山古墳 | 39 京塚古墳 | 40 立ヶ花1号古墳 |
| 41 立ヶ花2号古墳 | 42 立ヶ花3号古墳 | 43 栗和田1号古墳 | 44 栗和田2号古墳 |
| 45 栗和田3号古墳 | 46 紫岩古墳 | 47 姥懐山古墳 | 48 光念寺古墳 |
| 49 上の山古墳 | 50 新野1号古墳 | 51 新野2号古墳 | 52 金鐘山古墳 |
| 53 えびす山古墳 | 54 桜沢1号古墳 | 55 桜沢2号古墳 | 56 桜沢3号古墳 (蟹沢古墳) |
| 57 桜沢4号古墳 | 58 桜沢5号古墳 | 59 桜沢6号古墳 | |

第4図 中野市所在古墳の分布

第1表 中野市内所在古墳(1)

図版番号	古墳名	所在地	立地	墳形	規模(m)		備考
					長さ	高さ	
1	高遠山古墳	更科	山頂	前方後円墳	全長 51.2m 後円径 32.8m 前方幅 17.2m	4m 2.5m	前方部が10mほど削減の為、規模は推定
2	岩井1号古墳	岩井	山麓	円墳	径 15m	3.5m	
3	岩井2号古墳	岩井	山麓	円墳	径 11m	1.7m	
4	日向1号古墳	田上	山頂	円墳	径 25m	3.8m	葦石が露出している
5	日向2号古墳	田上	山頂	円墳	径 7.7m	0.8m	
6	日向3号古墳	田上	山頂	円墳	径 11m	1.7m	
7	小丸山古墳	柳沢	山麓	円墳	径 13.5m	1m	
8	八幡塚古墳	柳沢	山麓	円墳	径 15m	1.2m	後世経塚として利用
9	塚穴古墳	柳沢	山麓	円墳			
10	赤岩古墳	赤岩	山麓				墳丘は消滅し推定位置、遺物のみが残る
11	永峰古墳	厚貝	丘陵上	円墳	径 13m	1.7m	
12	山の神古墳	厚貝	丘陵上	円墳	径 32m	4m	市指定史跡
13	赤畑古墳	厚貝	丘陵上	円墳	径 20m	2.3m	
14	中畝1号古墳	田麦	丘陵上	円墳			
15	中畝2号古墳	田麦	丘陵上	円墳			
16	中畝3号古墳	田麦	丘陵上	円墳			
17	中畝4号古墳	田麦	丘陵上	円墳			
18	中畝5号古墳	田麦	丘陵上	円墳			
19	林畔1号古墳	田麦	丘陵上	円墳?	径 23m	4m	市指定史跡
20	林畔2号古墳	田麦	丘陵上	円墳	径 27m	2.7m	
21	七瀬1号古墳	七瀬	丘陵上	円墳	径 6m	1m	
22	七瀬2号古墳	七瀬	丘陵上	円墳	径 16m	1.5m	
23	前山古墳	七瀬	丘陵上	円墳	径 15.5m	2.4m	
24	七瀬3号古墳	七瀬	丘陵上	円墳	径 17m	0.7m	
25	七瀬5号古墳	七瀬	丘陵上	円墳	径 17m	1.8m	
26	七瀬双子塚古墳	七瀬	丘陵上	前方後円墳	全長 78m 後円径 48m 前方幅 25m	7.5m 6.5m	県指定史跡
27	小丸山1号墳	安源寺	丘陵上	円墳	径 6m	0.6m	
28	小丸山2号墳	安源寺	丘陵上	円墳	径 6m	0.8m	
29	栗林1号古墳	栗林	段丘上	方墳	1辺 11m	2m	
30	栗林2号古墳	栗林	段丘上	円墳	径 8.8m	0.9m	
31	栗林3号古墳	栗林	段丘上	円墳			
32	高山1号古墳	草間	丘陵上	円墳	径 20m	2.3m	
33	高山2号古墳	草間	丘陵上	円墳	径 21m	2.5m	
34	社宮司1号古墳	草間	丘陵上	円墳	径 3.3m	1m	
35	社宮司2号古墳	草間	丘陵上	円墳	径 2.5m	0.5m	
36	御獄山古墳	草間	丘陵上	円墳	径 23m	4.2m	
37	秋葉山古墳	草間	丘陵上	円墳	径 10m	2m	
38	西山古墳	草間	丘陵上	円墳	径 11m	1.3m	
39	京塚古墳	草間	丘陵上	円墳	径 30m	2.2m	
40	立ヶ花1号墳	立ヶ花	丘陵上	円墳	径 14.5m	2.6m	

第2表 中野市内所在古墳(2)

図版番号	古墳名	所在地	立地	墳形	規模(m)		備考
					長さ	高さ	
41	立ヶ花2号墳	立ヶ花	丘陵上	円墳	径31.6m	4.6m	
42	立ヶ花3号墳	立ヶ花	丘陵上	円墳	径20.6m	3.5m	
43	栗和田1号墳	中野	山頂	円墳	径21m	2m	
44	栗和田2号墳	中野	山頂	円墳	径7m	1.3m	
45	栗和田3号墳	中野	山頂	円墳	径6m	0.5m	
46	紫岩古墳	中野	山頂	円墳	径19m	4m	墳丘は消滅し、横穴式石室のみが残る
47	姥懐山古墳	上小田	山麓	円墳	径17m	1.5m	
48	光念寺古墳	円墳	扇状地	円墳			現在墓地となっている
49	山の神古墳	更科	山頂	円墳			
50	新野1号古墳	新野	山麓	円墳	径16m	2.5m	
51	新野2号古墳	新野	山麓	円墳	径13m	2.5m	
52	金鯉山古墳	新野	山頂	円墳	径21m	2.6m	市指定史跡
53	えびす山古墳	北大熊	山麓	円墳	径3m	3m	前方後円墳の可能性あり
54	桜沢1号古墳	桜沢	山頂	円墳	径5m	1.6m	
55	桜沢2号古墳	桜沢	山頂	円墳	径7m	0.6m	
56	蟹沢古墳	桜沢	山頂	前方後円墳	全長40m 後方幅26m 前方幅12.8m	4m 2m	市指定史跡
57	桜沢4号古墳	桜沢	山頂	円墳	径20m	3m	
58	桜沢5号古墳	桜沢	山頂	円墳	径20m	3m	
59	桜沢6号古墳	桜沢	山頂	円墳	径18m	2.5m	

は、古墳時代中期の祭祀遺跡である新井大ロフ遺跡(第5図6)が存在する。

中野市の東側、東部山地から中野扇状地・延徳沖低地に向って伸びる尾根上には、高遠山古墳(第4図1)を始めとして、姥懐山古墳(第4図47)や金鯉山古墳(第4図52)、蟹沢古墳(第4図56)に代表される桜沢古墳群(第4図54～59)が築造され、その数は18基を数える。

大規模な集落遺跡として、高遠山古墳から尾根を挟んで南側にある、間山遺跡(第5図20)が古くから知られている。ここからも弥生時代後期後半から古墳時代初期の東海系・北陸系の土器が出土している。

さらに、間山遺跡ほどの規模ではないが、姥懐山古墳西方の低地部に普代遺跡(第5図14)や上小田中遺跡(第5図15)・下小田中遺跡(第5図16)といった古墳時代の遺跡が確認されている。

中野市の北側には、高社山麓に岩井1・2号墳(第4図2・3)や小丸山古墳(第4図7)等、8基の古墳が確認されている。しかし、周囲の神宮寺遺跡・間長瀬遺跡といった遺跡があるが、本格的な発掘調査のメスが入っていないため、その様相は今明らかとはいえず、今後の調査成果を待ちたい。

以上、中野市における古墳と遺跡の分布状況を概観してきた。冒頭で述べたように中野市では、高社山麓に築造された若干の古墳を別にすれば、古墳は西側の丘陵と東側の山地に集中して築造され、集落遺跡は、山間の扇状地にある間山遺跡を除けば、古墳の築造された丘陵や山地周辺の低地部に展開している状況が観察できる。

このような分布状況から、弥生時代後期から古墳時代にかけて中野市には、西側の高丘・長丘陵周辺地域と東側の東部山地周辺地域を中心とした集団の存在が浮かび上がる。



- | | | | |
|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 1 田上寺の前遺跡 | 2 神宮寺遺跡 | 3 神宮寺下遺跡 | 4 間長瀬遺跡 |
| 5 笠原向フ原遺跡 | 6 新井大ロフ遺跡 | 7 姥ヶ沢遺跡 | 8 七瀬遺跡 |
| 9 大徳寺遺跡 | 10 安源寺遺跡 | 11 栗林遺跡 | 12 立ヶ花城跡 |
| 13 島軒割遺跡 | 14 普代遺跡 | 15 上小田中遺跡 | 16 下小田中遺跡 |
| 17 間瀬場遺跡 | 18 会下沢遺跡 | 19 南沢北遺跡 | 20 間山遺跡 |

第5図 中野市所在古墳時代遺跡の分布

2. 主な古墳と遺跡の概要

林群1号墳

本古墳は中野市田麦に所在し、中野扇状地の北西縁部を形成する丘陵地形の一部を成す長丘丘陵上に立地する。本古墳から北に60mの間隔を取って林群2号墳が築造されている。また、この丘陵上南方の尾根最高部には七瀬双子塚古墳が築造されている。視界は東に開け、中野扇状地が展望できる。

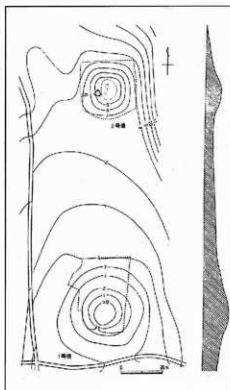
本古墳は盛土の円墳で、径23m、高さ4mを計る。封土の表面は川原石をもって葺石されている(第6図)。1945年に甘藷貯蔵穴を設けた際に内部主体が発見された。発見者の談によると、主体部の石室の規模は東西2m、南北1m前後で、南の側石は安山岩の広い面を立てて置かれていたが、ほかの3面は瓦葺きのごとく平石が積み重なっていた。天井には数枚の平石が並べてかぶさっていた。石室の高さは1m前後で、内面は赤色塗彩されていた。石室の裏積みに礫は用いられず、赤土や粘土が混ざっていたという。

この報告を受けた小野勝年氏は、この石室は本来層根型式であったのが、一方に圧せられて、傾いた結果このような状況を呈したと判断した。

出土物は剣・槍・蕨手形鉄器・刀子・鉄鎌・短甲・馬具・砥石・土師器壺・玉類がある。鉄剣は短剣2口、長剣5口剣身に鞘木の腐蝕が残る例もある。鉄槍は2口である。鉄鎌は約50個で長頭の尖根式が大部分を占め、平根式はわずかに1個である。短甲は三角板鉄留で、後胴部の「かたあげ」の部分が残る。馬具は鞆の一式で、二連式の銜が残っていた。砥石は粘板岩質で、不整の長方形。断面四角形で磨き減りしている。土師器の壺は4個で、表面は丹を薄く塗って艶磨きしている。玉類では、ガラス製と滑石製の小玉の類が数十個出土したといわれている。

林群2号墳

本古墳は中野市田麦に所在し、林群1号墳の北に60mの間隔をとった同一尾根上に立地する。外観は簡単な戴頂円錐形、ないし方形状で、径27m、高さは傾斜面に築かれている関係上、南側から測ると2.5m、北側では4mとなっている。したがって北側から見るとかなり大きくみえる(第6図)。墳丘の



第6図 林群1・2号古墳の墳丘

外面には東と南の墳丘裾部に葺石と考えられる石の露出がある。埴輪の存在については手掛かりを得ていない。なお、本古墳は田麦北古墳とも呼ばれていた。

1948年に京都大学により発掘調査が行なわれた。主体部は粘土床で内法長さ約3.8m、幅65cm、深さ18cmの窪みを形成している。

遺物は副葬品として鏡1面・玉類267個・櫛7枚・直刀1口・刀子1口・鉄鎌20本出土している。鏡は径7.9cmの珠文鏡である。櫛は細く削った十数本の竹を曲げ、上部を結束したのち、全面に漆を塗ったもので、大小の別がある。直刀1口は身に漆塗の鞘木の残片が付着し、鞘口には腐朽した鹿角装具が残っている。鉄鎌20本はすべて尖端が剣形を成している。多くは茎に矢柄の木片が残存しており、さらにその上を巻いた樹皮を残すものもあった。先端の鋭い刀子もある。玉類の内訳は勾玉3個、管玉6個、滑石製白玉224個、ガラス製小玉37個である。

本古墳は良い保存状態を保っており、遺物は現在、京都大学で保管している。

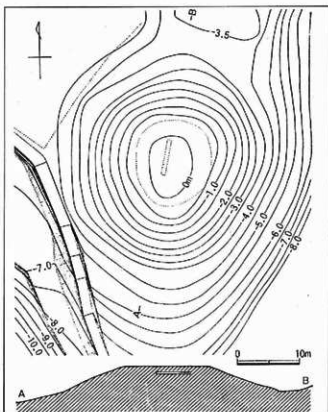
山の神古墳

本古墳は中野市厚貝に所在し、林群2号墳の北1.5km、厚貝集落西方の峰山東側の腹部に立地する。ここから前面に横たわる低い丘越しに中野扇状地が一望できる。1948年に林群2号墳とともに京都大学により発掘調査がされた。

古墳の現状は径32m、高さ4mの戴頭円錐状をとっているが方墳的な感もある(第7図)。外面の施設として、南と北の墳丘裾部に葺石が露出している。円筒形埴輪片1点が南側墳丘裾部の葺石の間から発見されている。

主体部は地山表面に造られた混雑粘土床である。粘土床の規模は内法で長さ約5.3m、幅60cm、深さ24cmである。この床の北端には高さ50cm、幅60cm、厚さ9cmの不整四辺形の板石が、礎石をもってした簡単な地固めの上に主軸と直行して立てられており、その背後には良質の粘土をつめて支えとしている。

遺物の配置状況は北側を中心にした副葬されたグループと、南側を中心に副葬されたグループに分けられる。さらに、床の南端より1.5mのところ頭に置く、屈葬人骨が1体発見されている。遺物の内



第7図 山の神古墳の墳丘

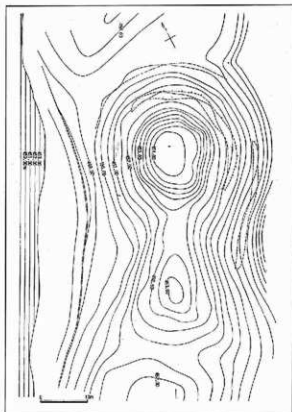
訳は滑石製白玉23・櫛25枚・剣6口・刀子1・異形利器1・槍1口・鉄斧2・鍬先1である。滑石製白玉は床内の北端付近より出土している。櫛は竹ヒゴ製の漆塗りのもので、北側より19枚、南側屈葬人骨の頭辺から6枚出土している。剣はすべて通行の形態であり、身に木片などの残存をみず、内には布を巻いたあとをみられる。

本古墳は、近・現代の山の神祭祀の場であったためよく保存されている。現在、遺物は京都大学で保管している。

七瀬双子塚古墳

本古墳は中野市七瀬に所在し、中野扇状地の北西縁部を形成する丘陵地形の一部をなす長丘丘陵の最高所東縁に立地する。墳頂からは中野の扇状地及びその周辺に広がる水田地帯が展望できる。さらに、中野市の東縁を形成する山地の尾根上に築造された紫岩古墳、金鐘山古墳なども遠望できる。

この長丘丘陵上には本古墳を含む七瀬古墳群を始めとして、多数の古墳が築造され現在では24基を数える。また、この丘陵上には安源寺遺跡、草間古塚跡群など先土器時代から平安時代に至る遺跡が多数

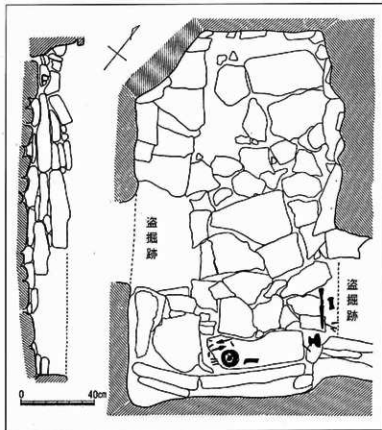


第8図 七瀬双子塚古墳の墳丘

く存在する。

墳形は前方後円墳を呈し全長は61mで、後円部の高さは4.5m、前方部はこれより1mほど低い。後円部の中段には段築面と考えられる部分がほぼ水平にめぐり、この面には部分的に菅石が露出している。

1921年に地元の青年団により発掘がおこなわれ、直刀2本・槍1本・鉄鏃39本・甲冑・鏡・土器などをえている。また、主体部は石室ではなかったというだけで詳細は不明である。1948年には京都大学による調査がおこなわれ、遺物の概要と墳丘実測図が報告された。報告された遺物は三角板革綴短甲の残片、径8cmの倣製八乳鋸歯文鏡、直刀、短剣2口以上、槍、鉄鏃、土師器の高坏、壺、須恵器壺1個、漆塗櫛残片である。土器類はどれも断片的でその全形を知りうるものはないが、高坏脚部、壺口縁部及び底部などの特徴は、和泉式のうちでも古相とされるものとの類似が指摘されている。さらに、表採資料として円筒形埴輪片がある。第8図は1980年に県史刊行会が再実測したものである。



第9図 紫岩古墳の石室

紫岩古墳

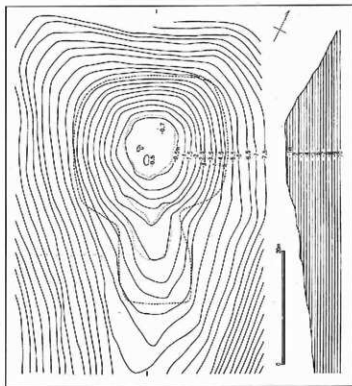
本古墳は中野市中野に所在する。中野市を形成する扇状地地形（中野扇状地）は河東山地から流入する夜間瀬川により展開されており、東縁は鳴ヶ嶽から箱山へと続く急峻な山脈により画されている。この山脈は最北部の扇頂部付近で、紫岩と呼ばれる高まりをなして終わっている。この紫岩は尾根であるが独立丘状を呈している。北の直下は夜間瀬川が流れている。本古墳はこの尾根中央に立地する。尾根方向の南北は整形が認められるが、東西は地山の急斜面に続いて現状ではほとんど裾部を成していない。夜間瀬川を隔てた、隣の山ノ内町夜間瀬には横穴式石室をもつ夜間瀬古墳群がある。

墳形は径19m、高さ4mの円墳であったとされている。しかし、1949年に村上秀雄氏と檀原長則氏により調査された時にはすでに破壊され、わずかに石室の輪郭が判る程度であったとされる（第9図）。この石室は幅約0.9m、奥行き約2mで、天井の蓋石は失われている。中形の盤石が側壁及び床面に用いられ、特に床面には砂礫を混ぜて敷かれている。発見された遺物の種類は多い。武器類は鉄剣の残片、

直刀の残片、鉄槍、鉄鏃17本、石突、小札片4枚。農具類は鉄鎌、鉄斧。装身具はガラス製の玉類である。それぞれ径0.2cm前後の小形が20点、径0.4cm前後の中形が57点、径6cm前後の大形が6点、小形勾玉が1点確認されている。土器は土師器で椀、底部破片、高坏の脚部2点、須恵器で高坏1点、この他に石室外から埴、横瓶、高坏が発見されている。

蟹沢古墳

1979年に田川幸生氏・松沢芳宏氏らにより発見された前方後円墳（第10図）で中野市桜沢・蟹沢・三ツ和・大日山にまたがり所在し、桜沢と大熊の集落の間にある山から延徳沖の沖積地に突出した尾根の先端に立地する。この尾根の先端は桜沢側からは急斜面で、後方は延徳沖に、前方部は山地側の低い部分に向けられている。中野市教育委員会により蟹沢古墳と名付けられた。



第10回 蟹沢古墳の墳丘

墳頂部からは中野市の南部地域一帯と北信五岳、さらに善光寺平の中心部、長野市街地も展望できる。また、この山麓一帯には縄文時代～平安時代にかけての遺跡である、桜沢遺跡群が広がっている。

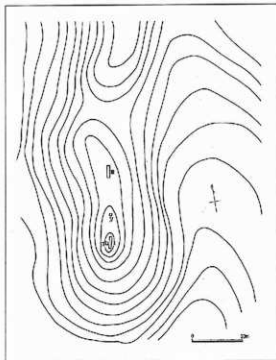
古墳は全長約40mで、自然地形を多分に利用し、若干の盛土を加えて整形されたものと考えられる。前方部と後方部の接する括れ部の頂に、葺石らしい痕跡がある。また、前方部先端に墳丘の限界を示すと考えられる列石が一部露出している。円筒埴輪等の表採遺物は未確認である。

また、蟹沢古墳東方の同一尾根上に、径18m前後、高さ2～2.5m程の円墳が3基点々と存在している。

姥懐山古墳

本古墳は中野市小田中に所在し、更科集落の北側に延びている低い山麓先端に立地する。1968年に古墳の構造調査を行なった結果、墳丘の盛土はほとんど認められず、古墳の区画は認められない。多分に自然の山頂を利用したもので、強いて円墳とみた場合は、直径17m、高さ1.5mと推定される(第11図)。

この調査に先立って、1947年に檀原長則氏によ



第11回 姥懐山古墳の墳丘

り遺物が発見されている。ナラの木の根元に一つの鉄片が露出しており、土を除いた結果3本の鉄剣が並列して置かれており、剣の下には鏡が裏面を上向きにして置かれた状態で発見された。さらに、付近から1個の管玉を得たという。

鉄剣は腐蝕のため完形ではなく、すべて短剣である。鏡は銅鏡で、径は12.2cmである。この鏡は埋納にあたって布をもって覆っていたようで、平織の布目がついている。

本古墳は現在、東山住宅団地造成のため消滅したが、遺物は更科区の高井舟着神社に保管されている。

金鐘山古墳

本古墳は中野市日野新野に所在する。中野扇状地を形成する南東部につらなる山脈からは、いくつかの尾根が岬状に延びており、そのうちの一つの先端部に近い墳頂に本古墳は立地する。また、この尾根上には他にもいくつかの円墳が存在することがわかっている。

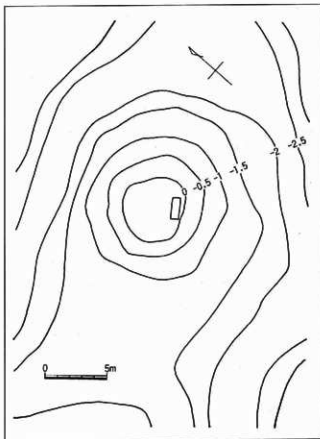
ここから新野集落をはさんで、東北側の尾根上には高遠山古墳が展望できる。また、眼前に広がる中野扇状地から七瀬双子塚古墳までを遠望できる。この他周辺には、南東側に間山遺跡、北東側には小田中・下小田中遺跡が存在する。いずれも古墳時代

の土器を出土している。

1925年4月に古川寅二氏が松樹伐採に関連して墳頂を60cmほど掘り下げたところ、天井石が露呈した。このため松山寺住職藤文明氏が中心となって石室を開削し、多くの遺物を検出した。3ヶ月後の7月に岩崎長思・森本六爾氏が調査を行い、発掘者より種々事情を聴いている。なお、森本六爾氏は1926年8月に再度調査を行なった。

本古墳の形状は東西径7mの円墳で、高さは東方より2.6m、西方より1.9mを計る。墳頂部は平夷されその径は3mほどである(第12図)。構築方法については、墳丘表面はもとより、封土の内部に多量の安山岩質の偏平割石が包含されていて、純粋な封土墳ではなく、土石混合の、広義の横石塚古墳と考えられる。

主体部は合掌形石室で、石室底部の規模は長さ2.35m、幅0.64mである。壁は粘土を交えて固めており、すべて内傾している。天井石は屋根型で、左右より各5枚の平石が斜め上に搬出して交差している。なお、石室内には多量の朱が用いられており、奥壁面や石室西方の隔石に付着していた。



第12図 金鐘山古墳の墳丘

副葬品は数多く、鏡2面・玉類170個・貝輪1個・剣3口・刀子・直刀5口・輪2口・鉄鏃・鉄斧1点・鋸身1点・砥石1点・馬具・土器がある。そのうち、鏡は五鈴鏡と珠文鏡の2面で、前者の面径は10cm、鈴の大きさは径2cmである。珠文鏡は径9.3cmで、質はよくない。玉類には、勾玉3・管玉1・丸玉90・小玉49・白玉36である。貝輪は敷石上に付着していたもので、左手に装着していたものらしい。剣は3口で、身には鞘木が付着している。刀子は鹿角の柄を有するもので数口確認されている。鉄鏃は多量に出土している。工具では鉄斧1点、鋸身1個体の破片2点がある。馬具類には環鈴・鈴・鈎具・帯金具・留金具・轡がある。土器は、土師器と須恵器の破片で、土師器には高坏脚部破片がある。須恵器破片は4点で、高坏・坏蓋・坏などの器形がある。土器は石室に近い箇所封土内より検出されている。

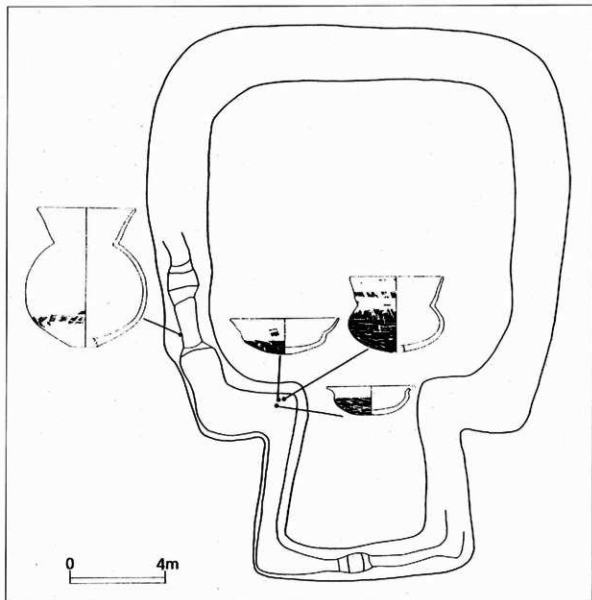
これらにより、金鐘山古墳の築造年代は6世紀代とされている。石室は現状のまま保存され、環境も整備されている。出土遺物は現在、東京国立博物館で保管している。

安源寺遺跡

本遺跡は中野市安源寺所在し、宮裏・清水・立道・峯・石原地籍の約2.4km広がる、先史時代から近世におよぶ一大集合遺跡である。善光寺平の北限に位置する中野平は、千曲川により形成された後背湿地で、肥沃な水田を主とする農耕地帯である。本遺跡は、標高350mの高丘丘陵にあって東端にあって、東南に傾斜し、日当たりが良く湧水に恵まれている。

本遺跡は古くから、弥生時代後期から古墳時代にかけての土器を出土する著名な遺跡として知られ、1951年には神田五六氏・田川幸生氏、1971年には金井汲次氏、1976年には中野市教育委員会により部分的な発掘調査が行なわれ、東海系の土器群が出土することが確認された。

こうした経過を経て1995年、4回目の発掘調査が中野市教育委員会により行なわれ、古墳時代前期の粘土探掘坑と前方後方周溝墓(第13図)が検出された。これにより中野市は、古墳時代前期には、東海地方の影響を精神文化面においても強く受けた地域として、注目されるようになった。

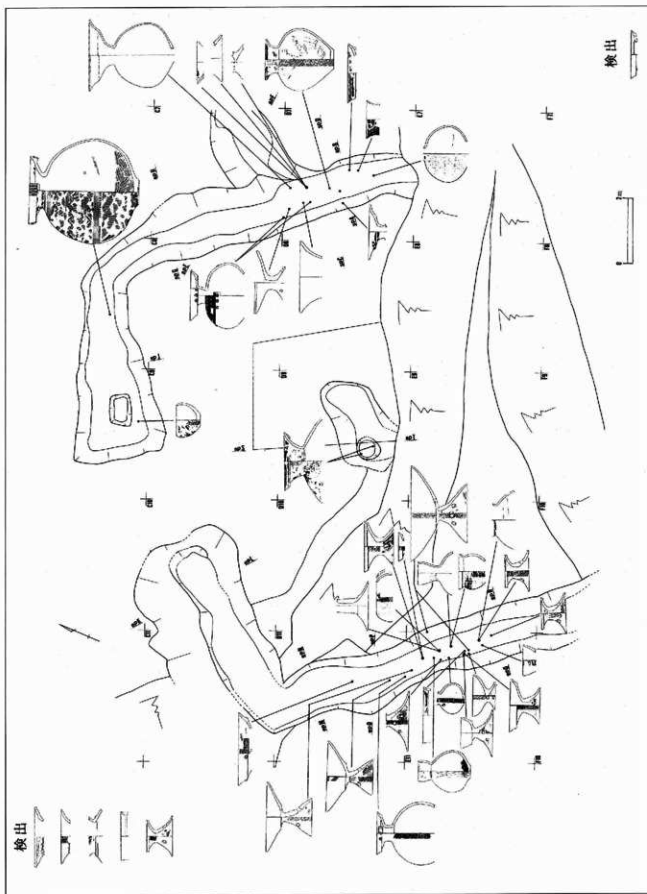


第13図 安源寺遺跡前方後方周溝墓土器出土状況

この安源寺遺跡から北側の丘陵頂部には、未完成ではあるが規模の大きな中世後期の山城「安源寺城」がある。1998年に、中野市教育委員会により発掘調査が行なわれ、弥生時代後期の前方後方墳丘墓が2基検出されている（第14図）。この前方後方墳丘墓から出土した土器群は東海系・北陸系が主体と

なっており、在地系の土器はごく僅かであった。

古墳時代前期の前方後方周溝墓につづいて、弥生時代後期の前方後方墳丘墓が発見されたことにより、この時期における東海地方との関わりが、ますます注目されるようになった。

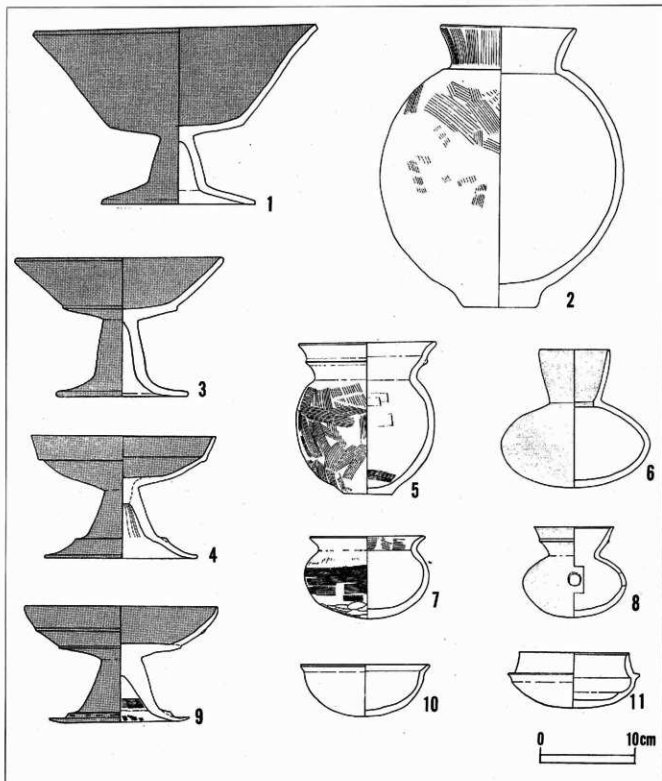


第 14 图 安源寺城跡第 1 号前方後方墳丘墓土器出土状況

新井大口遺跡

本遺跡は中野市新井大口に所在する。夜間瀬川により形成された中野扇状地の扇央や下寄り、長野電鉄木島線の中野北駅と四ヶ郷駅の中間で、線路より西へ200mの市道若宮～田麦線の道沿いにあ

る。遺跡の範囲は明確にし難いが100×100m程度と考えられる。本遺跡より南1.5kmには吉田遺跡、北1kmには間長瀬・笠原遺跡がある。ともに弥生から古墳時代にかけての集落遺跡で湧水地帯上に立地している。また、南へ1.5kmの長峯丘陵の丘頂に



第15図 新井大口遺跡出土土器

は田麦の林畔1・2号墳が築かれている。

1969年に中野市教育委員会により送水管理設に伴う緊急発掘調査が行なわれた。調査はA地区とB地区に分けておこなわれ、大量の遺物を得ている。調査範囲が狭かったため、明確ではないが祭祀遺構が検出され、それに伴う祭祀遺物が、投げ込まれた状態で出土した。

遺物は和泉期と考えられる土師器・須恵器（第15図）とともに石製模造品、鉄製品、獣骨片が出土している。勾玉4点はB地区から、双孔円板はA地区では完形で、B地区では破片で出土している。白玉は完形品で50個、破片で3個である。鉄製品は鋤先がA・B地区から各1点ずつ、刀子が1点A地区から出土している。獣骨片はA地区の高坏群のなかからシカの頭骨の一部が出土している。

出土遺物は中野市歴史民俗資料館で保管している。

上小田中遺跡

本遺跡は中野市上小田中に所在し、中野扇状地の南東側先端、扇状地とその東を面する山地の境に位置し、南北530m、東西700mの範囲に立地する。古くは上小田中遺跡・上小田中東田遺跡として分けられていたが、現在では「上小田中遺跡」として統一され、弥生時代から平安時代までの住居跡や遺物が確認されている。周囲には下小田中遺跡や普代遺跡、ここから南東側につらなる山地の尾根上には高

遠山古墳・金鉤山古墳が築造されている。

本遺跡の出土遺物は、古くは町田進氏が発掘した資料として、前期の土師器壺を金井汲次氏が紹介している。

1971年に田川幸生氏らにより、2回にわたる緊急発掘調査が行なわれ、弥生土器・土師器・須恵器・石製模造品が出土している。また、土師器に伴って古墳時代の住居跡も検出されている。

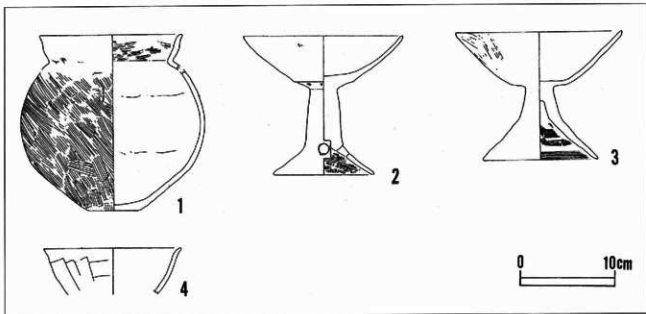
1997・1998年には中野市教育委員会により2ヶ年にわたって発掘調査がなされ縄文時代～平安時代にわたる遺物を得ている。第16図は1997年に出土した古墳時代の土器である。

間山遺跡

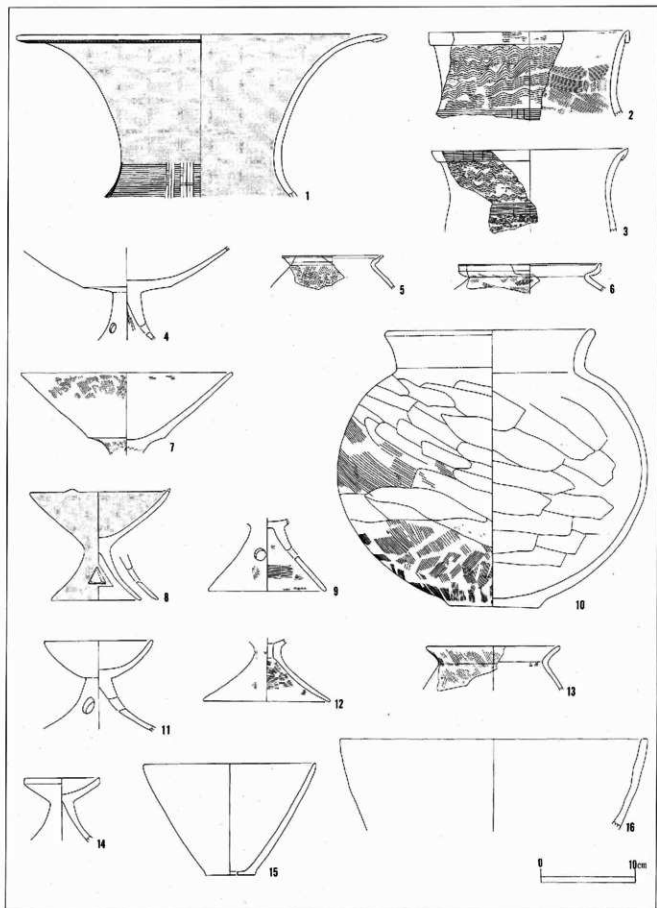
間山遺跡の所在する間山部落は、3方を東部山地と呼ばれる山脈に囲まれている。この山脈は途中から間山部落を包むように支脈がはしり、広大な延徳沖低地へ埋没している。十二川と榎無川に挟まれて扇状地地形を形成しており、遺跡の標高は340～420m程で、面積約25haの広範囲に及んでいる。

本遺跡は山の懐と水の確保、肥沃な土壌を利しての自然環境に恵まれ、縄文時代から現在に至るまでの長い間、人々の生活の舞台となった一大複合遺跡として知られる。

北方の尾根を挟んで向う側には、高遠山古墳が築造されている。



第16図 上小田中遺跡出土土器



第 17 圖 簡山遺跡出土土器

遺跡の研究は古く、1932年に神田五六氏が本遺跡表採の縄文・弥生土器に注目されたことで始まった。以来、桐原健氏や当時下高井地方の考古学調査に従事していた小野勝年氏らにより、表採遺物の紹介がされている。

地方有数の弥生時代後期の遺跡として注目されつつも、当時、本遺跡はホップ畑であったため、発掘調査は不可能視されていた。そんなおり、1956年にホップ支柱の取替補修にあたって、支柱を掘出した際、長野県において極めて稀少な青銅鏃が1点出土した。この青銅鏃は神田五六氏の再度にわたる遺跡踏査の結果、弥生後期土器と関係があると考察された。

同年、青銅鏃と後期弥生土器の関係究明に主眼をおき、ついに発掘調査が行なわれた。結果、青銅鏃と後期弥生土器との関係はわからなかったが、代わって後期土師器と下高井地方で初めての灰釉陶器が出土した。

こうした経過をふまえて、1982年及び1991・1992年に中野市教育委員会により再度発掘調査が行なわれた。

縄文土器から中世の陶磁器にいたるまでの遺物が出土したが、中心となるのは弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけての遺物である。多数の住居跡が検出され、在地の弥生時代後期土器と伴に北陸系・東海系の土器群が出土している(第17図)。住居跡によっては、これら外来系土器の出自が80%を超えるものもある。

七瀬遺跡

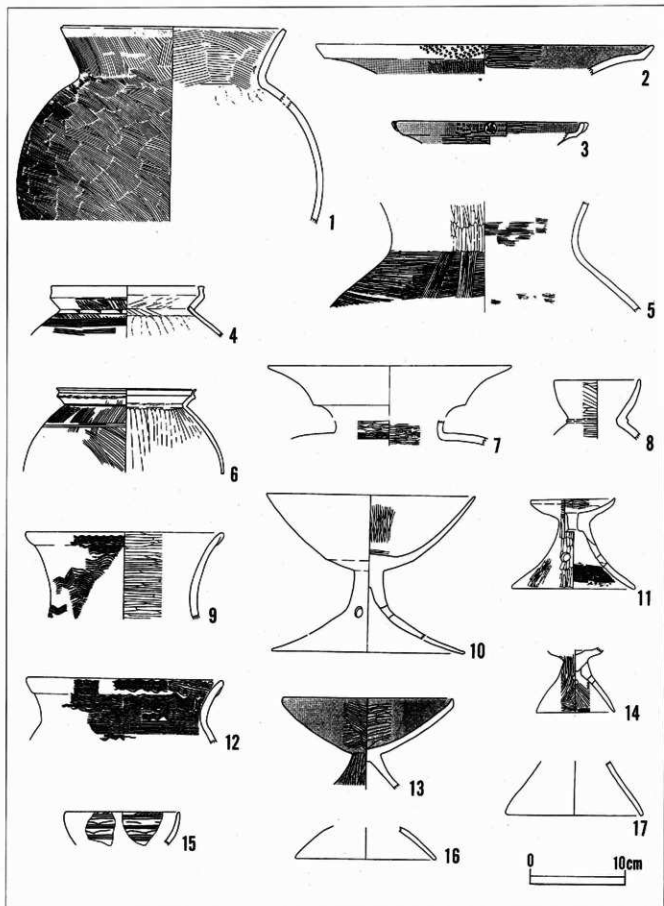
本遺跡は中野市七瀬に所在し、長丘陵の東側直下に位置する。この場所は中野扇状地の末端に重なり、扇状地上方から緩い傾斜を下って、丘陵にぶつかる場所でもある。扇状地側には、現在も1級河川の江部川が延徳沖低地に向けて流れ、沖積地状を呈する。周辺一帯は地下水位が高く、広く耕作が行なわれている。

遺跡は、南北750m、東西450mに細長く広がる。中野市遺跡詳細分布調査では、弥生時代後期～平安時代の遺跡とされていたが、発掘調査は行なわれていなかった。

1991・1992年の2ヶ年にわたって七瀬遺跡初の発掘調査が、丘陵の反対側に位置する栗林遺跡と伴に、長野県埋蔵文化財センターにより行なわれた。その結果、旧石器時代～近世にわたる遺物が出土し、発見された遺構は弥生時代中期と同後期を主体とした。特に、弥生時代後期の遺構・遺物は、県内の当該期他遺跡と比較しても質・量ともに特筆される。

その理由の一つに、本遺跡から出土した土器は、弥生時代後期後半～古墳時代初頭の、北陸系・東海系の外来系土器がかなりの割合を占めることがあげられる。特に、S字状口縁台付壺A類とともに東海系土器が出土(第18図)した遺跡としては、中野市では西条遺跡と本遺跡だけである。

また、本遺跡の調査をもとに、赤塩仁氏は七瀬編年を確立し、当該期における中野市の東海系土器を中心とした外来系土器の流入、それに伴う在系土器の変遷・消長について言及している。



第 18 圖 七類遺跡出土土器

引用・参考文献〔古墳と遺跡の概要〕

林群1号墳・林群2号墳・山の神古墳

小野勝年・横山浩一 1982年「林群1・2号墳・山の神古墳」『長野県史』考古資料編全1巻(2)主要遺跡(北・東信)長野県史刊行会

小野勝年 1953年「下高井地方の考古学的調査」『下高井』

横山浩一 1953年「長丘村古墳調査」『下高井』

七瀬双子塚古墳

土屋 積 1982年「七瀬双子塚古墳」『長野県史』考古資料編全1巻(2)主要遺跡(北・東信)長野県史刊行会

岩崎長思 1926年「飯綱堂双子塚」『長野県史跡名称天然記念物調査報告』5

小野勝年 1953年「下高井地方の考古学的調査」『下高井』

紫岩古墳

榎原長則 1982年「紫岩古墳」『長野県史』考古資料編全1巻(2)主要遺跡(北・東信)長野県史刊行会

小野勝年 1953年「下高井地方の考古学的調査」『下高井』

蟹沢古墳・姥懐山古墳

田川幸生・松澤芳宏 1982年「蟹沢古墳・高遠山古墳・姥懐山古墳」『長野県史』考古資料編全1巻(2)主要遺跡(北・東信)長野県史刊行会

小野勝年 1953年「下高井地方の考古学的調査」『下高井』

中野市教育委員会 1963年「姥懐山古墳緊急分布調査」

松沢芳宏 1980年「北信濃北半における前方後方墳の発見とその意義」『高井』52

田川幸生 1981年「古墳の造営」『中野市誌歴史編』

榎原長則 1982年「姥懐山古墳出土遺物について」『高井』61

金鐘山古墳

土屋 積 1982年「金鐘山古墳」『長野県史』考古資料編全1巻(2)主要遺跡(北・東信)長野県史刊行会

森本六爾 1925年『金鐘山古墳の研究』雄山閣

岩崎長思 1925年「金鐘山古墳」『長野県史跡名勝天然記念物調査報告』5

安源寺遺跡

小野勝年 1953年「下高井地方における考古学的調査」『下高井』

田川幸生・榎原健 1962年「長野県安源寺遺跡の弥生式土器」『信濃Ⅲ』14-1

金井汲次 1967年「中野市安源寺遺跡発掘調査」『信濃考古』17-18

金井汲次 1971年「長野県中野市安源寺遺跡」『日本考古学年報』19

中野市教育委員会 1967年「安源寺」『長野県考古学会研究報告書2』

中野市教育委員会 1979年「安源寺Ⅱ」

中野市教育委員会 1987年「安源寺Ⅲ」

中野市教育委員会 1995年「安源寺遺跡」

中野市教育委員会 1999年「安源寺城跡遺跡発掘調査報告書」

新井大ロフ遺跡

- 金井波次 1982年「新井大ロフ遺跡」『長野県史』考古資料編全1巻(2)主要遺跡(北・東信)長野県史刊行会
金井波次 1971年「新井大ロフ遺跡」『長野県考古学会誌』10

上小田中遺跡

- 金井波次 1971年「中野扇状地の考古資料」(3)『高井』17号
田川幸生 1973年「東田遺跡(第1次)」『日本考古学年報24』
中野市教育委員会 1998年『上小田中遺跡』
中野市教育委員会 1999年『上小田中遺跡』

間山遺跡

- 小野勝年 1953年「下高井地方の考古学的調査」『下高井』
桐原 健 「信濃国間山発見の合口壘棺」『上代文化』24
桐原 健 1958年「長野県中野市間山石動下遺跡調査予報」『信濃』第10巻第12号
神田五六 「長野県中野市間山発見の銅鍔」『信濃』第10巻第6号
中野市教育委員会 1984年『間山』
中野市教育委員会 1992年『間山』Ⅱ
中野市教育委員会 1993年『間山』Ⅲ

七瀬遺跡

- 小野勝年 1953年「下高井地方の考古学的調査」『下高井』
長野県埋蔵文化財センター 1994年『栗林遺跡・七瀬遺跡』
赤塚次郎 1990年「考察」『廻間遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター

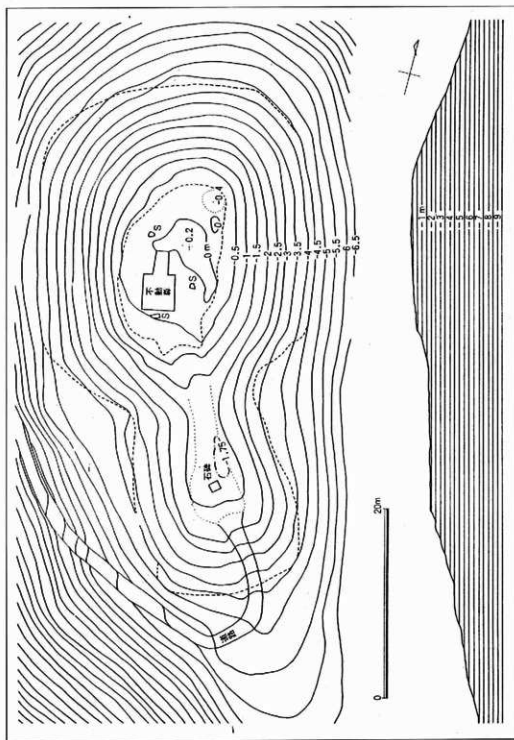
第3章 墳丘の発掘調査

第1節 墳丘削減以前の調査

高遠山古墳は、榎原長則氏が早くから古墳ではな
いかと注目していた古墳である。1979年、田川幸

生氏・松澤芳宏氏により前方後方墳または前方後円
墳として確認され、墳丘の実測調査がなされた(田
川幸生・松澤芳宏 1982年・第19図)。

高遠山は通称で正式には蘇龍(らいりゅう)山と



第19図 高遠山古墳削減以前の墳丘

いい、後円墳頂部に
不動尊を祀っていた。
前方部には霊神
塔が置かれてあり、
前方部西側の裾の
部分には石祠が三
社あった。

このような状態
でありながら比較
的保存状態が良く、
社殿のため、後円墳
頂部の3分の1が削
平され、前方部横の
裾の部分に石祠の
ため若干手入れが
されていること、前
方部先端が登山口
のため土砂が流出
している以外は完
存であったという。

古墳の規模は全
長55m、後円部の径
は主軸方向33m、そ
れに直行する径
28m、高さは4.5m
である。前方部は全
長22m、幅17mで
高さ2.5m弱である。
前方部も後円部も
ともに墳頂部は平
坦で、特に後円部の
両側面は自然地形
もさることながら、
緩やかな斜面をな
している。前方部と

後円部のつなぎは、やや乱れている。

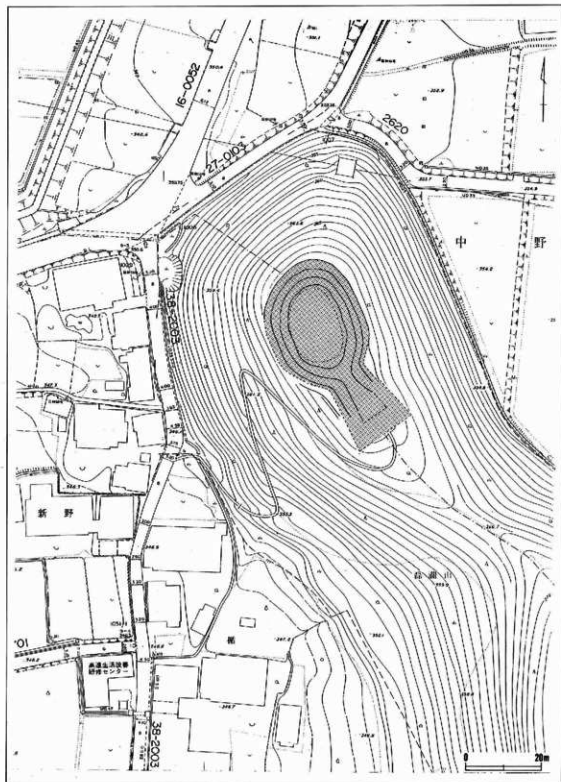
時期については蟹沢古墳とともに、古式的な要素を持つと考えた。

以上が今回の発掘調査以前に、田川幸生氏・松沢芳宏氏により報告された高遠山古墳の状態である。

記載されていないが、葺石段築の形跡、埴輪等は確認されていない。

さらに、高遠山古墳の墳丘について田中祐氏が、善光寺平の南端に位置する、更埴の森將軍塚古墳とを比較検討している（田中祐 1996年）。

すなわち、全長約55mの高遠山古墳の規模が、全長約99mを測る森將軍塚古墳のほぼ2分の1であること、前方部と後円部の主軸のズレ、及び完全な円形ではない後円部の歪み等が極めて類似することをあげ、それが善光寺平の北端と南端に位置することに注目している。



第20図 削滅以前の高遠山

第2節 墳丘の現状と形態

高遠山は現在、採土による削減を受けて、東部山地から延びる尾根から完全に切り離され、独立した丘陵となっている。

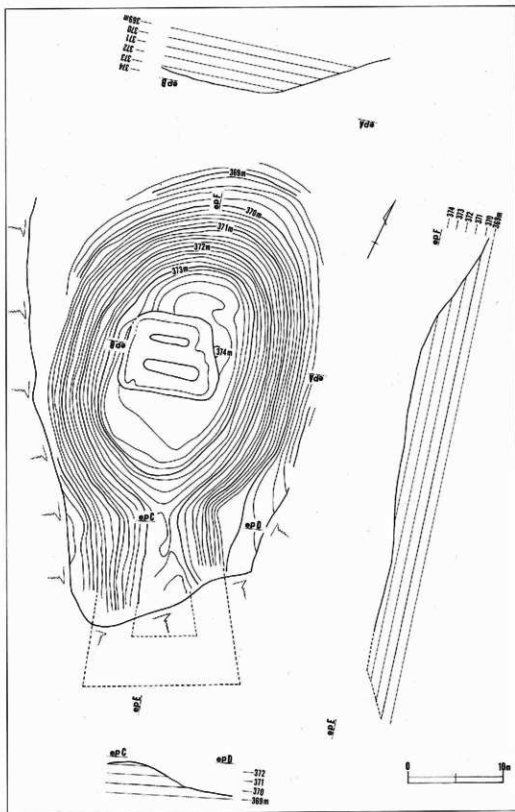
墳丘も前方部が10mほど破壊されたと考えられる。

第21図は今回行った墳丘の測量図に、田川幸生氏の測量した墳丘削減以前の古墳測量図(第19図)を基として、前方部の復元を行なったものである。測量図は374mを最高所として、20cm毎に等高線を引いた。ただし、墳頂部は、以前不動尊を祀っていたため、ある程度削平を受けている。最高所は本来もっと高かったと思われる。

高遠山古墳は後円部を、尾根の先端に向けて築造されている。方位は後円部の主軸で磁北より18.5度、前方部の主軸では29度西に振る。

墳形は調査以前、前方後円墳もしくは前方後方墳と考えられていたが(田川幸生・松澤芳宏1982年)、墳丘括れ部における調査の結果、前方後方墳に

見られる後方形の張り出しは観察できず、後円部と前方部の主軸にズレをもつ前方後円墳であることが確認できた。また、墳丘は段築・葺石等の外部施設はもたない。



第21図 高遠山古墳の墳丘(1999年)

墳丘は尾根の地形を多分に利用して地山を削り出し、後円部に多量の盛土を行なって築造されており、築造時にはかなりの労力を有したものと推測される。墳丘の裾部は、地山を削り出してテラス状の平坦部を形成し、尾根の傾斜面と墳丘とを画して、墳丘を表現している。

また、この平坦面は後円部北側と、括れ部から前方部にかけては顕著になっているが、後円部側面では若干形成されているのみである。

全長は後円部の主軸で、現況約44.4m (a-c)、復元すると約51.2m (a-d)と推測される。前方部の主軸では現況約41.2m (e-f)、復元すると約49.6m (e-h)と推測される。後円部の主軸と前方部の主軸は約11度ほど東にズれる。

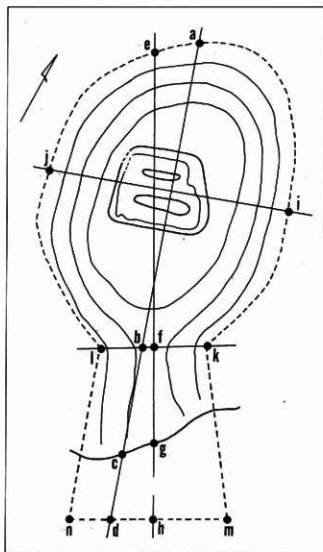
後円部の平面形態は円形ではなく、北東側が突出

し、西北側が潰れる不整形な楕円形を呈している。しかし、森將軍塚古墳のように、角はつかない。南北の長径で約32.8m (a-b)、東西の短径で約25.6m (i-j)を測る。また、東西の中軸は二つの主体部の真中を走る。高さは最高所で約4mである。

前方部は約10mほど破壊されたと考えられ、正確な平面形態を知ることはできない。県史掲載の測量図(松沢芳宏・田川幸生 1982年)を参考にすると、前方部の先端はあまり開かないものと推測される。主軸で現況約10m (f-g)復元すると約18.2m (f-h)、と推測される。括れ部の幅は約11.2m (k-l)を測る。前方部の幅は、前方部が楕円に開くような特殊な形態をしていなければ、復元で約17.2m (m-n)と推測される。高さは最高所で約2.5mである。

後円部と前方部の長さの比は約1対0.55、森將軍塚古墳が約1対0.74で川柳將軍塚古墳が約1対1であるから、前方部の長さが比較的短い形態をもつ。

以上のように、高遠山古墳は不定形で楕円形を呈する後円部と、比較的短い前方部もをもち、その主軸にズレがあるという特徴を持ち、墳輪の樹立や段築・蓋石はなされない。



a-d	推定全長(後円部主軸)	51.2m
a-c	現況全長(後円部主軸)	44.4m
a-b	後円部長径	32.8m
i-j	後円部短径	25.6m
e-h	推定全長(前方部主軸)	49.6m
e-g	現況全長(前方部主軸)	41.2m
f-h	推定前方部長	18.2m
f-g	現況前方部長	10.0m
k-l	括れ部長	11.2m
m-n	推定前方部幅	17.2m
	後円部高さ	4.0m
	前方部高さ	2.5m

後円部と前方部のズレ	11度
後円部と前方部の比	1対0.55

第22図 墳丘計測値

第3節 墳丘の構造と築造過程

1. 調査の方法

調査は、14本のトレンチを設定し土層を確認したあと、墳丘の流土を取り除き、高遠山古墳本来の墳丘形態を確認する、という方法をとった。

各トレンチのナンバーと設定位置を第23図に示す。

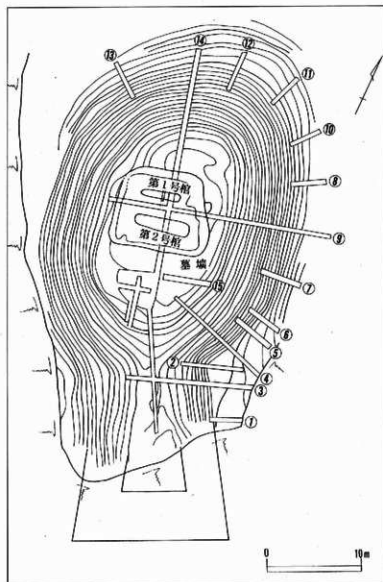
No.14 トレンチは後円部においては後円部の主軸にそって設定し、前方部においては前方部の主軸にしたがって、ズラして設定した。後円部・前方部南北トレンチと呼ぶ。

No.9 トレンチは後円部の主軸中央に直行させて

設定したもので、特に後円部東西トレンチと呼ぶ。トレンチが途中で止まっているのは、墳丘の西側が採石取りによる削減を著しくうけているため、トレンチ掘り等の調査が極めて困難で危険を伴うと判断したためである。

No.3 トレンチは前方部の主軸に直行させて設定したもので、特に前方部東西トレンチと呼ぶ。後円部東西トレンチと同じく、調査が危険を伴うため、途中で止めている。

No.1 ~ No.2・No.4 ~ No.8・No.10 ~ No.13 のトレンチ 11箇所は墳丘裾部の墓域を確認するために、前方部東側から後円部北側にかけて設定したトレンチである。墳丘の西側はやはり危険が大きいため、調査を行っていない。



第23図 高遠山古墳調査全体図

2. 各トレンチの層位

後円部・前方部南北 (No.14) トレンチ (第24図)

本トレンチは、後円部と前方部の主軸にそって設定したもので、前方部から墓域は、地山まで確認できたが、主体部については保存の必要性から、形状に大きな影響を与えてはならないという理由で一部を除き地山まで調査は行っていない。また、後円部北側から掘部にかけても、先の理由で一部地山まで調査していない部分がある。

以下、各層位の所見を述べる。本報告書の層位はすべて統一してある。そのため、そのトレンチで見られない土層の番号は抜けている。

第1層：暗灰色土層、墳丘全体を覆う表土で、腐蝕土である。

第2層 a：黒褐色土層、墓域内に堆積し礫を含まず砂質である。

第2層 b：黒色土層、墓域内に堆積する盛土で礫を含まず砂質である。後述する第3層 b と共に、第2号棺上面の土層にいわゆる落ち込み状を呈する。

第3層 a：黄色土層、墓域内に堆積する盛土で2~3cm程度の細かい破砕礫を多量に含む。

第3層b：暗褐色土層、墓壇内に堆積する盛土で2～3cm程度の細かい破砕礫を多量に含み、第2号棺上面の土層にいわゆる落ち込み状を呈する。

第4層a：暗黄色土層、墓壇内に堆積する盛土で15cmほどの礫を含む。

第4層b：明褐色土層、墓壇内に堆積する盛土20cmを超す大型の礫を多量に含む。

第5層：褐色土層、墓壇内に堆積する盛土で2～3cm程度の細かい破砕礫を多量に含む。第1号棺上面の土層にいわゆる落ち込み状を呈する。

第6層：明茶褐色土層、墓壇内に堆積する盛土でほとんど礫を含まない。

第7層：赤黄色土層、礫を含まず粘質である。第2号棺構築の際におそらく葬送儀礼等の意図を持って貼った土と考えられる。

第8層：暗灰色土層、第2号棺内の埋土で、20cmほどの大型の礫を多量に含んでいる。

第9層：黄褐色土層、第2号棺内の埋土で木炭層に直接接する土である。礫を含まず砂質が強い。

第10層：茶褐色土層、第2号棺内の埋土で木炭層に直接接し、第9層下に北側から入り込んでいる。礫を含まず砂質が強い。

第11層：黒色木炭層、第2号棺に採用された、いわゆる木炭層を形成する層である。また、第32層上面にも薄く入っている。

第12層：黒色土層、礫を含まない。この層が墓壇の南壁に直接被っていると考えると墓壇を検出した。

第13層：暗褐色土層、後門部北側の墓壇の外から墓壇の内まで堆積する盛土で、15cmほどの礫を含む。

第14層：暗灰色土層、墓壇内に堆積する盛土で礫をほとんど含まない。

第15層：黒色土層、北側の墓壇壁から墓壇内に流れ込むように堆積しており、礫は含まない。

第16層：暗褐色土層、第1号棺内の埋土で15cmほどの礫を多量に含む。

第17層：黄色土層、第1号棺構築の際、地山の上に貼られたと考えられる土で、砂質が強く、礫を含まない。

第18層：黄白色粘土層、第1号棺に採用された粘土層を形成する層である。さらに深くトレンチを掘り下げれば、第1号棺を覆っていた粘土層として分層が可能だと考えられる。

第19層：暗黄色土層、主体部に伴う遺構内に堆積する盛土で、礫をほとんど含まない。

第20層：明褐色土層、主体部に伴う遺構内に堆積する盛土で、礫をほとんど含まず、砂質の強い黄色土塊が混じる。

第21層：黒灰色土層、主体部に伴う遺構内に堆積する盛土で、礫を含まず砂質の強い黄色土塊が混じる。

第22層：黄色土層、主体部に伴う遺構内に堆積する盛土で、礫を含まず粘質が強い。

第23層：茶褐色土層、主体部に伴う遺構内に堆積する盛土で、礫をほとんど含まず砂質の強い黄色土塊が混じる。

第24層：黒灰色土層、主体部に伴う遺構内に薄く堆積する盛土で、2～3cm程度の破砕礫を多量に含む。

第25層a：明褐色土層、主体部に伴う遺構内に堆積する盛土で、10cmほどの礫を含む。

第25層b：褐色土層、主体部に伴う遺構内に堆積する盛土で、5cmほどの礫と砂質の強い黄色土塊が混じる。

第26層：黒褐色土層、主体部に伴う遺構内に堆積する盛土で、破砕礫を多量に含む。

第27層：黒灰色破砕礫層、主体部に伴う遺構内に堆積する盛土で、2～3cm程度の破砕礫で構成され、砂が混じる。

第28層：暗褐色土層、主体部に伴う遺構内に堆積する盛土で、2～3cm程度の破砕礫及び10cmほどの礫が混じる。

第29層：黒色土層、主体部に伴う遺構内に堆積する盛土で、礫を含まない。第12層より色調は濃い。

第30層：黒色木炭層、第31層bと第33層aに薄くのっている木炭層で、葬送儀礼の際利用された床面と考えられる。

第31層a：黒褐色土層、主体部に伴う遺構の床面を構築する際に貼られた土と考えられ、礫を含まず粘砂質が強い。

第31層b：黄褐色土層、主体部に伴う遺構の、床面を構築する際に貼られた土と考えられ、礫を含まず粘砂質が強い。

第32層：黄色土層、主体部及びそれに伴う遺構を築いており、床面を構築する際に貼られた土と考え

られる。礫を含まず粘砂質が強い。第17層・第31層 a・b・第32層は主体部及びそれに伴う遺構のために、同一の機能を有する目的で地山直上に貼られた土と考えられる。

第33層 a：暗褐色土層、主体部に伴う遺構構築時に貼られた土と考えられ、10cmほどの礫を僅かに含む。

第33層 b：暗褐色破砕礫層、多量の破砕礫に砂が混じる。

第34層：暗黄色土層、後円墳頂部南側末端から前方部全体まで堆積しており、礫を含まない。主体部埋葬前の墳丘構築時に、墳丘を整形する目的で盛られた土と考えられる。

第35層：明褐色礫層、10cm～15cmほどの礫層。

第75層：黄白色土層、2～3cm程度の破砕礫を僅かに含む。後円部北側裾部から墳頂部手前まで堆積している。古墳完成後に堆積した流土と考えられる。

第76層：茶褐色土層、後円墳頂部の北側、第13層の上に堆積している盛土で、10cmほどの礫を含む。古墳完成後に堆積した流土と考えられる。

第77層：暗茶褐色土層、後円部北側に堆積しており、5cmほどの礫を含む。墳丘築造時の盛土と考えられる。

第78層：黒褐色土層、後円部北側に堆積しており、20cmを超す大型の礫を含む。墳丘築造時の盛土と考えられる。

第79層：黄褐色土層、後円部北側に堆積しており、礫を含まない。墳丘築造時の盛土と考えられる。

第80層：明茶褐色土層、後円部の北側に堆積しており、20cmを超す大型の礫を含む。墳丘築造時の盛土と考えられる。

第81層：茶褐色土層、後円部の北側裾部に堆積しており、2～3cm程度の細かい破砕礫を含む。墳丘築造時の盛土と考えられる。

第82層：明茶褐色土層、後円部の北側裾部に堆積しており、2～3cm程度の細かい破砕礫を多量に含む。墳丘築造時の盛土と考えられる。

第83層：黒褐色土層、後円部の北側裾部に堆積しており、礫を含まない。墳丘築造時の盛土と考えられる。

第84層：暗茶褐色土層、後円部の北側裾部に堆積しており、15cmほどの礫を含む。墳丘築造時の盛

土と考えられる。

第86層：黄褐色土層、後円部の北側裾部の地山直上に堆積する盛土で、2～3cm程度の細かい破砕礫を多量に含む。墳丘築造時の盛土と考えられる。

後円部東西 (No.9) トレンチ (第24図)

本トレンチは後円部東西の中軸にそって設定した。主体部については調査の都合上、墳頂部から約80cmのところまで、止めている。また、墳丘東側から裾部にかけては多量の盛土がされており、一部地山まで調査していない部分がある。

第1層：暗灰色土層、墳丘全体を覆う表土で、腐蝕土である。

第2層：黒褐色土層、墓壇内に堆積する盛土で、礫を含まず砂質が強い。

第3層：黄色土層、墓壇内に堆積する盛土で、2～3cm程度の細かい破砕礫を多量に含む。

第5層 a：明褐色土層、墓壇内に堆積する盛土で、2～3cm程度の細かい破砕礫を多量に含む。

第5層 b：暗褐色土層、墓壇内に堆積する盛土で、2～3cm程度の細かい破砕礫を多量に含む。

第5層 c：明褐色土層、墓壇内に堆積する盛土で、2～3cm程度の細かい破砕礫を多量に含む。

第6層：明茶褐色土層、墓壇内に堆積する盛土で、礫をほとんど含まない。

第75層：黄白色土層、墳丘裾部から墳頂部手前まで堆積しており、2～3cm程度の破砕礫を僅かに含む。古墳完成後に堆積した流土と考えられる。

第76層：茶褐色土層、後円墳頂部の東側末端から裾部にかけて堆積しており、10cmほどの礫を含む。古墳完成後に堆積した流土と考えられる。

第86層：黄褐色土層、後円部東側地山直上に堆積しており、2～3cm程度の破砕礫を多量に含む。墳丘築造時の盛土と考えられる。

第88層：茶褐色土層、後円部東側に堆積しており、10cmほどの礫を含む。墳丘築造時の盛土と考えられる。

第89層：黒褐色土層、後円部東側に堆積しており、2～3cm程度の破砕礫を多量に含む。墳丘築造時の盛土と考えられる。

第90層：黄褐色土層、後円部東側に堆積しており、礫を含まない。墳丘構築時の盛土と考えられる。

第91層：暗褐色土層、後円部東側に堆積しており、5cmほどの礫を含む。墳丘構築時の盛土と考えられる。

第92層：暗黄色土層、後円部東側に堆積しており、15cmほどの礫を含む。墳丘構築時の盛土と考えられる。

前方部東西 (No.3) トレンチ (第24図)

本トレンチは前方部の主軸に直行して設定したもので、すべて地山まで調査を行なっている。

第1層：暗灰色土層、墳丘全体を覆う表土で、腐植土である。

第34層：暗黄色土層、前方部頂を覆うように地山直上に堆積しており、礫を含まない。主体部埋葬前の墳丘構築時に墳丘を整形する目的で、盛られた土と考えられる。

第75層：黄白色土層、前方部の墳丘裾部に堆積しており、2～3cm程度の破砕礫を僅かに含む。古墳完成後に堆積した流土と考えられる。

第85層：黒色土層、前方部の墳丘裾部に堆積しており、10～15cmほどの礫を含む。古墳完成後に堆積した流土と考えられる。

第86層：黄褐色土層、前方部の墳丘裾部に堆積しており、2～3cm程度の破砕礫を含む。墳丘構築時の盛土と考えられる。

その他のトレンチ (第25図)

墳丘の裾部にめぐらした、トレンチは墳丘の裾部を確認するためのもので、すべて地山まで調査を行なっている。

第1層：暗灰色土層、墳丘全体を覆う表土で、腐植土である。

第75層：黄白色土層、2～3cm程度の破砕礫を僅かに含む。墳丘裾部全体に堆積しており、古墳完成後に堆積した流土と考えられる。

第76層：茶褐色土層、10cmほどの礫を含む。墳丘裾部全体に堆積しているが、No.6トレンチでは確認できない。古墳完成後に堆積した流土と考えられる。

第85層：黒色土層、10～15cmほどの礫を含む。括れ部から前方部の裾部にかけて堆積しており、後円部の樹部側のトレンチでは確認できない。古墳完

成後に堆積した流土と考えられる。

第86層：黄褐色土層、2～3cm程度の破砕礫を多量に含む。No.1・No.2・No.4・No.13トレンチで確認でき、墳丘構築時に地山直上に盛られた土と考えられる。

第87層：黒褐色土層、礫を含まず、No.4トレンチで確認できる。墳丘構築時の盛土と考えられる。

3. 墳丘の構造

各トレンチの所見をまとめ、墳丘の構造について概観する。

前方部は地山を削り若干の盛土をして、構築されている。このことは、第34層が地山の上に薄く乗っていることから判断できる。

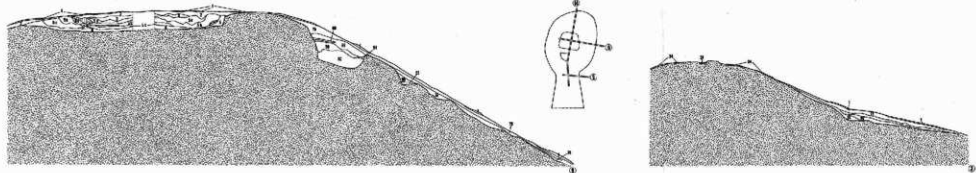
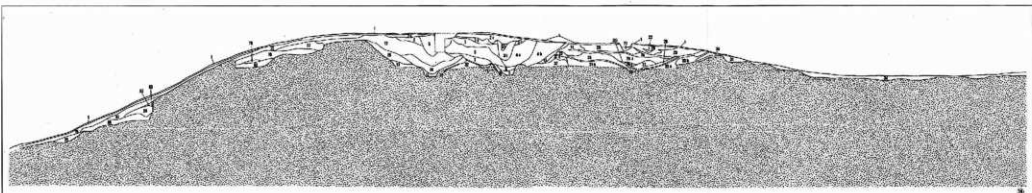
前方部の裾では第85層が有機質を含む黒色土層であることから、第85・76・75層は墳丘完成後に堆積した土と考えられる。かなりの量が堆積し、且つ土器片を含むことから、前方部を構築した際、墳頂部に行なった盛土が崩れ、流れたものと考えられる。したがって墳丘完成時には、前方部は明確な肩部を有していた可能性がある。

墓壇内に堆積している第13層が第77層に乗っていることから、第77・78・79・80層は主体部埋葬前の墳丘構築時の盛土と判断できる。

後円部は前方部と比べて多量の盛土を行なって構築している。地山が最も高い位置は後円部の南端で、ここから前方部に向けて削り込んであることから、後円部を前方部より高く構築しようとした意識が伺える。

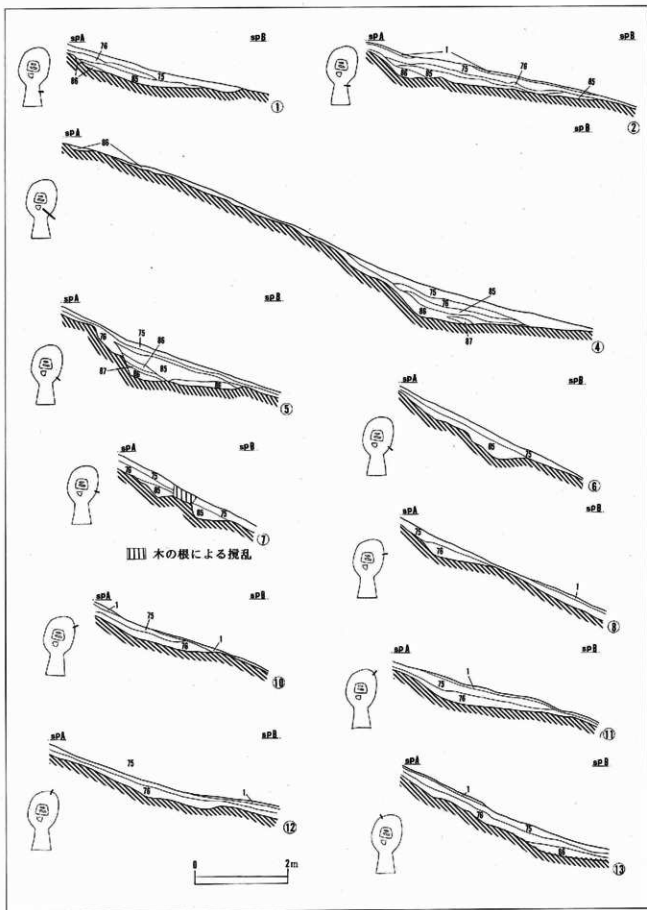
主体部から後円部の北側は、保存の都合上完全に地山まで確認できなかったが、尾根という主体部直下の地山はそのまま裾部に向かってなだらかに移行していると考えられる。したがって、後円部北側は多量の盛土をして構築したことになる。墓壇壁の石積みもこの盛土をしながら、同時に構築したと考えられる。

古墳は墳丘を表現するため、地山を削り出して墳丘と尾根の斜面を画している。そのため、墳丘の裾部はテラス状の平坦面を形成する。この平坦面は、前方部から括れ部にかけては広がっているが、後円部の側面に移行するにつれて狭くなっていき、後



- | | | | |
|-----------------------------|--------------------------------|-------------------------------------|----------------------------|
| 1 黄土 | 10 茶褐色土 礫を含まず砂質が強い | 25-a 弱粘色土 10cm 程度の礫を含む | 77 球窩粘色土 5cm 程度の礫を含む |
| 2-a 黒褐色土 礫を含まない砂質 | 11 黒色木炭 木炭層 | 25-b 黒色土 5cm 程度の礫と砂質の強い黄色土塊が混じる | 78 黒褐色土 20cm を超す大礫の礫を含む |
| 2-b 黒褐色土 礫を含まない砂質 | 12 黒色土 礫を含まない | 26 黒褐色土 球窩礫を多量に含む | 79 黄褐色土 礫を含まない |
| 3-a 灰白色土 2~3cm 程度の球窩礫を多量に含む | 13 球窩色土 15cm 程度の礫を含む | 27 灰白色粘砂 2~3cm 程度の球窩礫に砂が混じる | 80 黄褐色土 20cm を超す大礫の礫を含む |
| 3-b 球窩色土 2~3cm 程度の球窩礫を多量に含む | 14 球窩色土 礫をほとんど含まない | 28 黄褐色土 2~3cm 程度の球窩礫と 10cm 程度の礫が混じる | 81 黒褐色土 2~3cm 程度の球窩礫を含む |
| 4-a 黄褐色土 15cm 程度の礫を含む | 15 黒色土 礫を含まない | 29 灰白色土 礫を含まない | 82 黄褐色土 2~3cm 程度の球窩礫を多量に含む |
| 4-b 球窩色土 20cm を超す大礫の礫を多量に含む | 16 球窩色土 15cm 程度の礫を多量に含む | 30 灰白色木炭 木炭層 | 83 黒褐色土 15cm 程度の礫を含む |
| 5 褐色土 2~3cm 程度の球窩礫を多量に含む | 17 黄褐色土 砂質が強く礫を含まない | 31-a 黒褐色土 礫を含まず砂質が強い | 84 黄褐色土 15cm 程度の礫を含む |
| 5-a 球窩色土 2~3cm 程度の球窩礫を多量に含む | 18 黄白色粘土 粘土層 | 31-b 黄褐色土 礫を含まず砂質が強い | 85 黒褐色土 10~15cm 程度の礫を含む |
| 5-b 球窩色土 2~3cm 程度の球窩礫を多量に含む | 19 黄褐色土 礫をほとんど含まない | 33-a 球窩色土 10cm 程度の礫を多量に含む | 86 黄褐色土 2~3cm 程度の球窩礫を多量に含む |
| 5-c 球窩色土 2~3cm 程度の球窩礫を多量に含む | 20 球窩色土 礫をほとんど含まず砂質の強い黄色土塊が混じる | 33-b 球窩色粘砂 多量の球窩礫に砂が混じる | 88 黄褐色土 10cm 程度の礫を含む |
| 6 明黄褐色土 礫をほとんど含まない | 21 灰白色土 礫を含まず砂質の強い黄色土塊が混じる | 34 黄褐色土 礫を含まない | 89 黄褐色土 2~3cm 程度の球窩礫を多量に含む |
| 7 赤褐色土 礫を含まず粘質 | 22 黄色土 礫を含まず粘質が強い | 35 明褐色土 10~15cm 程度の礫 | 90 黄褐色土 礫を含まない |
| 8 暗褐色土 20cm 程度の大型の礫を多量に含む | 23 黒褐色土 礫をほとんど含まず砂質の強い黄色土塊が混じる | 75 黄白色土 2~3cm 程度の球窩礫を多量に含む | 91 暗褐色土 5cm 程度の礫を含む |
| 9 黄褐色土 礫を含まず砂質が強い | 24 黒灰色土 礫が球窩礫を多量に含む | 76 茶褐色土 10cm 程度の礫を含む | 92 暗褐色土 15cm 程度の礫を含む |

第 24 図 トレンチ断面図 (1)



第 25 図 トレンチ実測図 (2)

円部の北側にいたると再び広く形成されている。テラス状の施設を造る意識があったわけではなく、墳丘の傾斜面と尾根の傾斜面を画するために、地山を削った結果と考えられる。

また、このように後円部側面の裾部において平坦面が狭くなっているのは、尾根の幅を最大限に利用して後円部の規模を大きくする必要があったからと考えられ、同様に、後円部の北側裾部が再び広い平坦面を形成しているのも、あくまで墳丘の規模にこだわりのつ、円形に近づけようとした結果であろう。

こう考えると、後円部の形態が完全な円形でなく、不整形な楕円形を呈していることも説明が付き、古墳築造には、その規模に何らかの意味があるものと推測できる。

墓壇は後円部の中央に構築されている。墓壇は北・東・西の3方に、石を積み上げて壁を造っており、コの字形を呈している。壁を形成してない墓壇の南側は性格不明の遺構と繋がっている。第17・31・32・33層は主体部及びそれに伴う遺構の床面と考えられる。

以上のように、高遠山古墳は墳丘の規模にこだわりのつ、前方後円墳という墳形を目指して築造されたと考えられる。前方部の大半は地山の形を整えることで、後円部は多量の盛土を行なって構築していることがわかる。

4. 築造過程の復元

高遠山古墳の築造過程を復元してみたい。規模は墳丘築造前から決定されており、それにしたがって、地山を削り出す(第1段階)→第1次盛土を行う(第2段階)→石積の墓壇を構築する(第3段階)→主体部を構築する(第4段階)→第2次盛土をおこなう(第5段階)、という過程で築造されたと考えられる(第26図)。

第1段階(地山の削り出し)

第1段階として、地山を削る。墳丘の規模はこの段階で決定されており、墳形が多少歪んでも約50mを目標としたと考えられる。

墳丘の裾部は地山を削って平坦面を形成し、墳丘と尾根の斜面を画し、墳丘を表現する。しかし、後

円部の幅は尾根の大きさを最大限に利用しているため、この平坦面は前方部と比べて極めて狭くなっており、裾部は僅かに削られているだけである。

このことから、墳丘は50mという規模にこだわりのつ、前方後円形をめざして構築されたと考えられる。

第2段階(第1次墳丘盛土)

第1段階で削って、形造った地山に第1次墳丘盛土を行なう。

前方部の盛土はごくわずかに行なうだけで、整形を行なう。前方部の裾部には明確な平坦面があり、多量の土が堆積していた。これは前方部の盛土が崩壊し、流土となって堆積したものと考えられる。したがって、墳丘は完成時、明確な肩部を有していたと考えられる。

後円部は北側に多量の盛土を行なう。この時の墳頂部は埋葬を行なうための平坦面を造っており、この時の高さは、前方部の高さと同様にしている。

第3段階(墓壇の構築)

この段階に、主体部を設置する位置が決められたと考えられる。

墓壇は北・東・西の3方に、石を積んで壁を構築する。この墓壇は墳丘のほぼ中央に構築するが、南側は壁を造らず、主体部に伴う遺構につながっている。

この時墳頂部は平坦なため、後円部の盛土と併行して、石を積み墓壇の壁を構築していったものと考えられる。

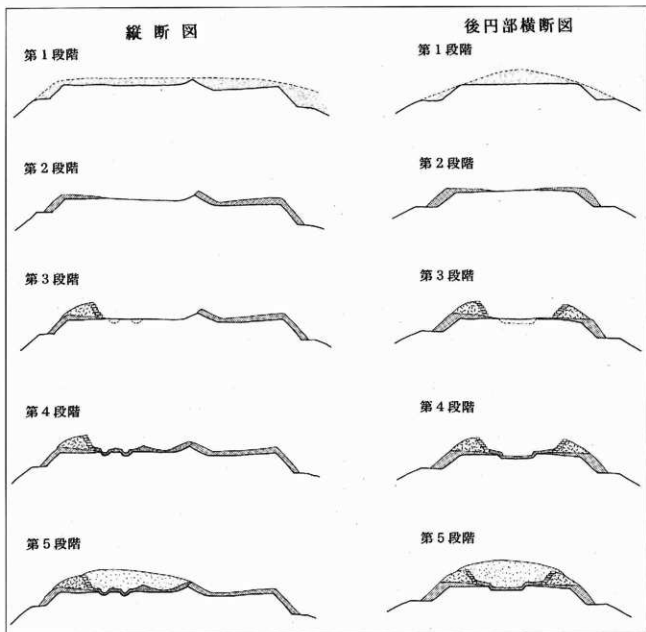
壁の高さは北側の最も高い場所で、第1段階で形成した後円部南端の、最も高い地山よりも高く構築する。

墓壇の構築と同時に、墳丘はほぼ完成した形になったと考えられる。

第4段階(主体部の構築)

高遠山古墳は同一墓壇内に主体部が2つある。第1号棺と第2号棺である。第1号棺が先に埋葬された。

主体部は2つ造る意図が最初からあったと考えられ、配置位置は墓壇のほぼ3分の1づつ均等である。墓壇内ほぼ全面に、黄色く純粋な土を貼る。



第26図 墳丘築造過程の復元

第1号棺は粘土を、第2号棺は木炭を用いて柶を造る。また、柶東側は西側より、15～20cmほど高く造られており、埋葬頭位は東枕と考えられる。

主体部に伴う遺構からは、薄い木炭層が検出され、葬送儀礼を行なった場所と考えられる。

第5段階（第3次盛土）

埋葬と葬送儀礼終了後、主体部及びそれに伴う遺構に盛土をする。順番は、後円部南北セクションから第1号棺→主体部に伴う遺構→第2号棺と考えられる。

第1号棺の被葬者を埋葬後、第2号棺の被葬者が

埋葬され、その間にはある程度の時間差があると考えられるが、明らかにすることはできなかった。

また、墓壙及びそれに伴う遺構の埋土からは、数個体分の土器片が地点を異にして見つかっていることから、盛土の際には、葬送儀礼で使用した土器を破砕したと推測する。

この盛土により墳丘を完成させたと考える。完成当時、墳丘は明確な肩部を有していたと考えられる。これは、先述したとおり墳丘裾部にはかなりの土が堆積しているため、墳丘におこなった多量の盛土が崩れたことを示している。また、墳丘は葬石・埴輪等の装飾は施さず完成させた。

第4章 主体部の発掘調査

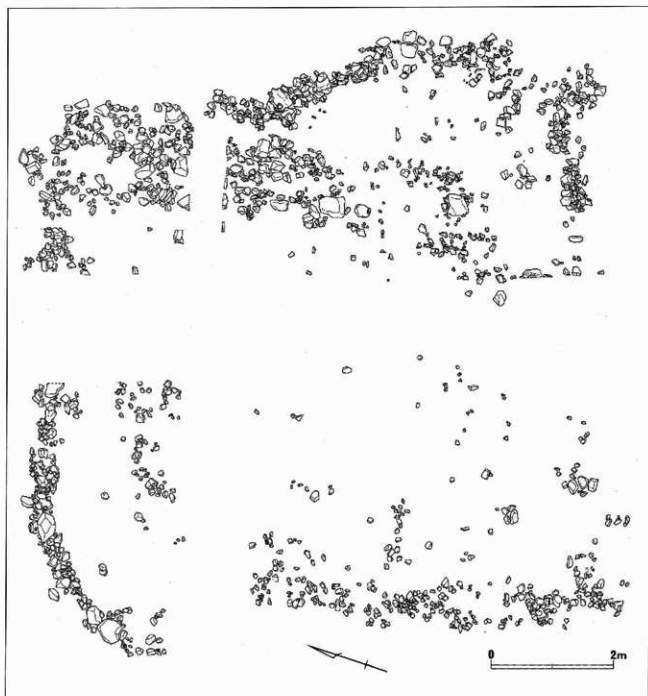
第1節 墓墳の様子

1. 調査の方法

1997年のトレンチ調査で高遠山古墳の墓墳は、石を用いて構築されている可能性が高いことがす

で指摘されていた。1999年の調査では墓墳の様相をつかむために、さらに何本かのトレンチを墳頂部に設定して調査を始めた。

墓墳内には多量の石が混入しており、トレンチで確認するだけではどれが墓墳となるのかわからな
いばかりか、はたして墓墳は石を用いて構築されて



第27図 主体部第1検出画

いるのかすら疑問が生じることとなった。そのため、調査は以下の方法で行なった。

後円部南北トレンチ・東西トレンチはベルトをつねに残す。その上で、石をすべて残しつつ墳頂部のレベルをさげる。それでもなお、石が多すぎレベルが下げられなくなった時点で、石の実測を行ない、取り上げても問題ないと判断したものだけを取り上げる。さらにレベルを下げる場合は、再び小さなトレンチを設定し、確認してからレベルをさげる。

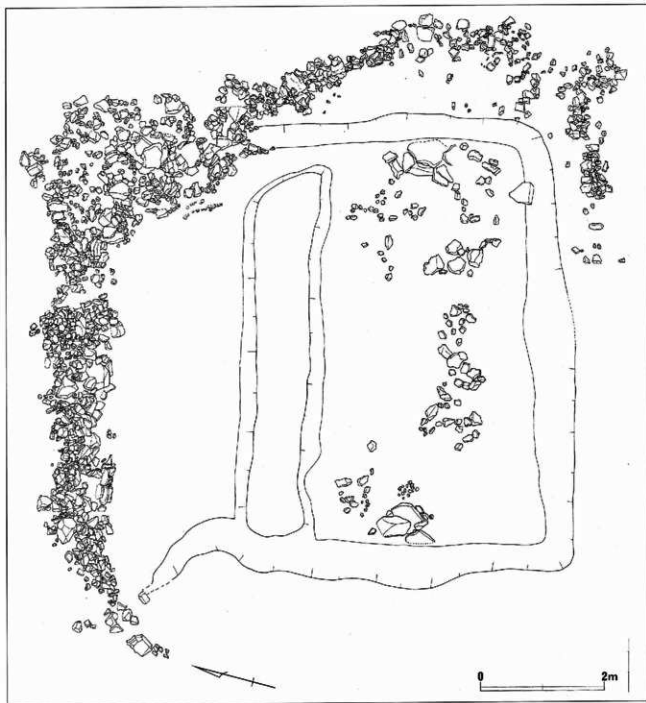
このようにして、石積の壁をもつ墓竈を検出するに至った。

第27図～第30図は主体部の検出過程をまとめたものである。

2. 主体部の検出過程

第1検出面 (第27図)

墓竈の検出過程で一旦止めた面で、墳頂部の中央



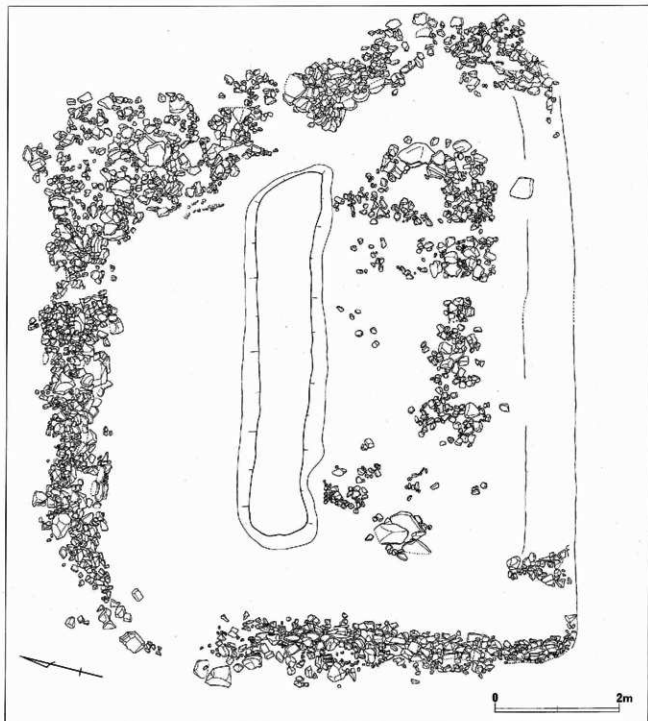
第28図 主体部第2検出面

から約60cmほど掘り下げたレベルである。なお、墳頂部は不動尊が祀られていたため、削減を受けていた。そのため、墳丘完成当時のレベルはもっと高かったものと考えられる。

この検出面で、北側・東側では一番外側に並ぶ石が壁状にまとまっていることが明らかとなったが、この内側に集中する石がどのような性格を持つのかは不明であった。すなわち、何らかの遺構を形成して

いるのか、盛土中の石なのか判断できなかった。しかし、これ以上レベルを下げることは困難であったので、実測を行ない石を取り上げることとした。

その後清掃を行ない、平面を観察したところ、黒い土が带状に走る痕跡が確認できた。そのため、これが墓壇となる落ち込みのプランではないかと判断し、より明確に観察できるレベルまで掘り下げていくこととした。



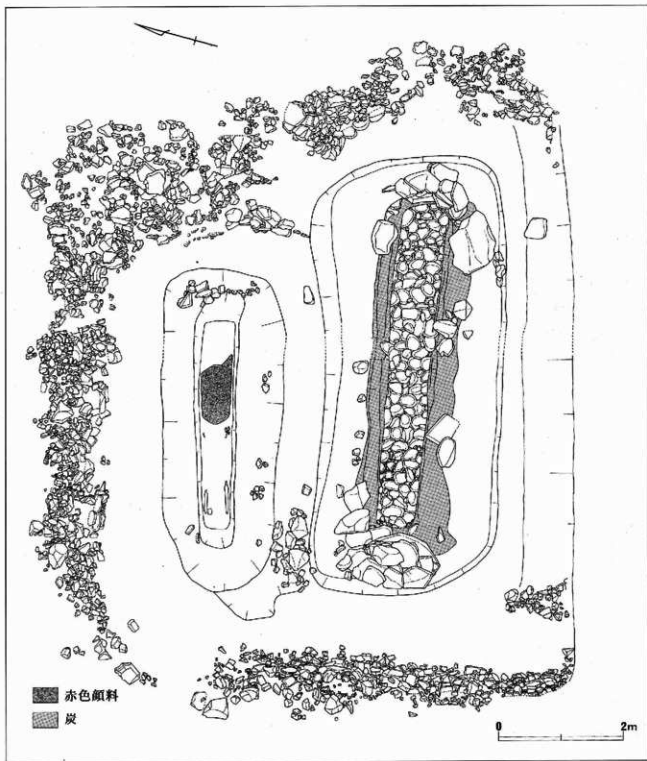
第29図 主体部第3検出面

第2検出面 (第28回)

墳頂部から、約1mほど掘り下げたレベルである。北側では明確に石を積んで壁を形成していることが確認できた。壁はそのまま周囲を囲むと考えられたが、この時点では西側に続く様子はなかった。また、東側の壁は崩れた状態で検出された。

中央に検出されたマウンド状の土は、周囲の土と異なり、黄色で砂質の強い純粋な土である。第7層に相当する。

この第2検出面に至る直前まで、第2号棺の4方を取り囲む壁は墓壇であると判断しており、北側の壁は異なる意味をもつものではないかと考えていた。



第30図 主体部最終検出面

しかし、第2検出面に至って第2号棺の小口石（東西の壁手前にある大きめの石がそれにあたる）が、墓壇壁と判断した壁の下に入っていることが明らかとなり、東西の壁を取り除く必要が生じた。

そのため、東西の壁にトレンチを設定し確認したところ、東側においてはかねてからの推測どおり、また、西側においても、かなり低いレベルではあるが、石を積んで壁を形成していることが明らかとなった。なお、南側は後円部南北トレンチで確認した結果、石積の壁は形成されていないことがわかってきた。また、南壁は第12層を掘った結果である。したがって、この後、東西の壁を取り除き、石積の壁を明確に検出することとした。

第3検出面（第29図）

東西の壁を取り除いて新たな石積の壁を検出し、さらに、第2号棺の明確な平面プランを確認するため、墓壇内のレベルを、全体的に下げた状態である。墳頂部から約1.3mほど掘り下げたレベルである。

第2号棺は第2検出面の時点では竪穴式石室を造っている可能性が考えられたが、このレベルに至っても石室は確認できず、おそらく、小口を形成しているだけであろうと判断した。また、第2号棺の南側に密集している礫群は、性格が不明で注意をして残したが、棺内を掘るのに支障をきたすため、一部取り上げることにした。

この検出面よりもう少しレベルを下げたところ、明確に第2号棺の平面プランが確認できたため、棺内を掘り下げることにした。

また、この時点で後円部南北トレンチにおいて、第2号棺は木炭を柵として用いた埋葬施設をもつことが確認でき、さらに、中央に形成されているマウンドの北側にもう一つ、第1号棺と名づけた主体部が存在し、粘土を柵として用いた埋葬施設を持つことが明らかとなった。

なお、中央のマウンドについても、第2号棺に伴うものであることがわかった。

最終検出面（第30図）

発掘調査終了時まで残っていた最後の検出面である。墳頂部から約1.5mほど掘り下げたレベルである。これ以上は、保存の必要性から掘り進めて調査

しなかった。

第2号棺の平面プラン確認後、棺内を掘り進めた。その結果、棺内には多量の石が南側を中心に混入しており、おそらく、第2号棺の南側を中心に密集していた石が崩れて、混入したものと判断した。あるいは、第2号棺を被覆する際に、石をこの部分だけ乱雑に並べたものとも考えられるが、確証はない。

第2号棺検出後、第1号棺の検出に取り掛かった。両棺のレベルはほぼ同じで、棺の周囲の掘り込みは粘土をおいかけて検出した結果である。したがって、落ち込みの範囲は、貼られた粘土の範囲を示している。

南側の墓壇の壁と判断した壁裾にある石は、高遠山では見られない素材のもので、この壁に立てかけるように置いてある。どのような意図をもって置いたものか判断できない。この素材の石は、第2号棺の小口石と同じである。また、第2号棺底部の石も高遠山のものではなく、川原石である。

3. 墓壇の構造

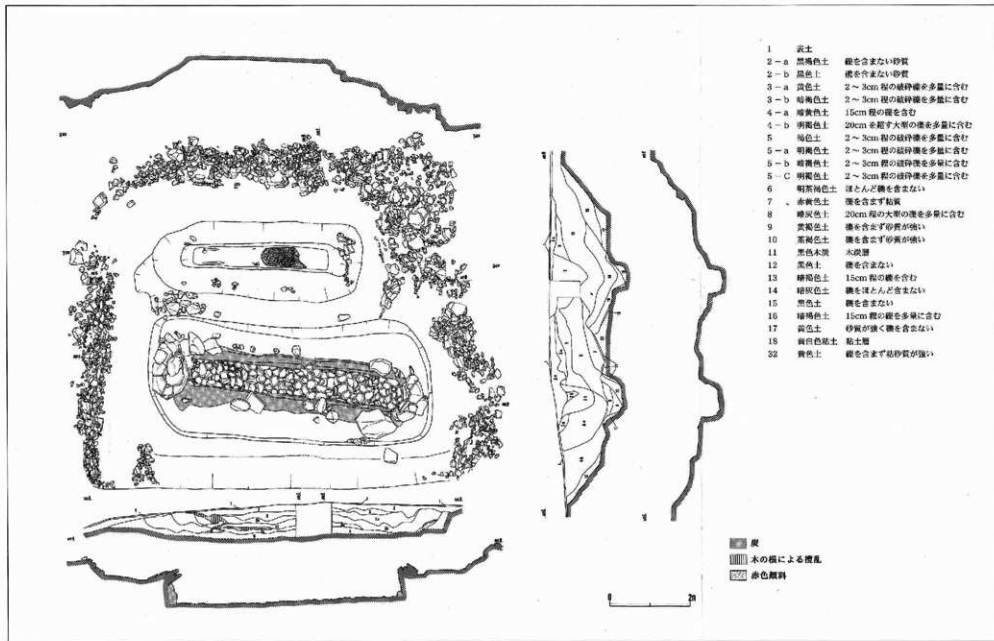
墳頂部の中央より大きな墓壇が検出された（第31図）。この墓壇は北・東・西の3方に約20cmほどの石を積み上げて壁を構築しており、南側は壁を造らず、コの字状に開く特徴を持つ。

層位は第24図の前部・後円部南北トレンチ（No.14）の所見と一致する。

墓壇を構築している石はすべて高遠山に見られるもので、墓壇埋土に混入していた石と変わらない。この石は、高遠山の岩盤と同種のもので、非常に脆く、両手で持って力を入れるだけで、鋭利な刃物で物を切ったときのようになぎに割れていく。また、風化速度も速く、土から掘り出してしばらくすると、粉々に砕けてしまう。

この墓壇内には北側に第1号棺、南側に第2号棺が、おおよそ3分の1間隔で東西に配されている。また、両者には新旧関係が認められるが、調査では複数の墓壇が切り合った状況はみられず、2つの主体部を囲むように大きな墓壇を構築したと考えられる。

形は一辺がかけた方形状を呈するが、北壁・西壁は直線的であるのに対して、東壁は第1号棺と第2



第31図 墓塚全体図

号棺の中心を境目として北側が狭く、南側が弧を描いて広がっている。まるで、主体部の大きさにあわせて造ったような印象を受ける。

南側の壁については、第12層を掘り込み、壁とした。しかし、調査終盤で墓壇からさらに南側に性格不明の遺構が発見され、このような壁は形成していなかったことがわかった。また、東壁と西壁についても、さらに南に伸びる可能性があるが、今回の調査では確かめることができなかった。

大きさは南北約8.6m、東西は狭い第1号棺側で約9.4m、広がっている第2号棺側で10.6mを測る。ただし南北については、東西の壁がまだ伸びていることも考えられるので、より長くなる可能性がある。

壁の高さにはかなり差があり、統一されていない。北壁が最も高く造られており、最高所である中央で約1.1m。そこから西側に移行するにつれて徐々に低くなっていき、北壁と西壁の境目でいったん切れる。西壁は最も低く約50cmであるが、高さはほぼ統一されている。東壁は西壁より若干高く、約80cmを測るが、北側が崩壊しており、他の壁が凄然と積み上げられた状態で検出されているだけに、どうしてこのような状況となったのか疑問が残る。

また、壁の高さについては保存の都合上から、石を積み上げた底までレベルを下げて調査したわけではないため、現況より若干高くなると思われる。

墓壇壁は、墳丘の構築過程で第3段階とした後円部に第2次盛土を行ないつつ、石を積み上げて構築された石積壁である。さらに、北壁は構築の際に石と石の間に、黄色で粘質のある土を入れて補強しており、非常に強固である。東壁も北壁ほどしっかりとてはないが、崩れていない部分では土を入れて補強している。しかし、西壁は土を入れて補強されおらず、非常に脆い。

以上、高遠山古墳の墓壇を概観してきた。この墓壇とそれより南側で発見された遺構は、後円部南北セクションの観察では繋がっており、墳丘の構築過程で同時に造られたものと考えられる。

墓壇がコの字形に3方しか壁を形成せず、このような遺構を伴うことは特筆される。今後、このような資料の類型についても検討する必要がある。

高遠山古墳は前述してきたとおり、調査過程で保存の問題が検討されることになり、主体部の形状に

大きな影響を与えるような調査を行なうことはできなかった。そのため、墓壇の構造も完全に把握できたとは言いがたい。前述したことを含め多くの問題を残している。したがって、今後の調査で、改めて明らかとなる事実もでてくるだろう。

4. 棺の配置と新旧関係

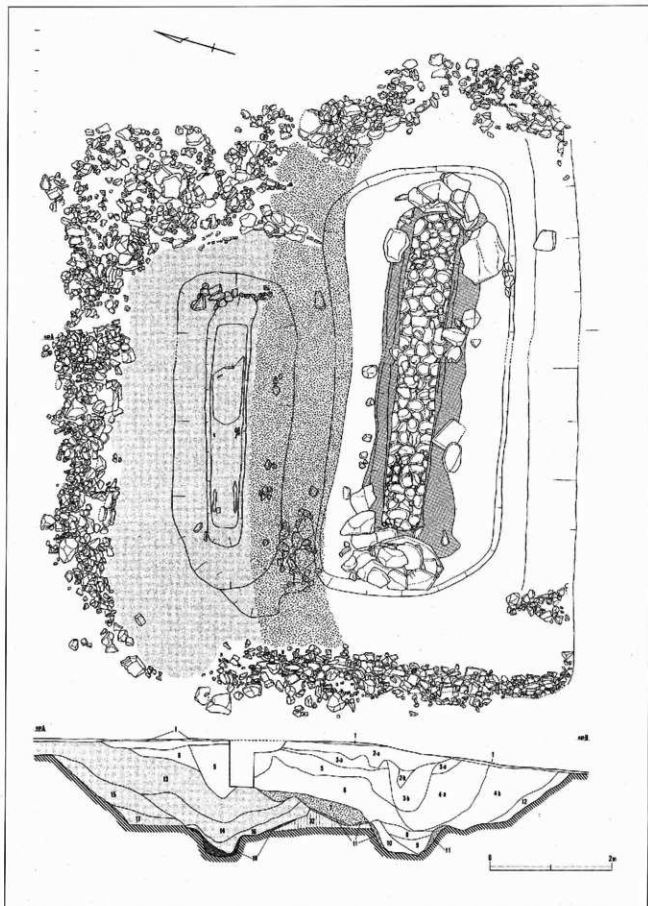
高遠山古墳の主体部は同一墓壇内に2つあり、それぞれ後円部の主軸に直行して東西に配されている。主体部が後円部に直行する例は、前方後円墳としては長野県で始めてであり、同種の例としては、前方後円墳ではあるが、松本市の弘法山古墳(松本市教育委員会 1978年)がこれにあたる。

2つの棺は、コの字形の墓壇内にほぼ3分の1の間隔で配され、頭位と考えられる東側のレベルが高く、西側に移行するにつれて低くなるように構築されている。大きさが異なるものの、足元と考えられる西側が揃えられていることは注意したい。両棺は並行ではなく、第2号棺の東側が第1号棺より若干南に振っている。このように、同一墓壇内に大小の主体部が2つ存在する例は、長野市の土口将軍塚古墳(長野市・更埴市教育委員会 1987年)と類似し検討の余地がある。

墓壇はこのような主体部の大きさや形に、まるであわせて造ったかのように構築されている。すなわち、揃えられている棺の西側と同じく、墓壇の西壁は直線的に造られ、第1号棺より長く造られている第2号棺と同じく、墓壇の東壁は弧を描くように大きく膨らんで造られている。このことは、本古墳の構築過程はもとより、棺の大きさに大小があることの意義を考える上でも重要となつてこよう。

2つの棺は調査過程で、新旧関係が明らかとなった。第32図はそれを示したものである。

第7層は砂質の強い黄色土で、墓壇内の埋土の中にあつて礫を含まない純粋な土である。この土は第2号棺に伴っており、埋葬過程で何らかの意図を持って張られた土と考えられる。この土が、第1号棺に伴う埋土である第13・14・16層を切っている。したがって、第1号棺は第7層より先に埋められたことになり、第2号棺の埋葬は、第1号棺埋葬後に行なわれたと判断される。



第 32 図 棺の新旧関係

墓壙の東壁の大きさが不整形なのは、このように第2号棺埋葬時に新しく拡張するなり、作り直すなりしたと考えることもできるが、調査で確認することはできなかつた。やはり、墓壙は大きく一つ造られたものであろう。

また、両者の新旧関係は明らかとなったが、埋葬時期の較差がどれほどあるのが、大きな疑問として残った。しかし、本古墳出土の土器はすべて小破片で、器形等の復元に足るものではなく、その較差を明確に示すような資料は得られなかつた。今後の調査に期待したいが、現在の所見では、本古墳から出土した土器群（完形土器となるものがないのは事実だが）に、それほどの時期差を与えるものではなく、これらは、ほぼ同時期と考えてよいだろう。

第2節 第1号棺の様子

1. 第1号棺の構造

第1号棺は、主軸を後円部の主軸に直行させて、ほぼ東西に設置されている。厩北からは後円部の主軸が約11度西に振るのに対し、第1号棺の主軸は約75度東に振っており、その差は86度となっている。

地山を掘り込むか、盛土を行なうかして、U字状に大きな坑を造り、砂質の強い黄色の純粋な土を貼って整形した後、多量の粘土を用いて棚となし構築している。第33図の木棺跡を囲む大きな掘り込みは、粘土の範囲を示しており、縦約6.3m、横約2mを測る。

墳頂部から約1.4m掘ったところで、大きな楕円形の粘土帯を確認し、それを目安に掘り進めると、木棺の平面プランが検出された。棺内には約15cmほどの礫を含む水っぽい土が埋没していた。木棺の形状を確認するために、小さなトレンチを入れたが、棺を被覆し埋没した粘土と、敷かれていた粘土を見極めるのは困難であった。したがって、現在の形状は汚れた粘土を掘りあげて検出したため、若干問題が残る。しかし、副葬品は純粋な粘土の直上から出土したため、この粘土が木棺を被覆していたと考えてよからう。

このような方法で検出された木棺の形態は、棺底部が平らで、南北の壁面は若干開きつつ直線的に立

ち上がる。東西の壁面は南北と比べてかなり開くの疑問を感じるが、全体として長方形の立方体を呈する。したがって、粘土棚の中に納められていた木棺は、平らな木材を組み合わせて作られたものであったと推測する。

木棺の規模は、棺縁で長さ約4.1m、幅約68cm、棺底で長さ約3.3m、幅約52cm、深さは約36cmを測る。墳頂部から棺底まで約1.9mである。東側は西側より約20cm高く造っていることや、副葬品の配置等から頭位は東枕と考えられる。

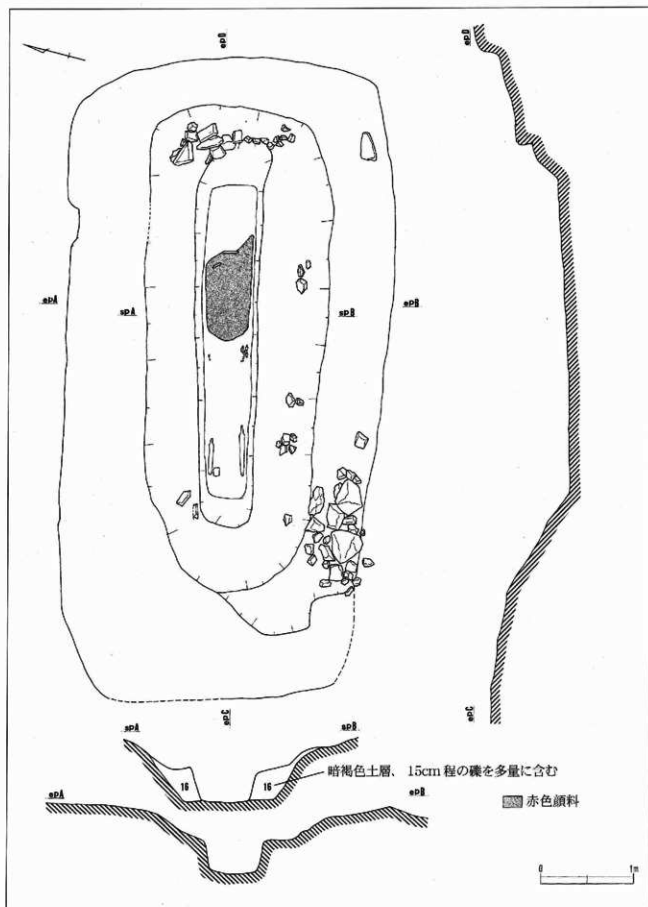
粘土棚を完全に解体する調査を行なったわけではないので、粘土の厚さ、地山の掘り方等不明な点が残る。粘土棚についてはセクションで観察する限り、木棺の横には多量の粘土を充填しているのに対し、棺底や被覆された粘土の量が、極端に少ないことは注目したい。

2. 第1号棺の副葬品

第1号棺内からは以下の副葬品が出土したが、これが1号棺の副葬品のすべてであり、副葬時以後に金属器・玉類は失われていないと考えられる。副葬品の質・量から見れば、中心主体は第1号棺である。一方、埋葬施設は後述する第2号棺の方が規模も大きく入念に作られているように見える。しかし、第1号棺も石を用いただけで、粘土の用い方等は緻密であり、単純に視覚的に第2号棺が造作の上で丁寧とは言えないと思われる。

副葬品の組成は、剣3・銅鏃4・銀鍔1・ヤリガンナ1・管玉4・ガラス玉5からなり、鏢を欠くことが異例であるが、他は前期古墳に通常見られる組み合わせであろう。これらのうち期的検討が詳細に行なわれているのは銅鏃であるが、4本の小形柳葉形は形式的にも、4種4本の組み合わせにおいても、銅鏃多量副葬以前のあり方であろう。近隣では松本市弘法山古墳にきわめて近似する銅鏃があり、鉄斧も同様である。前方後円墳では石川県分校カン山1号墳の鉄斧・玉が類例として検討の余地がある。

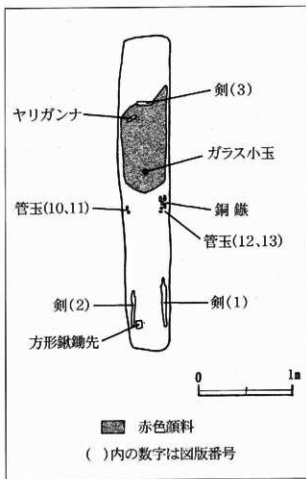
副葬品の配置(第34図)は、本古墳が木蓋掘であったため、ほぼ埋葬時の源位置をとどめているものと思われる。剣は3点あるため、便宜上長いものから剣1～剣3と名づける。剣3は棺内東側から約70cm



第33図 第1号棺

のところに、切先を北に向けて横に置かれ、その位置より、やや北西側にヤリガンナが斜めに置かれていた。残りの剣は、西側末端に切先を西に向けて、それぞれ棺南縁に剣1が、北縁に剣2が縦に置かれていた。その内、剣2の先端内側には鐵鑢先が切先を北に向けて置かれていた。銅鏃4点は棺中央南縁に、切先を西に向けて置かれていた。玉類は身に裝飾していたことを示すように、管玉が2個づつ、それぞれ棺中央の北縁と南縁に、ガラス玉が棺中央から約60cm東側に5点まとまって出土した。

また、棺床中央よりやや東側一帯に赤色顔料が付着しており、ガラス玉、剣3はその下から出土した。この赤色顔料は約1m×0.5mの範囲で広がっており、棺全体を覆っていたものではないが、副葬品の出土状況から、被葬者を埋葬し、副葬品を埋納したあとに、棺内に撒いたものであろう。



第34図 第1号棺副葬品の配置

武器

剣1 (第35図1)

全長53.2cm、剣身長42.0cm。剣身は幅2.1～3.0cm、厚4.0mm、断面形はレンズ状で鑢は観察されず、両丸造りと思われる。茎は長11.2cm、幅は関部で1.9cmあるが茎尻へ1.4cmほどで幅1.0cmになり茎尻に至る。茎尻はやや傾斜し、関より5cmのところに径3mmの目釘穴を持つ。関部は錆・破損により明確ではないが、茎と刃部の関係から、左右とも直角に5mmほどと思われる。茎には木質の付着が認められ、その末端は関部に対応する直線を成し、木柄の末端を示している。剣身の表裏各所には平織りの布の痕跡を残す部分があり、鞘ではなく布に包まれていたようである。

剣2 (第35図2)

現全長37.9cm、剣身長30.6cmだが、茎先端を欠く。欠損部の錆化は他と変わらず、副葬以前の欠損と思われる。剣身は幅2.2～3.0cm、厚4.0mm、断面形はレンズ状で鑢は観察されず、両丸造りと思われる。関部付近は錆により明瞭でないが、X線写真等から推定して、茎の現長は7.3cm、幅は関部で2.5cmあるが、関部から茎部へ3.0cmほどで幅1.3cmになり末端では1.1cm。茎尻は失われている。関より6.2cm、7.4cmに、径2.5mmの目釘穴2孔を持つ。関部は茎と刃部の関係から、左右とも直角に2～3mmほどと思われる。茎には木質の付着、片面には繊維状の巻き痕が認められる。剣身の表裏各所には平織り布の痕跡を残す部分があり、鞘ではなく布に包まれていたようである。

剣3 (第35図3)

全長18.5cm、剣身長18.3cm。剣身は幅1.8cm～2.3cm、厚4.0mm、断面形はレンズ状で鑢は観察されず、両丸造りと思われる。茎は長4.7cm、幅は関部で1.7cmあるが茎尻へ2.0cmほどで幅1.0cmになり茎尻に至る。茎尻はやや傾斜するが、先端を欠損している可能性がある。欠損とすれば、錆の状況から副葬以前の欠損であろう。現存部には目釘穴が認められないが、末端部に存在した可能性がある。関部は錆・破損により明瞭ではないが、剣身に付着する布痕が直線をなす部分に対応し、茎と刃

部の関係から見て、左右とも直角に3mmほどと思われる。茎には木質の付着が認められる。剣身の表裏各所には平織りの布の痕跡を残す部分があり、鞘ではなく布に包まれていたようである。その一部は非常に細目である。

銅鑑

4点ある。形態はすべて異なるが、いずれも筥被・脇挟を持たない小形柳葉形で、縦一文字鑄の銅鑑である。一部に矢柄・糸巻・漆状皮膜の有機質を残し、4本とも着柄されたものと考えられる。

銅鑑 1 (第 35 図 4)

現状で、全長4.99cm、鑑身長3.12cm、幅1.79cm、刃部厚6.0mm、重量は11.42gあるが、錆により側縁の一部と先端が1~2mmほど欠けている。最大幅は身部先端から3分の1ほどのところにある。刃部形状は明瞭なS字状をなすが、十字鑄は持たない。刃部は全体に丁寧に研ぎ出され、横方向の擦痕がある。茎は断面円形になるよう削られ、何面かの面を持つ。先端は切断して仕上げたようである。茎には縦方向の木質がわずかに付着する。

銅鑑 2 (第 35 図 5)

現状で、全長5.48cm、鑑身長3.74cm、幅1.68cm、刃部厚4.1mm、重量は9.37gあるが、錆により側縁の一部が1~2mmほど欠けている。最大幅は身部先端から3分の1ほどのところにある。刃部形状はわずかにS字状を成す。刃部は全体に丁寧に研ぎ出され、擦痕はほとんど認められない。茎は断面円形になるよう削られ、8面ほどの面を持つ。先端は切断している。茎には繊維状のものが巻かれ、その表面には漆状の黒い皮膜が残る。

銅鑑 3 (第 35 図 6)

現状で、全長5.46cm、鑑身長3.18cm、幅1.53cm、刃部厚3.9mm、重量は8.73gあるが錆により側縁が1mmほど、先端はそれ以上欠けている。刃部側縁形状は銅鑑2ほどではないが、ごくわずかにS字状を成したと思われる。研面の状況は錆により不明。茎は断面円形になるよう削られ、8面ほどの面を持つ。先端は整形されていないようである。茎には漆

状付着物がわずかに認められる。

銅鑑 4 (第 35 図 7)

現状で、全長6.21cm、鑑身長4.17cm、幅1.49cm、刃部厚4.2mm、重量11.93gあるが、錆により周囲が1~3mmほど欠けている。小形柳葉形としては大きい、失われた部分を加えても、鑑身長4.6cm以下と考えられ、いわゆる大形柳葉ほどではない。断面形は菱形。刃部全体が欠けており、平面形状の詳細は不明であるが、断面の最大厚が上位3分の1程度にあることから、わずかなS字状を成したものと思われる。刃部は全体に丁寧に研ぎ出され、擦痕は認められない。刃部片面に細かい布痕を残す。布に包まれていたものであろう。茎は断面円形になるよう削られ、先端は切断されたものと思われる。茎にはヨシ状の植物繊維が縦方向に残り、それを繊維状のもので巻き、その表面には漆状の黒い皮膜が残る。

農工具

方形鋸鋸先 (第 35 図 8)

鍛造方形板状鋸鋸先。長5.4cm、刃部幅6.3cm、折り返し部の長径6.5cm、短径2.0cm、重量132.5g。折り返しは下端近くに及ぶ。折り返し部内面には、柄の痕跡を示す付着物は認められない。刃部は平面・縦断面とも偏りは見られない。折り返し側面に布痕があり、布に包まれていたことを示す。

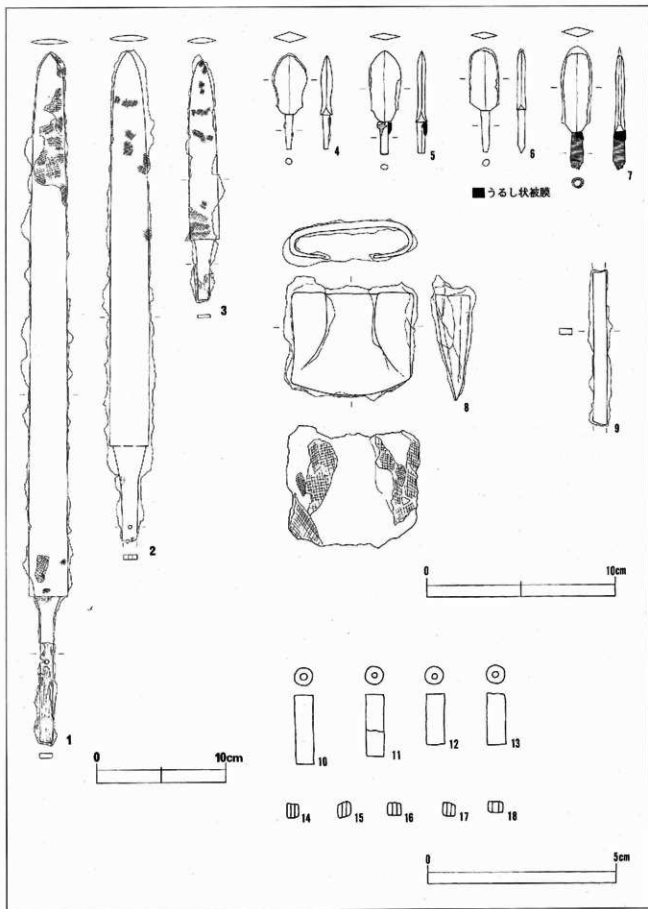
ヤリガンナ (第 35 図 9)

両端を欠く。欠損部の錆化は他と変わらず、刮削以前の欠損と思われる。現存長8.1cm、幅7mm、厚2.5mmの断面長方形の棒状鉄製品である。後述する第2号柄刷弊品のものより、やや大形のヤリガンナであろう。側面にわずかに木質が付着し、木柄の存在を示す。また、木質の上面に極めて目の細かい布痕が見られ、布に包まれていたことを示す。

玉

管玉 (第 35 図 10~13)

4個出土した。2個ずつ左右の手玉と考えられる。いずれも、グリーンタフと思われるが、1・2と3・4はそれぞれ同形同大で、1・2は白っぽく、両面穿



第35図 第1号棺副葬品

孔の可能性が強く、3・4より長い。3・4は灰色が
かって、片面穿孔と思われる、1・2より短い。1・2は
右？手、3・4は左？手位置の出土であり、着装・副
葬位置により色調・制作技法・形状の差を認めるこ
とができる。入手時期などの差を示す可能性があろ
う。

- 1 長18.2mm、径4.9mm。(10)
- 2 長16.2mm、径4.6mm。中央からの折れは副
葬以後であろう。(11)
- 3 長13.9mm、径4.9mm。(12)
- 4 長13.8mm、径5.0mm。(13)

ガラス小玉 (第35図14～18)

5個出土した。すべてスカイブルー系の同一色調
である。孔は1が細く5は特に大きい、他はほぼ
同じ。5だけが長さより径が大きく、形態が異なる。

- 1 長3.6mm、径3.4mm。(14)
- 2 長4.0mm、径3.6mm。(15)
- 3 長3.7mm、径3.8mm。(16)
- 4 長3.9mm、径3.8mm。(17)
- 5 長4.3mm、径4.4mm。(18)

3. 第1号棺構築過程の復元

以上、第1号棺の様子を概略してきた。墓壇の壁
や粘土櫛を、完全に解体する調査を行なったわけ
ではないが、その構築過程の概略は把握できた。ここ
までの調査の知見から、第1号棺を納めていた、主
体部構築過程の復元を試みて、まとめたい。

主体部の構築と埋葬・葬送儀礼は、第3章で考察
した。墳丘の構築過程の第4段階にあたり、構築過
程は大きく7段階に分けられる。第36図はそれを
模式的に示したものである。

第1段階

棺を置くための基盤を作る。このとき東側をやや
高くする。高遠山古墳は後円部への盛土とともに、
石を積んで壁を造り墓壇を構築する。墓壇内は完全
に地山まで確認する調査を行っていないため、こ
の部分是不明瞭であるが、この段階に行なう作業と

して3つのケースが考えられる。1. 地山を掘り込
んで坑を穿つ。2. 盛土を行なって坑を造る。3.
もしくはその両方。である。

第2段階

黄色の土を貼る。第1段階で作った基盤に、黄色
で砂質の強い純粋な土を貼って、全体を整形する。
この土は墓壇内及びそれに伴う遺構まで見られるた
め、全体的にこの土を貼って、一つの床面を作った
と考えられる。

第3段階

粘土を貼る。第1号棺は平らな木材を使用してい
る可能性が強いため、坑の底に平らに粘土を貼る。
この粘土は10cm程度かそれ以下と非常に薄い。

第4段階

棺を設置する。検出された粘土の形態は割竹型木
棺跡に見られるような、丸みを持っていない。底・
壁面ともに直線的であることから、平らな木材を組
み合わせて棺を作ったものと考えられる。

第5段階

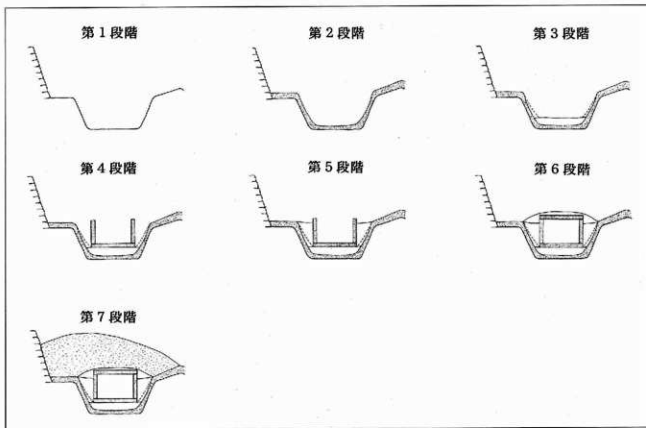
粘土を充填する。坑と棺の隙間に、床のレベルと
同じところまで粘土を充填する。かなり厚く充填し
ており、底の薄さとは対照的である。ここまでの作業
を終えて、埋葬・葬送儀礼を行なったと推測する。

第6段階

棺に蓋をし、薄く粘土で被覆する。これは副葬品
が出土するレベルの直前に、土混じりの汚れた粘土
がのっていたことから推測される。

第7段階

盛土を行なう。この後、第2号棺の埋葬が予定さ
れていたため、墓壇内全体を覆うものではなかった
と考えられる。とりあえず、墓壇の北壁から棺の反
対側まで、粘土を完全に覆う程度にとどめたのであ
ろう。



第36図 第1号棺構築過程の復元

第3節 第2号棺の様子

1. 第2号棺の構造

第2号棺は後内部の主軸に直行させて、東西に配されている。墳丘の主軸が磁北より約11度西に振っているのに対し、第2号棺の主軸は約79度東に振っており、その差は92度となり主軸とほぼ直角である。第1号棺と並行ではなく、第2号棺がややズレている。墓壇の形との関係を考えて、第1号棺はそろっているが、第2号棺がやや斜行して配され、平面で見るとややバランスが悪い。

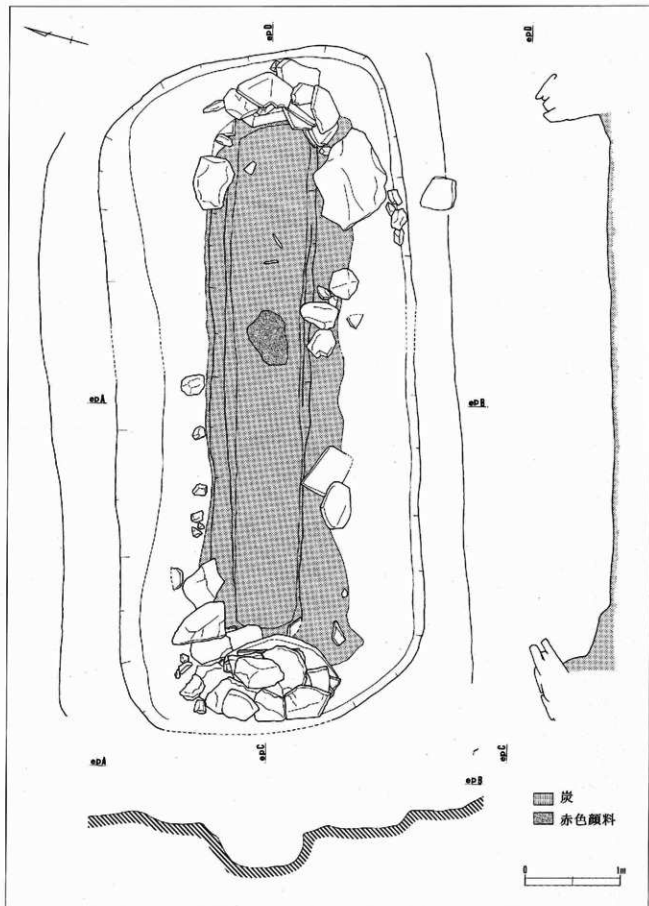
埋葬施設は第1号棺と同じく、地山を掘り込むか、盛土をするかして、U字状に坑を作り、黄色で砂質の強い土を貼って整形している。さらに、高遠山のものではない平らな石を、東西の小口に何枚も重ねて置き、底には川原石を敷き詰め、小石室のようなものを作る。木棺の周囲は木炭を用いて柵をなし、構築している。

東側の小口は、大型の石を1枚立てており、その大きさは、縦80cm、横1mを超え（下部が木炭で

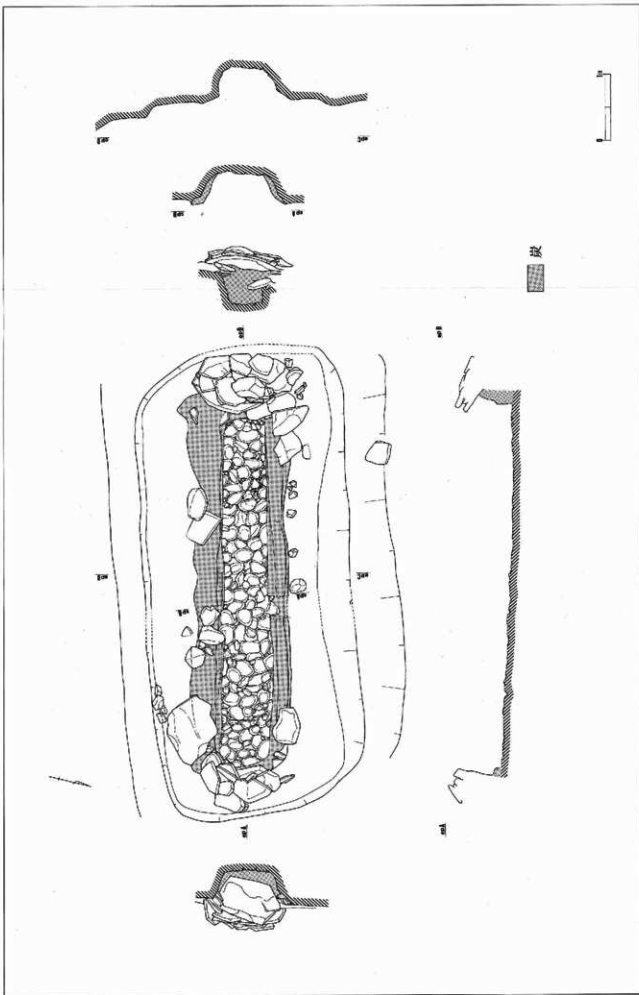
覆われており、大きさが明らかではない）、不整形な五角形を呈する（第38図）。この石の上に60cm前後の石を広く何枚にも重ねて置いている。厚さは前者の石が約10cmで、後者の石は3cm前後である。さらに、この小口から南側の棺縁には縦1m、横80cmほどで菱形を呈する大型の石が1枚置かれている。同素材の石と思われるが、表面がまっすぐできれいな他の石と違い凹凸で歪んでいる。

西側の小口はやや異なり、石を立てていない（第38図）。かわりに、1.2mを超す大型の石を1枚一番下に設置し、その上に60cm前後の石を広く何枚にも重ねて置いている。厚さは前者が約7cm、後者が3cm前後である。さらに、東側小口とは対照的に、小口から北側の棺縁にも50cm×35cm前後の石を4枚並べて置いている。1枚は土圧によって小口にせりだしている。また、西側小口から南側の棺縁3分の1ほどの場所にも、同様の大きさの石が2枚置かれている。

底部は、20cm前後の平らな川原石が丁寧に敷き詰められており、土が見えるような隙間がない。さらに、西側では4cmほどの小さな石を、石と石の間



第37図 第2号槽 (1)



新石器时代 (2)

に充填している部分も見られる。この川原石は壁際では斜めに立てかけられており、全体的になだらかな弧を描いている。

木炭はこのような施設と、木棺の間を埋めるように充填している。副葬品は木炭層の直上から出土していることから、礫床の上にさらに木炭を敷き木棺が置かれたことがわかる。木炭の厚みは、底部では約2~3cmと薄いのが、壁面は南北トレンチでは約12cmとかなり厚い。また、副葬品が木炭層直上から出土したことから、木炭は埋葬時、木棺を覆っていなかったことがわかる。

形状は南北の棺縁から、棺底にむかって緩やかに弧を描き、3分の1程度のところに明瞭な陵を持ち、角度を変えて棺底に至る。棺底はなだらかなU字状を呈する。また、東西小口の壁面は直線的に棺底に至り、ほぼ直角となる。壁面の途中で持つ陵は、場所によっては棺底から弧を描き、オーバーハングして陵を作り、棺縁に向かって開くような形状を呈している。このような部分は検出が難しく、凝固材を使って固めながら検出した。この形状が木棺腐蝕後土圧によってせり出したものなのか、木棺の形状を示すものなのか判断が難しいが、土圧によって、このように弧を描く形状は呈さないと考えられるため、木棺の形状を示すものと判断する。

以上の知見から、第2号棺に採用された木棺の形態は、割竹型木棺であったと推測する。第1号棺が、平らな木材を組み合わせた木棺と考えられるため、同一墓境内に、両者異なる埋葬施設・木棺形態を採用していることは注目されよう。

このような木炭層の規模は内側で、長さ約5.7m、幅約1.2m、深さ約60cmを測る長大なもので、木棺の規模も、ほぼこれにそった大きさと考えられる。

また、埋葬施設は全体的に東側が西側より高く作られており、棺底では約23cm東側が高い。副葬品の配置等から、頭位は東枕と考えられる。

以上、第2号棺の埋葬施設を概略した。木炭層が長野県で発見されたのは本古墳が初例である。もともと類別が少なく、前期古墳では数例しか確認されていない。加えて、太平洋側の地域に集中しており、日本海側で確認されたのも異例と言え、今回の発見の意義は極めて大きなものとなる。

また、川原石を用いて礫床を行なう例は、本古墳

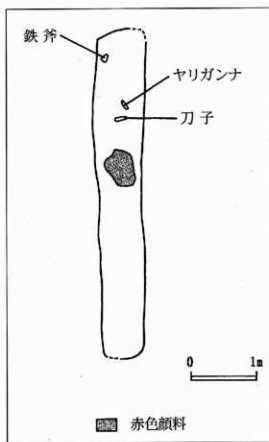
に先行すると考えられる松本市弘法山古墳にあり、小口に石を立てて置く例は、中野市京塚古墳、長野市大星山古墳群等の北信濃地域でよく見られることで、今後検討の余地があろう。

今回は東西小口の石積、礫床、木炭層等を解体する調査を行なったわけではないので、施設の全様を把握できたわけではない。今後の調査で明らかとなる部分もあるだろう。

第37図は木炭層検出面を、第38図は底部木炭を除去後の礫床検出面を示す。

2. 第2号棺の副葬品

第2号棺の副葬品は鉄斧1・ヤリガンナ1・刀子1からなり、埋葬施設の造作の丁寧さと比べて、極めて貧弱な組成である。先述したように第2号棺は礫床を完全に解体する調査を行なったわけではないので、これが副葬品のすべてではない可能性があるが、ほとんど単品副葬とも言える様相は弥生墳丘墓に通ずる点がある。



第39図 第2号棺副葬品の配置

また、欠損品を副葬したと思われる例が多いことも注目しておかねばならない。

副葬品の配置(第39図)は、本古墳が未盗掘であったため、ほぼ埋葬時の現位置をとどめているものと思われる。鉄斧は東側小口から30cmほどのところ、北側の壁面近くに刃部を西よりやや北に向けて置かれていた。刀子は東側小口から3分の1ほどのところに、刃部を北に向けて置かれていた。この置かれかたは第1号棺の、剣3の置かれかたと、位置や刃部の向きまで同じである。ヤリガンナは刀子よりやや東に斜行して置かれていた。

また、木炭の床中央には赤色顔料が付着していた。

農工具

鉄斧(第40図1)

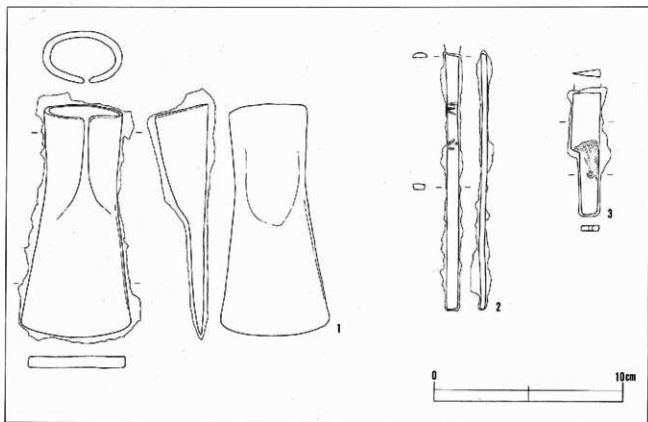
鍛造有袋鉄斧、長12.3cm、刃部幅5.9cm、袋部長径4.2cm、短径2.9cm、重量288.5g。袋の合わせ目は2mmほど開く。袋部内面には木質が付着し、木柄の装着を示す。刃部は平面・断面とも偏りは見られない。

ヤリガンナ(第40図2)

刃部を欠く。欠損部は他と同様の錆化状態で、副葬以前の欠損と思われる。現身長13.5cm、幅6~7mm、厚2.5mm。本来はこれに1~2cmの刃部が付いたものと思われる。縦断面形の茎部末端のわずかな湾曲は本来の形状と考えられる。茎部の一部にわずかに縦方向の木質が付着する。また、裏表各所に横方向の繊維状の巻き痕が見られる。木柄を装着するための造作であろう。茎の断面形は厚2.5mmの長方形であるが、先端近くは片丸状となる。

刀子(第40図3)

先端部欠損。長6.4cm、刃部幅1.5cm、峰厚4.0mm。断面は二等辺三角形を成す。茎は3.3cm、幅1.0cm、厚3.0mm、やや傾斜のある片間で、関寄りに径2.0mmの目釘穴を持つ。木質の付着が茎から刃部の一部にまで認められるが、繊維の向きが茎・刃に平行せず、やや斜行する。木柄であろうが、刃部に及ぶこと、斜行することはやや異例である。折れ部の錆化は他と変わらず、副葬以前の折損と思われる。



第40図 第2号棺副葬品

3. 第2号棺構築過程の復元

第2号棺の埋葬は、第1号棺の埋葬終了後に行なわれている。完全に解体する調査を行なったわけではないが、構築過程の概略は把握できた。8段階に大別される。第41図はその構築過程を模式的に示したものである。

第1段階

第1号棺第2段階で作った黄色土をU字状に掘り込んで、木棺を設置するための坑を作る。東側を西側より高くする。この時、すでに埋葬されていた第1号棺の盛土を削っている。

第2段階

再びつくった坑に、もう一度黄色の土を貼って整形する。この段階については、木炭・裸床を解体するような調査を行っていないので、推測の域を出ない。第1号棺のセオリーにしたがった。

第3段階

東側に縦80cm、横1mほどの不整五角形の石を立てる。さらに、縁に60cmほどの石を数枚並べ、重ねて置く。同様に西側も1.2mほどの平らな石を縁

に置き、その上に、60cmほどの石を数枚並べ、重ねて置く。小口の構築である。続いて南北の縁にも、所々に同様の石を置く。

その後、底に平らな川原石を敷き詰める。20cmほどの石を隙間なく敷き詰め、場所によっては小さな石を、大きな石と石の間に充填する。壁際には石を立てかけ、全体的にU字状を作る。

ただしこの順序は、川原石→小口に石を置く、というように逆となる可能性がある。

第4段階

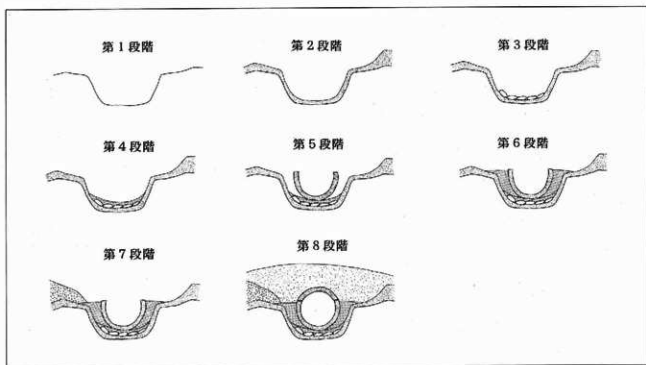
敷き詰めた川原石の上に、木炭を入れる。木炭の厚さは2~3cmほど。ただし、東西小口は10cm以上木炭が堆積していた。

第5段階

割竹型木棺を設置する。規模は、検出された木炭椁の形状に従えば、縦5.7m、横1.2mよりやや小さい程度であろう。

第6段階

木棺と坑の間に木炭を充填する。木炭の厚さは約12cmと厚く、底部の薄さと対照的である。このような状況は、第1号棺と近似する。



第41図 第2号棺構築過程の復元

第7段階

棺の北側に、黄色の土を貼って、マウンドを作る(第7層)。この土は棺の縁から、削られた第1号棺の盛土部分まで覆うように貼っている。葬送儀礼の際、見ためを良くしたのであろうか。埋葬・葬送儀礼はこの段階終了後行なうと推測する。

第8段階

棺に蓋をして、盛土を行なう。棺の上に木炭で被覆した形跡はなく、直接盛土を行なっている。ただし、木炭樫の検出過程で、南側の棺縁に多量の石が密集することが確認され(第29図)、棺内壁際にも、それに添って、落ち込んでいた。したがって、盛土を行なう際、棺の南側には、多量の石を乱雑に並べて置いた可能性もある。

第4節 墓塚に伴う遺構

高遠山古墳では墓塚に伴って遺構が確認されている(第43図)。

この遺構は、後円部の南側から確認されており(第23図)、墓塚に繋がっていることから、墓塚に向けて開く、コの字状又はU字状を呈すると考えられる。後円部南側の末端から地山を掘り込んで造っており、西側では墓塚のように石を並べて壁とする。

床面には、墓塚の床に使用されている黄色の土と同質の土を貼っている。さらに、後円部南北セクション(第43図sp A-sp B)の観察では、この床面は平らではなく、中心が窪み、すり鉢状を呈する。また、直上には黒色の木炭層(第30層)が薄く広範囲に広がっており、焼土と考えられる。この焼土は、後円部南側に東西に設定した、No. 15トレンチ(第23図)でも確認されている。セクション(第43図sp G-sp H)を観察すると、焼土のつた床面は東側が高く、西側に至るにつれて低くなっていることがわかる。

この床面直上の焼土からは、図示することはできなかったが、赤色塗彩された土器片が出土した。

さらに、後円部南北トレンチを調査中、焼土部よ

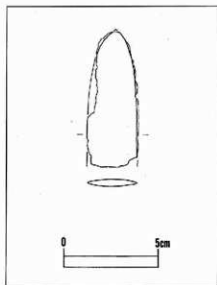
り鉄剣の先端部破片が出土した(第42図)。

この遺構は、一部しか調査しておらず、詳細は不明であるが、いくつかの点からその性格が推測できる。1. 遺構は、墓塚の壁を作っていない南側から検出されており、墓塚と繋がっている。2. 床面に広い範囲で焼土が検出されている。3. 焼土から赤色塗彩された土器片が出土している。以上の点から、この遺構は葬送儀礼に関連した、「祭祀の場」のようなものを形成していると考えられる。

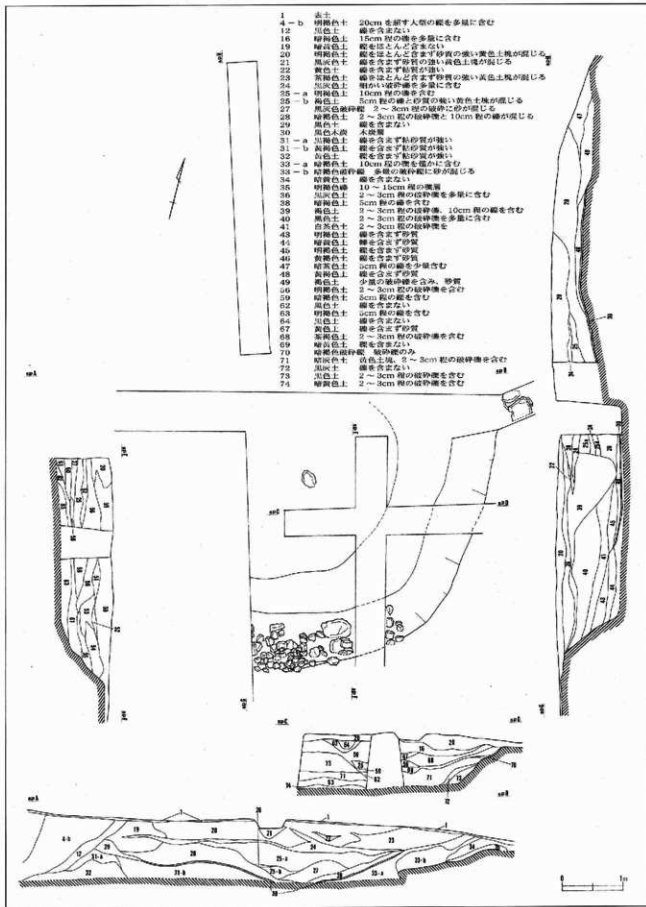
今後の調査では、この遺構の性格解明が重要な課題となる。この遺構の性格がより明確になれば、墓塚が南側に壁を持たない理由や、葬送儀礼の復元等を含む、高遠山古墳におけるいくつかの問題が解決されることと思われる。

鉄剣(第42図)

先端部破損。長7.2cm、剣身幅2.7cm、厚3.5mm、断面形はレンズ状で鑄は観察されず、両丸造り。一部にわずかに縦方向の木質の付着が認められ、木鞘の可能性もある。折れ部の錆化は他より新しく、埋没と折損には時間差があると考えられる。



第42図 後円部南北トレンチ出土鉄剣



第43図 主体部に伴う遺構

第5章 土 器

第1節 出土状況

今回の調査で、高遠山古墳から出土した土器は、どれも小破片で完形土器となるものはない。総計305点を数え、墳頂部を中心に出土している。土器群は在地系と外来系に大別され、器種構成は壺・甕・鉢・高坏となっている。

その他、前方形裾部の流土から、同一個体と考えられる土器片が何点か得られているが、器形が伺えるものではなく、図示できない。胎土・色調から在地系の土器ではなく、他地域から持ち込まれたものと考えられる。

第44図は主体部及びそれに伴う遺構出土土器の、分布状況を示したものである。

出土状況は、箱清水系甕形土器の口縁部1点(第46図3)が、木炭層直上から出土。さらに、図示できなかったが木炭内から、箱清水系の櫛描文が施文された土器の胴部が出土した。その他の土器はすべて主体部と、それに伴う遺構の盛土内からの出土である。

土器が両主体部上面の盛土内から、かなり集中して出土していることは特筆できる。同一個体と考えられる土器が、地点を異にして出土している。それも、主体部のレベルと異なり、多くは墓壇の壁上端レベルからの出土である。後円部南北トレンチセクションから、墓壇内の盛土は各主体部に向かって陥没していく状況を示しているが、土器の出土状況もそれに添ったものとなっている。

このような出土状況から、土器は葬送儀礼終了後、主体部に盛土を行なう際、ある一定のレベルで破砕して抱いた可能性が指摘できる。先述したが、墳頂部は不動尊建立によって削平されている。したがって、これらの土器は墳頂部に置かれたものとは考えられない。

また、東海系小型高坏の脚部(第45図5)が、第2号棺内の埋土から出土しており、他と状況が異なることは注意が必要であろう。

このような出土状況は、主体部に伴う遺構も同様で、ほぼ現在の墳頂部直下からの出土となる。図示

した大型の壺形土器等もそれにあたる。ただし、図示できないが、赤色塗彩された土器片が、床面の木炭層から出土している。

第2節 詳 細

分類において在地系としたものは、本地域において弥生時代後期以来の伝統を、色濃く残す形態を呈している土器群を指す。また、外来系としたものはその形態から、他地域の系統を引くものを指す。本来なら、胎土等による検討も行なわなくてはならないが、本古墳出土の土器群において、それを行なうことが極めて困難であるため、形態による分類に頼らざるを得ない。

今回の調査で出土した土器群の器種構成は、壺・甕・鉢・高坏となっている。この内、在地系と考えられるものは箱清水系の壺・甕・鉢があり、外来系と考えられるものに壺・高坏がある。

1. 在地系土器

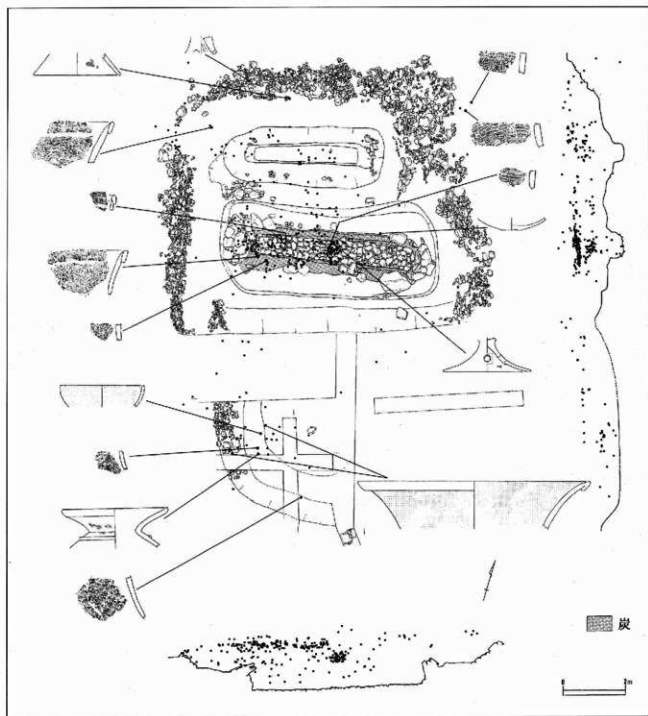
壺形土器(第45図1・第46図1)

第45図1は、口径約37.3cmを測る大型の壺形土器口縁部である。折り返し口縁をもち、頸部から口縁部にむかって朝顔状に開いている。口縁折り返し部を除く及び内面に赤色塗彩がなされる。調整は摩滅が著しく観察できない。胎土の色調はにぶい橙色で、焼成は悪く脆い。主体部に伴う遺構から出土。

第46図1は壺形土器の口縁部である。小破片で口径等復元できない。折り返し口縁をもち、この部分に、横方向の櫛描摩滅状文を施文する。内面に赤色塗彩がなされるが、器表は摩滅が著しく観察できない。胎土の色調はにぶい橙色である。主体部第2号棺上面の盛土から出土。

甕形土器(第46図2～9)

4を除きすべて同一個体の甕形土器と考えられる。折り返し口縁をもち、この部分に、横方向の櫛描摩滅状文を施文する。胴部第1施文帯に波の細かい櫛描



第44図 土器出土状況

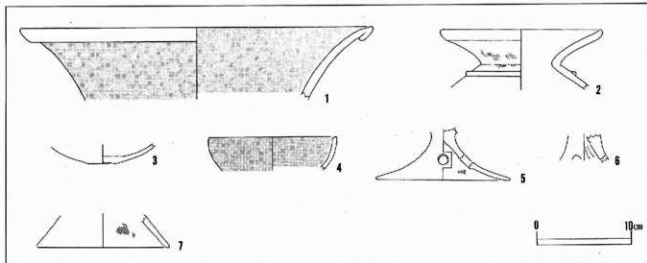
波状文、第2施文帯に横方向の櫛描麻状文、第3施文帯に再び波の細かい櫛描波状文を施文する。調整痕は観察できない。色調は明るい褐色で、焼成は悪く脆い。主体部の盛土から点在して出土。ただし、3の口縁部は木炭塚の西側小口付近の縁直上から出土したため、他の土器と出土状況が異なり、他個体とも考えられる。

4は変形土器の胴部で、横方向の櫛描麻状文の下

に櫛描波状文が施文されている。色調はにぶい橙色で、焼成は悪く脆い。他の変形土器と異なり、胎土・厚さ・焼成等は第46図1の壺形土器と似る。主体部に伴う遺構床面近くの盛土から出土。

鉢形土器 (第45図4)

口径約13.6cmを測る鉢形土器の口縁である。胴部から口縁部にかけて内傾し、口縁端部は平らに面



第45図 土器 (1)

取りされる。器表及び内面に赤色塗彩がなされ、横方向に筥磨き痕が観察されるが顕著ではない。胎土の色調はにぶい橙色で、焼成は良く、緻密で硬質である。主体部に伴う遺構の盛土から出土。

2. 外来系土器

壺形土器 (第45図2・3)

2は口径約16.2cmを測る壺形土器である。頸部から口縁部にかけてやや外反するが、口縁部で陵をもち、端部はつまんで立ち上げる。頸部下端に断面三角形の張り付け突帯がめぐる。器表は横方向に良く撫でられ、頸部には刷毛目痕が斜行する。胎土の色調は橙色で、焼成は良く、緻密で硬質である。主体部に伴う遺構内の盛土から出土。形態・調整方法等これと近似した土器が、安源寺城跡遺跡の第1号前方後方墳丘墓より出土(1999年 中野市教育委員会)しているが、本古墳のものは簡略化が認められる。

3は底径約3cmを測るひさご壺の底部と考えられる。底部はやや窪みをもち、胴部に向って緩やかに

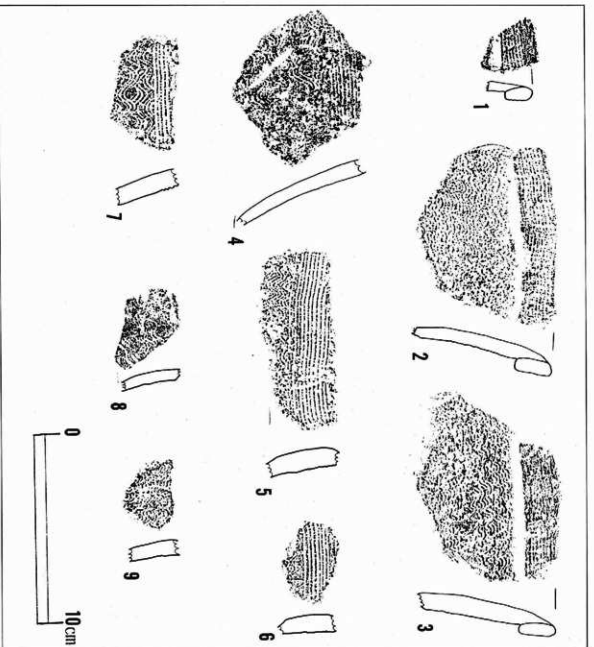
内傾しながら立ち上がる。縦方向に細かい刷毛で調整する。また、縦方向に筥磨き痕が観察されるが、顕著ではない。色調は赤橙色で、焼成は良く、緻密で硬質である。主体部の盛土から出土。

高环形土器 (第45図5～7)

5は底径約14.2cmを測る。小形高環の脚部と考えられる。底部に向って外反しながら大きく開く。円形空かしは計4つと思われる。内面に刷毛目調整痕が観察される。色調は橙色で、焼成は悪く非常に脆い。第2号棺内埋土より出土。この土器は、愛知県埋蔵文化財センターの赤塚次郎氏より、廻間編年Ⅲ式の1段階に比定されるとの御教示を受けた。

6は高環の脚部上半で、内面に縦方向の筥磨き痕が観察される。色調はうすい赤茶色で、焼成は良く硬質である。主体部の盛土より出土。

7は底径14.2cmを測る高環の脚部下半である。外反や内傾せず直線的である。内面に刷毛目調整痕が残る。色調はうすい赤茶色で、焼成は良く硬質である。



第 46 圖 土器 (2)

第6章 ま と め

第1節 調査の成果

高遠山古墳は全長51.2m(推定)、高さ4mを測る未盗掘の前方後円墳である。後円部を平野に向けて尾根上に築造され、主軸はほぼ北である。後円部と前方部の主軸がズレる特徴を持ち、後円形は不整形な楕円形を呈する。前方部が10mほど破壊されているため、その形態は不明であるが、長野県史資料(松澤芳宏・田川幸生 1982年)の実測図では楕形と呈することはない。墳丘裾部に多量の流土が堆積することから、墳丘完成時は明確な肩部を有していたと考えられる。埴輪の樹立や葺石・段築といった装飾は認められない。墳形は更埴市森將軍塚古墳(更埴市教育委員会 1992年)と類似する。

墳丘は地山を多分に利用して構築している。前方部は地山を削って形を造り、若干の盛土をして整形している。後円部は前方部に比して多量の盛土で構築し、前方部より約1.5m高い。

墓壇は北・東・西の3方に、石を積み上げて壁を構築されているが、南側は壁を造らず、焼土を持つ遺構へ向けて開いている。この石壁は、石と石の間に良質な土を充填して補強しているが、西側の石壁では認められない。墓壇は後円部構築時に盛土と伴に構築したと考えられる。

主体部はこの墓壇内に2基発見され、両者共に墳丘の主軸に直行する。長野県の前方後円墳としては初例であるが、前方後方墳の松本市弘法山古墳(松本市教育委員会 1978年)と同例である。両主体部には新旧関係が認められ、粘土櫛を採用する第1号棺が、木炭櫛を採用する第2号棺に先行する。

第1号棺の木棺の規模は4.1m×0.68m、深さ36cmと推測され、形態は平らに加工した木材を組み合わせたものと考えられるが、問題が残る。粘土櫛は木棺全体を被覆していたが、横の厚さに比して底と上部を覆った粘土は極めて薄い。頭位は東枕であろう。

副葬品の組成は剣3・銅鏃4・銀鋤先1・ヤリガンナ1・管玉4・ガラス玉5からなる。床面には頭部と考えられる位置を中心として赤色顔料が撒かれてい

た。玉類以外の副葬品はすべて布に包まれて副葬されたと考えられる。銅鏃は松本市弘法山古墳出土のそれと極めて近似し、検討の余地がある。

第2号棺は、小口に石を積み上げており、底部には川原石を敷き詰めて小石室のようなものを形成し、木炭を充填して櫛としている。木棺の規模は、5.7m×1.2m、深さ60cmと推測され、形態は割竹型と考えられる。木炭は棺の上部を被覆していない。松本市弘法山古墳が襷櫛を採用しており、中野市京塚古墳、長野市大星山古墳群等(長野県埋蔵文化財センター 1996年)では小口に石を立てている。

副葬品の組成は鉄斧1・ヤリガンナ1・刀子1からなり、第1号棺に比して貧弱である。床面には頭部と考えられる位置を中心に赤色顔料が撒かれていた。ほとんど単品副葬とも言える組成は、富山県谷内16号墳(小矢部市教育委員会 1988年)のそれと同じである。鉄斧は松本市弘法山古墳のそれと近似し、石川県分校カン山1号墳(石川県考古学研究会 1978年)の鉄斧・玉とも検討の余地がある。

主体部及びそれに伴う遺構から出土した土器群は在来系と外来系に大別され、龔・壺・鉢・高杯がある。在来系土器は弥生時代後期～古墳時代初頭と考えられている箱清水系の土器である。外来系土器は東海系の高杯脚部が出土しており、赤塚次郎氏の御教示により、廻問Ⅲ式の1段階に比定されるという。以上の点から高遠山古墳の築造は、畿内の布留0式並行期に比定され、長野県最古の前方後円墳と考えられ、東国においても最古クラスとなろう。

第2節 今後の課題

今回の調査で、中野市には長野県最古の前方後円墳が存在することが判明した。しかし、高遠山古墳の発掘調査は未解明の部分を残している。今後の発掘調査では、主体部に伴う遺構の解明と主体部との関係、主体部の解体による構造の解明等が課題となる。

当地域は集落遺跡から出土する土器群により、北陸・東海地域の影響を強く受けた地域として、以前

から注目されている。土屋積氏は、このような外来系土器、特に東海系土器の多出は、赤塚次郎氏の言う東海系土器の第1次拡散現象(赤塚次郎 1990年)に対応する現象とし、南方からの波及ルート存在の可能性を指摘している(土屋積 1994年)。

近年の中野市教育委員会による発掘調査で、安源寺遺跡から前方後方周溝墓(中野市教育委員会 1995年)が、安源寺城跡遺跡から前方後方墳丘墓(中野市教育委員会 1999年)が発見され、東海系土器が主体として出土した。このことは前方後方墳とS字甕A類の関係を指摘した土屋氏の見解を裏付けることになろう。

前方後方墳丘墓の築造をになったのは、安源寺遺跡・七瀬遺跡の集団であると考えられるが、高遠山古墳の築造をになった集団はどこにいたのであろうか。注目される遺跡は間山遺跡(中野市教育委員会

1993年)である。本遺跡からは当該期と考えられる東海系土器が多出しており、銅鏃(神田五六)も発見されている。

なぜ高遠山古墳は前方後方墳ではないのか。高遠山古墳築造以前の中野市の様相は、前方後方墳と東海系土器に示されるように、東海地域との関係を表している。中野市のように前方後方墳から前方後円墳に転換する他地域との検討が必要である。

当地域は赤塩仁氏によって当該期の編年が提示されている(赤塩仁: 1994年)。高遠山古墳築造は赤塩編年3段階直後と考えられる。赤塩編年3段階以後の当地域の編年を明確にし、畿内・東海・東国といった諸地域の動向と関連させながら、高遠山古墳築造前後の地域様相を把握することが今後の課題となろう。

引用・参考文献

- 赤塩 仁 1994年「弥生時代後期後半から古墳時代初頭の土器編年」『栗林遺跡・七瀬遺跡』長野県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 1990年『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
- 石川孝古学研究会 1978年「江沼古墳群分布調査報告 石川県主要古墳群分布調査第3年度」『石川孝古学研究会会誌』第21号
- 小矢部市教育委員会 1988年『谷内16号墳』
- 更埴市教育委員会 1992年『史跡 森將軍塚古墳』
- 田川幸生・松沢芳宏 1982年「蟹沢古墳・高遠山古墳・姥嶺古墳」『長野県史』考古資料編 全一卷（二）主要遺跡（北・東信）
- 田中 祐 1996年「前方後円墳の企画と地域社会」『考古学雑報・西野元先生退官記念論文集』西野元先生退官記念会
- 土屋 積 1994年「善光寺平北部の古墳と地域集団」『栗林遺跡・七瀬遺跡』長野県埋蔵文化財センター
- 都出比呂志 1992年「墳丘の型式」『古墳時代の研究』大阪大学文学部
- 中野市教育委員会 1999年『安源寺城跡遺跡』
- 中野市教育委員会 1995年『安源寺遺跡』
- 長野県埋蔵文化財センター 1994年『栗林遺跡・七瀬遺跡』
- 長野市教育委員会・更埴市教育委員会 1987年『土口將軍塚古墳』
- 松本市教育委員会 1978年『弘法山古墳古墳』

写真図版



写真2 高遠山古墳遠景



写真3 高遠山古墳墳丘（東方から）



写真4 後円部墳頂

写真5 主体部全景（西から）



写真6 主体部全景（東から）



写真7 第1号棺（西から）





写真8 第1号棺（東から）



写真9 剣・鐵鏃出土状況



写真10 剣1出土状況

写真 11 剣 2・鍬鏑先出土状況

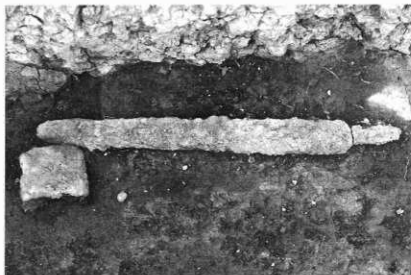


写真 12 土器出土状況



写真 13 ヤリガンナ出土状況





写真 14 網鏝・管玉出土状況

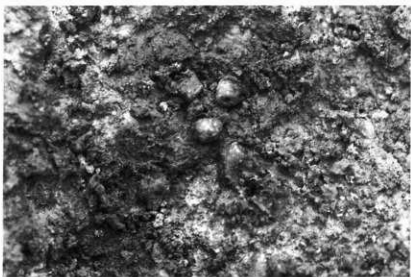


写真 15 ガラス玉出土状況



写真 16 第2号棺（西から）

写真 17 第2号棺 (東から)



写真 18 第2号棺礎床 (西から)



写真 19 第2号棺礎床 (東から)



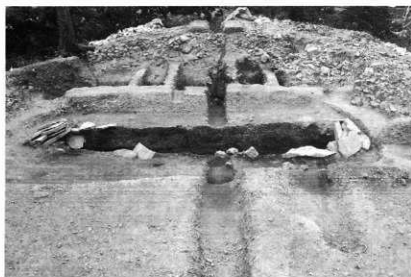


写真20 第2号棺（南から）



写真21 第2号棺東側小口石



写真22 第2号棺東側小口石立面

写真 23 第2号棺西侧小口石



写真 24 第2号棺西侧小口石立面



写真 25 鉄斧出土状況

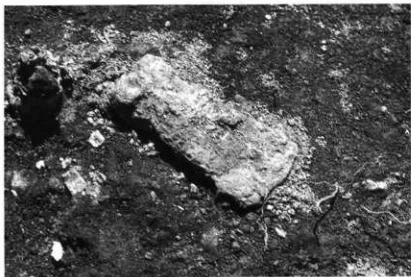




写真 26 高坏脚部出土状況



写真 27 壺形土器出土状況

高遠山古墳発掘調査概報

印 刷 平成12年3月20日
発 行 日 平成12年3月20日
編 集・発 行 中野市教育委員会
中野市三好町1-3-19
印 刷 所 文化堂印刷